

# 御 蔵 遺 跡

第4・6・14・32次発掘調査報告書

御菅西地区震災復興土地区画整理事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2001年 3月

神戸市教育委員会



御蔵遺跡遠景（南西から）



調査地遠景（北から）

カラー図版2



5丁目南地区 第2調査区 土器漏まり出土土器



6丁目北地区 第2調査区 ST01 出土土器

# 御 蔵 遺 跡

第4・6・14・32次発掘調査報告書

御菅西地区震災復興土地区画整理事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2001年3月

神戸市教育委員会

# 序

阪神・淡路大震災の発生から、6年の歳月が過ぎました。この震災によって神戸市内の各地では、大変大きな被害を被りました。本書の発掘調査が行われた長田区は、特に被害が甚大なところでした。中でも御菅通・菅原通一带は地震直後の火災にも遇い特に被害の大きかった地区でした。

震災後神戸市は、この地域を神戸国際港都建設事業御菅西地区震災復興土地区画整理事業区域と定め、復興に努めてまいりました。この土地区画整理事業の進捗にあわせ、今回報告する御蔵遺跡の埋蔵文化財発掘調査を進め、弥生時代後期末から平安時代末にかけての多数の遺構や遺物が発見されました。

発掘調査が完了した区域から随時計画に沿った土地区画整理事業が進み、新たな街づくりがはじまっています。

本書の報告にある過去の人々の営為に思いを馳せるとともに過去の経験を活かす一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に御協力いただいた方々、関係諸機関に厚く御礼申しあげます。

2001年3月  
神戸市教育委員会  
教育長 木村良一



## 例 言

1. 本書は、神戸国際港部建設事業御菅西地区震災復興土地地区画整理事業に伴い、神戸市都市計画局より委託され、神戸市教育委員会・(財)神戸市体育協会が実施した、御蔵遺跡の第4・6・14・32次の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。なお、第38次調査については、平成12年8月31日時点で終了した調査までの報告である。
2. 本報告の発掘調査地点は神戸市長田区御蔵通5丁目・6丁目に所在する。
3. 第6次調査と14次調査の調査回数については調査時には別の回数で呼称していたが、本報告によって「第6次」と「第14次」に訂正する。調査時の旧回数と新回数の対照については第1章第4節の表1を参照されたい。なお、遺物・図面・写真等は、旧回数を記載して保管している。
4. 発掘調査は第4・6次調査は平成10年度、第14次調査は平成11年度、第32次調査は平成12年度に実施した。各調査の調査期間・調査面積・調査担当者等は、第1章第4節の表1に記載してある通りである。
5. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の50,000分の1の地形図「神戸」・「須磨」を、詳細位置図は、神戸市発行の2500分の1の地形図「大橋」の一部を使用した。
6. 本書に用いた方位・座標は平面直角座標系第V系で、当遺跡では真北から30°、磁北から7°10'東に振る。標高はT、P、で表示した。
7. 本書の執筆は第2章～第4章については第1章第4節の表1に記載した各調査担当者が執筆し、第1章については石島三和、第6章については安田滋が執筆した。編集に関しては、第2章を安田、第3章を富山直人、第4・5章を石島がそれぞれ編集し、全体を安田が編集した。
8. 第5章自然科学分析についてはバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
9. 遺構写真は各調査担当者が撮影した。遺物写真については奈良国立文化財研究所 牛嶋 茂氏の指導を得て、牛嶋氏および杉本和樹氏が撮影した。また、金属製品のX線写真については千種浩・中村大介が撮影した。
10. 本調査で出土した人骨については京都大学遺長類研究所教授 片山 一 道氏に御教示いただいた。
11. 本調査で出土した獣骨・歯については奈良国立文化財研究所主任研究官 松井 章氏に御教示いただいた。



# 目 次

序	
例言	
第1章 はじめに	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 遺跡の概要	2
第3節 周辺の遺跡分布	4
第4節 調査の方法	7
第5節 調査体制	9
第2章 5丁目北地区の調査	11
第1節 調査区の設定	11
第2節 基本層序	12
第3節 第1調査区	13
1. 概要	13
2. 弥生時代後期末の遺構	13
3. 弥生時代後期末の遺物	17
4. 奈良時代～平安時代の遺構と遺物	19
第4節 第2調査区	22
1. 概要	22
2. 弥生時代後期末の遺構	22
3. 弥生時代後期末の遺物	22
第5節 第3調査区	25
1. 概要	25
2. 弥生時代後期末の遺構	25
3. 奈良時代～平安時代の遺構	25
第6節 第4調査区	27
1. 概要	27
2. 弥生時代後期末の遺構	27
3. 弥生時代後期末の遺物	27
4. 奈良時代～平安時代の遺構	29
第7節 小結	30
第3章 6丁目北地区の調査	31
第1節 調査区の設定	31
第2節 6丁目北地区の調査の概要	32
1. 基本層序	32
2. 調査概要	33
第3節 第1調査区	35
1. 基本層序	35

2.	遺構	36
3.	出土遺物	41
第4節	第2調査区	48
1.	基本層序	48
2.	遺構	50
3.	出土遺物	60
第5節	第3調査区	63
1.	基本層序	63
2.	遺構	64
3.	出土遺物	64
第6節	第4調査区	65
1.	基本層序	65
2.	遺構	66
3.	出土遺物	67
第7節	第5調査区	68
1.	基本層序	68
2.	遺構	68
3.	出土遺物	71
第8節	第6調査区	72
1.	基本層序	72
2.	遺構	72
第9節	第7調査区	74
1.	基本層序	74
2.	遺構	74
3.	出土遺物	76
第10節	小結	76
第4章	5丁目南地区の調査	77
第1節	調査区の設定	77
第2節	基本層序	78
第3節	第1調査区	80
1.	概要	80
2.	弥生時代後期末の遺構	80
3.	調査区の旧地形	81
第4節	第2調査区	82
1.	概要	82
2.	弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺構	82
3.	弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺物	85
4.	奈良時代～平安時代および中世の遺構	90

5.	奈良時代～平安時代および中世の遺物	93
第5節	第3調査区	94
1.	概要	94
2.	奈良時代～平安時代の遺構	94
第6節	第4調査区	95
1.	概要	95
2.	奈良時代～平安時代の遺構	95
3.	出土遺物	95
第7節	第5調査区	101
1.	概要	101
2.	弥生時代後期末～中世の遺構	101
第8節	第6調査区	102
1.	概要	102
2.	遺構	102
3.	遺構面以下層	105
4.	出土遺物	105
第9節	小結	106
第5章	6丁目南地区の調査	107
第1節	調査区の設定	107
第2節	基本順序	108
第3節	第1調査区	109
1.	概要	109
2.	弥生時代後期末の遺構	109
3.	奈良時代～平安時代および中世の遺構	109
第4節	第2調査区	110
第5節	第3調査区	111
1.	概要	111
2.	洪水砂以下層	111
3.	奈良時代～平安時代の遺構	111
4.	中世の遺構	111
第6節	第4調査区	112
1.	概要	112
2.	奈良時代～平安時代の遺構	112
第7節	第5調査区	113
第8節	小結	113
第6章	自然科学分析	114
御蔵遺跡から出土した木製品等の樹種		114
第7章	まとめ	129

## 插图目次

第1章					
第1图	御蔵遺跡位置図	1	第45图	第1調査区S E101井戸検実測図	46
第2图	御蔵遺跡位置図	2	第46图	6丁目北地区出土金属製品実測図	47
第3图	調査区配置図	3	第47图	第2調査区基本層序模式図	48
第4图	御蔵遺跡周辺の道路分布図	5	第48图	第2調査区上層断面図位置図	48
第2章			第49图	第2調査区第2遺構北面・中央遺構平面図	49
第5图	5丁目北地区調査区配置図	11	第50图	第2調査区南遺構平面図	50
第6图	5丁目北地区基本層序模式図	12	第51图	第2調査区S K201断面図	51
第7图	第1調査区弥生時代後期末遺構平面図(1)	14	第52图	第2調査区S K102平面・断面図	52
第8图	第1調査区弥生時代後期末遺構平面図(2)	15	第53图	第2調査区S F102平面・断面図	52
第9图	第1調査区弥生時代後期末遺構平面図(3)	16	第54图	第2調査区第1遺構北面・中央遺構平面図	53
第10图	第1調査区SK301平面・立面図	16	第55图	第2調査区S E223平面図	54
第11图	第1調査区SD308平面図	16	第56图	第2調査区S T101平面・断面図	55
第12图	第1調査区弥生時代後期末出土遺物実測図	17	第57图	第2調査区S T102平面・断面図	56
第13图	第1調査区奈良時代～平安時代遺構平面図(1)	18	第58图	第2調査区S T103平面・断面図	56
第14图	第1調査区奈良時代～平安時代遺構平面図(2)	19	第59图	第2調査区S T104平面・断面図	57
第15图	第1調査区奈良時代～平安時代遺構平面図(3)	20	第60图	第2調査区S T105平面・断面図	58
第16图	第1調査区S B201平面・断面図	21	第61图	第2調査区S T106平面・断面図	58
第17图	第1調査区SP201出土銅鏡実測図	21	第62图	第2調査区S T107平面・断面図	59
第18图	第2調査区弥生時代後期末遺構平面図(1)	23	第63图	第2調査区S T108平面・断面図	60
第19图	第2調査区弥生時代後期末出土遺物実測図	24	第64图	第2調査区遺構・黒褐色シルト層出土遺物実測図	61
第20图	第2調査区弥生時代後期末遺構平面図(2)	24	第65图	第2調査区S T101出土遺物実測図	62
第21图	第3調査区SE301平面・断面図	25	第66图	第2調査区S T104出土遺物実測図	62
第22图	第3調査区遺構平面図	26	第67图	第2調査区灰色シルト層出土遺物実測図	62
第23图	第4調査区弥生時代後期末出土遺物実測図	27	第68图	第3調査区基本層序模式図	63
第24图	第4調査区弥生時代後期末遺構平面図	28	第69图	第3調査区上層断面図位置図	63
第25图	第4調査区奈良時代～平安時代遺構平面図	29	第70图	第3調査区東遺構平面図	64
第3章			第71图	第3調査区西遺構平面図	64
第26图	6丁目北地区調査区配置図	31	第72图	第3調査区灰色シルト層出土遺物実測図	64
第27图	6丁目北地区基本層序模式図	32	第73图	第4調査区基本層序模式図	65
第28图	6丁目北地区土層断面図位置図	32	第74图	第4調査区土層断面図位置図	65
第29图	6丁目北地区中世遺構配置図	33	第75图	第4調査区東下層遺構平面図	66
第30图	6丁目北地区平安時代遺構配置図	33	第76图	第4調査区東上層遺構平面図	66
第31图	第1調査区基本層序模式図	35	第77图	第4調査区西遺構平面図	67
第32图	第1調査区土層断面図位置図	35	第78图	第4調査区灰色シルト層出土遺物実測図	67
第33图	第1調査区S F201平面・立面図	36	第79图	第4調査区基本層序模式図	68
第34图	第1調査区北遺構全体平面図	37	第80图	第5調査区土層断面図位置図	68
第35图	第1調査区S E101平面・断面図	38	第81图	第5調査区東遺構平面図	69
第36图	第1調査区中央遺構全体平面図	39	第82图	第5調査区西・中央遺構平面図	70
第37图	第1調査区南遺構全体平面図	40	第83图	第5調査区遺構・灰色シルト層出土遺物実測図	71
第38图	第1調査区第3遺構・SE201出土遺物実測図	41	第84图	第5調査区灰色シルト層出土遺物実測図	71
第39图	第1調査区SE201出土遺物実測図	42	第85图	第6調査区基本層序模式図	72
第40图	第1調査区第2遺構面ビット出土遺物実測図	42	第86图	第6調査区土層断面図位置図	72
第41图	第1調査区SE101・SR102出土遺物実測図	43	第87图	第6調査区東遺構平面図	73
第42图	第1調査区黒褐色シルト下層出土遺物実測図	43	第88图	第7調査区基本層序模式図	74
第43图	第1調査区黒褐色シルト出土遺物実測図	44	第89图	第7調査区土層断面図位置図	74
第44图	第1調査区SP201・SE101出土金属製品実測図	45	第90图	第7調査区西遺構平面図	75
			第91图	第7調査区東遺構平面図	75
			第92图	第7調査区暗灰褐色シルト層出土遺物実測図	76

#### 第4章

第93図	5丁目南地区調査区配置図	77	第108図	第4調査区S E 201井戸枠実測図(1)	99
第94図	5丁目南地区基本層序模式図	78	第109図	第4調査区S E 201井戸枠実測図(2)	100
第95図	第1調査区弥生時代後期末遺構平面図	81	第110図	第5調査区遺構平面図	101
第96図	第2調査区弥生時代後期末遺構平面図	83	第111図	第6調査区遺構平面図	103
第97図	第2調査区S X 301平面・断面図	84	第112図	第6調査区S B 207平面・断面図	104
第98図	第2調査区S K 301出土遺物実測図	86	第113図	第6調査区S K 301出土遺物実測図	105
第99図	第2調査区土器溜まり出土遺物実測図	87			
第100図	第2調査区S X 301出土遺物実測図	89	第5章		
第101図	第2調査区奈良時代～平安時代遺構平面図	91	第114図	6丁目南地区調査区配置図	107
第102図	第2調査区S B 201平面図	92	第115図	6丁目南地区基本層序模式図	108
第103図	第2調査区奈良時代～平安時代出土遺物実測図	93	第116図	第1調査区弥生時代後期末遺構平面図	109
第104図	第3調査区遺構平面図	94	第117図	第1調査区奈良時代～平安時代・中世遺構平面図	110
第105図	第4調査区遺構平面図	96	第118図	第3調査区奈良時代～平安時代遺構平面図	111
第106図	第4調査区S E 201平面・断面図	96	第119図	第4調査区奈良時代～平安時代遺構平面図	112
第107図	第4調査区S E 201出土遺物実測図	97			

#### 付図

- 付図1 御蔵遺跡 第6・14・32次調査遺構図(弥生時代後期末)  
 付図2 御蔵遺跡 第6・14・32次調査遺構図(古代)

#### 挿図写真目次

挿図写真1	墨書土器55赤外線写真	43
挿図写真2	転用硯57使用痕跡微鏡写真(×17)	45
挿図写真3	転用硯57使用痕跡微鏡写真(×34)	45
挿図写真4	鉤尾X線写真	47
挿図写真5	包含層出土鉄貨	93
挿図写真6	包含層出土鉄貨X線写真	93
挿図写真7	木材(1)	123
挿図写真8	木材(2)	124
挿図写真9	木材(3)	125
挿図写真10	木材(4)	126
挿図写真11	木材(5)	127
挿図写真12	木材(6)	128

#### 表目次

第1章	表1	御蔵遺跡 御蔵西地区震災復興土地地区西整理事業に伴う発掘調査一覧	8
第5章	表2	御蔵遺跡の樹種同定結果	119～121
	表3	時期別・用途別種類構成	122

#### カラー図版

- カラー図版1 御蔵遺跡遠景(南西から)  
 調査地遠景(北から)  
 カラー図版2 5丁目南地区第2調査区土器溜まり出土土器  
 6丁目北地区第2調査区S T 101出土土器

## 図版

### 5 丁目北地区

- 図版 1 第1調査区東西×西弥生時代後期末遺構面全景（東から）  
第1調査区東西区中弥生時代後期末遺構面全景（東から）  
第1調査区東西区東弥生時代後期末遺構面全景（西から）  
第1調査区南北区北弥生時代後期末遺構面全景（南から）  
第1調査区南北区北弥生時代後期末遺構面全景（南から）  
第1調査区南北区中弥生時代後期末遺構面全景（北から）  
第1調査区南北区南弥生時代後期末遺構面全景（北から）
- 図版 2 第1調査区S K301 遺物出土状況（北から）  
第1調査区S D303 遺物出土状況（北から）  
第1調査区東西区東奈良時代～平安時代遺構面全景（西から）  
第1調査区南北区北奈良時代～平安時代遺構面全景（南から）  
第1調査区南北区中奈良時代～平安時代遺構面全景（北から）  
第1調査区南北区南奈良時代～平安時代遺構面全景（南から）
- 図版 3 第1調査区S B201（北から）
- 図版 4 第2調査区東西区全景（東から）  
第2調査区南北区北全景（南から）  
第2調査区南北区南全景（北から）
- 図版 5 第3調査区第3遺構面全景（東から）  
第3調査区第2遺構面全景（東から）  
第3調査区第1遺構面全景（東から）  
第3調査区S E301（北から）
- 図版 6 第4調査区東遺構面全景（西から）  
第4調査区西弥生時代後期末遺構面全景（東から）  
第4調査区西S P301 遺物出土状況（北から）  
第4調査区西S P302 遺物出土状況（北から）  
第4調査区内奈良時代～平安時代遺構面全景（東から）
- 図版 7 第1調査区出土遺物
- 図版 8 第2調査区出土遺物
- 図版 9 第3調査区出土遺物
- 図版 10 5丁目北地区出土金属製品

### 6 丁目北地区

- 図版 11 第1調査区南第3遺構面全景（南から）  
第1調査区中央第3遺構面全景（北から）  
第1調査区南第2遺構面全景（南から）  
第1調査区中央第2遺構面全景（北から）
- 図版 12 第1調査区南S E201 検出状況（東から）  
第1調査区南S E201 石敷検出状況（東から）  
第1調査区南S E201 断削り状況（東から）
- 図版 13 第1調査区中央第2遺構面全景（南から）  
第1調査区第1遺構面全景（南から）  
第1調査区中央第1遺構面全景（南から）  
第1調査区中央S F101 全景（東から）
- 図版 14 第2調査区中央第2遺構面全景（北から）  
第2調査区南第2遺構面全景（南から）  
第2調査区南第2遺構面全景（北から）
- 図版 15 第2調査区中央第2遺構面全景（南から）  
第2調査区中央第1遺構面全景（南から）  
第2調査区中央第1遺構面全景（北から）

図版16	第2調査区北第1遺構面全景（北から） 第2調査区北第1遺構面全景（南から） 第2調査区北木棺墓群検出状況（北から） 第2調査区S T 101 検出状況（南から）
図版17	第2調査区S D 223 全景（西から） 第2調査区S K 102 全景（南から） 第2調査区中央第1遺構面全景（北から）
図版18	第2調査区S T 101・103 全景（南から） 第2調査区S T 101 全景（西から） 第2調査区S T 101 遺物出土状況（南から）
図版19	第2調査区S T 101 全景（南から） 第2調査区S T 103 全景（北から） 第2調査区S T 102 全景（北から） 第2調査区S T 104 全景（南から）
図版20	第2調査区S T 104 遺物出土状況（南から） 第2調査区S T 105 全景（北から） 第2調査区S T 106 全景（南から） 第2調査区S T 107 全景（南から）
図版21	第3調査区南西全景（西から） 第3調査区北東全景（東から） 第3調査区東全景（東から） 第3調査区北西全景（東から）
図版22	第4調査区中央下層全景（西から） 第4調査区東水田検出状況（東から） 第4調査区西上層全景（西から） 第4調査区中央上層全景（西から）
図版23	第5調査区西全景（北から） 第5調査区中央全景（東から） 第5調査区東全景（南から）
図版24	第6調査区東下層全景（西から） 第6調査区東上層全景（西から）
図版25	第7調査区西全景（西から） 第7調査区東下層全景（西から） 第7調査区西全景（西から） 第7調査区東上層全景（東から）
図版26	第1調査区第3遺構面遺構出土遺物 第1調査区S E 201 出土遺物
図版27	第1調査区S E 201 出土遺物 第1調査区第2遺構面遺構出土遺物
図版28	第1調査区第1遺構面遺構および包含層出土遺物 第1調査区暗灰褐色シルト層出土遺物 第1調査区暗灰褐色シルト下層出土黒土器
図版29	第1調査区暗灰褐色シルト層出土遺物
図版30	第1調査区暗灰褐色シルト層出土遺物 第1調査区S E 201 出土土層骨 第1調査区S E 101 出土木製品
図版31	第1調査区S E 101 井戸枠材
図版32	第1調査区S E 101 井戸枠部材 第1調査区S E 101 井戸枠部材（ダボ） 第1調査区包含層出土帯金具 6丁目北地区出土金属製品および銅滓
図版33	第2調査区遺構出土遺物
図版34	第2調査区S T 101 出土遺物

- 図版34 第2調査区S T101 出土遺物  
 図版35 第2調査区S T101 出土遺物  
 図版36 第2調査区S T104 出土遺物  
 第2調査区北暗灰褐色シルト下層出土遺物  
 図版37 第2調査区灰色シルト層出土遺物  
 第4調査区暗灰褐色シルト下層出土遺物  
 第3～5調査区灰色シルト層出土遺物  
 図版38 第2調査区S T107 出土人骨  
 第2調査区S T104 出土人骨  
 6丁目北地区出土獣骨

#### 5丁目南地区

- 図版39 第1調査区弥生時代後期末遺構面全景（東から）  
 第1調査区北壁土層断面  
 第2調査区弥生時代後期末遺構面全景（東から）  
 図版40 第2調査区S X301 遺物出土状況（北から）  
 第2調査区北壁土層断面  
 第2調査区S B201（西から）  
 図版41 第2調査区奈良時代～平安時代遺構面全景  
 図版42 第2調査区S B201 北列西柱穴断面（北から）  
 第2調査区S B201 北列中央柱穴断面（北から）  
 第5調査区全景（西から）  
 図版43 第6調査区全景  
 図版44 第6調査区S B201（南から）  
 第6調査区S B204 北柱穴断面（東から）  
 第6調査区S B204 南柱穴断面（東から）  
 図版45 第2調査区S K301 出土遺物  
 第2調査区上器溜まり出土遺物(1)  
 図版46 第2調査区上器溜まり出土遺物(2)  
 図版47 第2調査区S X301 出土遺物(1)  
 図版48 第2調査区S X301 出土遺物(2)  
 図版49 第2調査区S X301 出土遺物(3)  
 図版50 第2調査区S X301 出土遺物(4) および上器溜まり出土搬入土器  
 図版51 第4調査区S E201 井戸枠材(1)  
 図版52 第4調査区S E201 井戸枠材(2)  
 図版53 第4調査区S E201 井戸枠材(3) およびS E201 出土遺物(1)  
 図版54 第4調査区S E201 S E201 出土遺物(2)  
 図版55 第6調査区S K301 出土遺物  
 第5調査区出土遺物  
 5丁目南地区出土鉄製品  
 図版56 第2調査区出土鉾  
 5丁目南地区出土獣骨

#### 6丁目南地区

- 図版57 第2調査区全景（西から）  
 第3調査区S D201（西から）  
 第3調査区南壁土層断面（北から）

# 第1章 はじめに

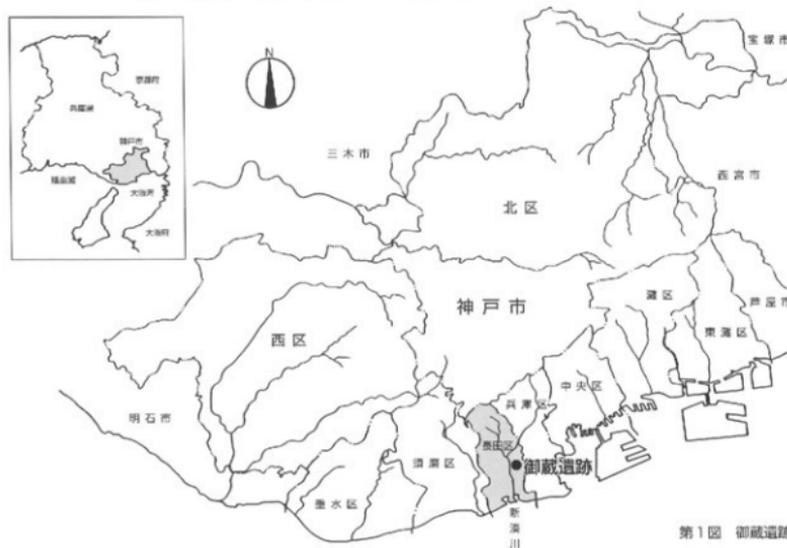
## 第1節 調査にいたる経緯

**御蔵遺跡の概要** 御蔵遺跡は、神戸市長田区御蔵通4丁目から7丁目および、一番町5丁目一帯にかかる範囲に存在し、その広さは現時点では約8.9ヘクタールに及ぶ。

長田区周辺は神戸市域でも古くから市街地化が進み、人口密集地帯であったため、地下に眠る遺跡の存在についてはこれまであまり知られていなかったが、平成7年の阪神・淡路大震災によって被災地となり、その後の復興事業が進むにつれ、長田区、兵庫区といった市街地地域も次々と新しい遺跡の存在が確認されることとなった。

**発掘調査件数の増加** 御蔵遺跡がはじめて調査されたのは平成2年のことで、遺跡の存在自体は震災以前から周知されていたが、遺跡の存在する御蔵通付近が市内でも最も地震による被害の大きかった地区のひとつであったため、震災復興事業を契機として、それに伴う発掘調査件数が飛躍的な伸びを示す状況となった。

**本書の概要** 本書はそれら復興事業に伴う発掘調査のうち、神戸市による、震災復興のための「御菅西地区震災復興土地区画整理事業」に伴う発掘調査に関する報告書である。「御菅西地区」とは、御蔵通5丁目および6丁目を指す。調査は、平成10年度に開始され、平成12年度現在も継続中である。調査の対象となるのは、遺跡の範囲のうち、御蔵通5丁目および6丁目内の、区画整理事業により区画道路および歩行者専用道路となる部分である。そのうち平成12年8月の時点で調査が終了しているのは、約2,800㎡となり、本書には、平成10年度から平成12年度8月末日までの期間に行なわれた発掘調査の結果について掲載した。



第1図 御蔵遺跡位置図

## 第2節 遺跡の概要

兵庫県神戸市長田区御蔵通付近に存在する御蔵遺跡は、平成2年度にはじめて発掘調査が行なわれた遺跡で、市内の遺跡の中でも比較的近年になって知られるようになったといえる。その後の試掘調査などによって得られたデータから、遺跡は御蔵通7丁目を西限に、東は一番町5丁目から御蔵通4丁目一帯まで広がっていると考えられており、その広さは現在判っている範囲で約8.9ヘクタールに及ぶ。

### 地理学的立地

遺跡の立地する御蔵通付近は、地理学的には、遺跡の西方を流れる新湊川（旧刈藻川）の堆積作用によって形成された自然堤防の微高地および後背湿地に位置している。

平成2年の第1次発掘調査以降、遺跡内での発掘調査は行なわれていなかったが、平成7年におこった阪神・淡路大震災後の復興事業により、復興事業関連の事前調査件数は急速に増加することとなった。

### 遺跡の年代

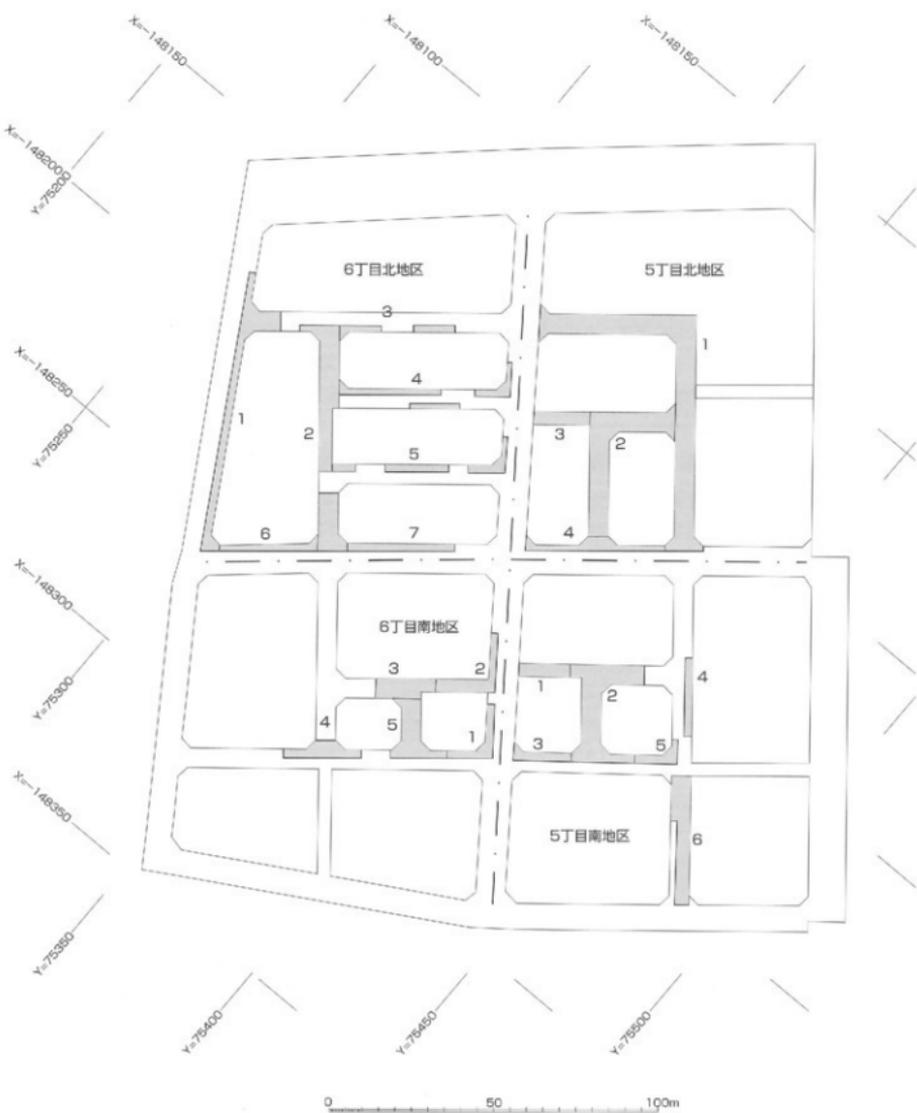
これまでの調査の結果、御蔵遺跡は、縄文時代の終わり頃にはすでに人が住み始め、その後も弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代から中世まで連続と人間の生活が営まれ、その痕跡が何層にも重なって地中に眠っている複合遺跡であることが判っている。

### 「御菅西地区」 における 発掘調査

先の項で述べたように、本書は平成10年度から開始された、神戸市による「御菅西地区震災復興土地地区画整理事業」に伴う発掘調査報告だが、このような公共事業以外にも、民間事業を原因とする調査も多く行なわれており、第1次調査以降、平成12年8月現在、民間、公共双方が原因となるものをあわせて、38次計78回の調査が行なわれている。



第2図 御蔵遺跡位置図 (S=1/5,000)



第3図 調査区配置図(数字は各調査区を表す)

### 第3節 周辺の遺跡分布

御蔵遺跡のある神戸市長田区周辺は、古くは旧石器時代よりその歴史をとどめ今にいたる、あまたの人間活動の痕跡が残される地である。周辺の遺跡を概観し、御蔵遺跡がどのような歴史的環境のなかで発達したかを知ることとしよう。

#### 旧石器時代

御蔵遺跡の北側には、旧石器時代のナイフ形石器が採集されたことで知られる、会下山遺跡がある。しかしこの地で旧石器人たちがどんな風に暮らしていたかは、現在まで詳しくわかっていない。

#### 縄文時代

縄文時代のはじめには、中央区の宇治川南遺跡や雲井遺跡が早期の土器を出土する遺跡として知られている。神戸市内でどのように縄文時代が始まったかは、まだまだ謎の多いところだが、縄文時代も晩期に入ると、急速に遺跡の発見例が増える。

兵庫区から長田区にかけて存在する上沢遺跡も、縄文時代晩期の突帯文土器が出土する遺跡として知られているが、これまでの調査で住居址などの具体的な人間の生活跡が発見された例はなく、実態は謎に包まれたままである。御蔵遺跡の周辺で、同じように縄文時代晩期の突帯文土器が出土する遺跡としては、大手町遺跡や長田神社境内遺跡、五番町遺跡、三番町遺跡、戎町遺跡、などが知られている。

#### 弥生時代

この地域では、縄文時代晩期の土器が弥生時代前期の土器と一緒に出土することが多く、弥生時代の始まりについて考えるための問題を投げかけているが、先述の上沢遺跡もその例外ではない。近接する兵庫区の大開遺跡は、弥生時代前期の環濠集落として名高いが、ここでは神戸市内でも珍しい弥生時代前期初頃の土器と、縄文時代晩期の土器と一緒に出土していて、この地で最も古い弥生時代集落がどのように始まったかを教えてくれている。

弥生時代中期の遺跡としては楠・荒田町遺跡が有名だが、他にも戎町遺跡や大田町遺跡、大手町遺跡などでこれまでに発掘調査が行われ、この時期の集落遺跡と考えられている。千歳遺跡では、この時期の壺棺などが発見されており、集落の存在が予感されるが、調査例が少なく、実態はいまだ不明である。布引丸山遺跡、熊野遺跡なども、その実態はよくわかっていないが、中期の遺物の採集地として記録が残っている。

弥生時代後期のものとしては、御蔵遺跡で集落や水田跡が発見されているが、そのほか長田神社境内遺跡、神楽遺跡、戎町遺跡、松野遺跡、大手町遺跡などが集落遺跡と考えられている。

#### 古墳時代

古墳時代の遺跡としては、御蔵遺跡の近隣には、得能山古墳、会下山二本松古墳、夢野丸山古墳の3つの古墳が、古墳時代前期のものとして知られている。この時期の遺跡はこれまであまりみつかっていなかったが、最近の発掘調査の結果、御蔵遺跡はほぼ同時期の集落と考えられる。

上沢遺跡第35次調査区では、古墳時代中期の竪穴住居が発見されており、この遺跡内に中期の集落が存在する可能性を示しているが、その他神楽遺跡、三番町遺跡なども、同じ時期の集落と考えられている。特に神楽遺跡では韓式土器が出土し、松野遺跡では豪族の居館と考えられる建物跡が発見されるなどしてそれぞれ注目されている。このころ造られ



た古墳としては、念仏山古墳があげられる。

古墳時代の後期にもいくつかの古墳が存在していたと考えられているが、実態はよくわかっていない。御蔵遺跡、上沢遺跡にもこの時代の集落があると考えられているが、特に上沢遺跡では、遺物包含層中から多量の玉類が出土するなど、玉造りの遺跡の可能性が高まっているが、今のところそれを裏付ける直接的な遺構などは見つかっていない。そのほか、長田野田遺跡もこの時期の遺跡と考えられている。

#### 奈良時代

奈良時代のものとしては、上沢遺跡で奈良時代の掘立柱建物群が発見されている。

御蔵遺跡は飛鳥時代から平安時代まで続いた集落らしく、この時代の掘立柱建物群が発見されている。上沢遺跡でも平安時代の掘立柱建物は多く見ついているが、その他正倉院御物と近似する銅鏡などが出土した井戸なども最近発見され、付近に官衛ないしは寺院などが存在する可能性が高まっている。

#### 中世

中世に入ると長田区二葉町遺跡では、掘立柱建物や井戸などが数多く見つかり、当時の庶民の生活をほうふつとさせてくれる。ほぼ同じ時期に、御船遺跡でも建物や井戸などが発見されており、近年のこの地域での資料の増加はめざましいものがある。その他大田町遺跡、大手町遺跡でもこの時期の遺構が見つかり、

また、兵庫区付近は、平家にゆかりの深い上地としても有名だが、最近祇園遺跡では、福原京関連の貴族の邸宅と考えられる遺構などが見つかり、注目をあつめた。兵庫津遺跡は、長く平清盛に關係の深い大輪田泊関連の遺跡と考えられてきたが、これを裏付ける直接的な証拠は発見されていない。

#### 〈参考文献〉

- 『上沢遺跡発掘調査報告書』1995 神戸市教育委員会
- 『平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報』1999 神戸市教育委員会
- 『平成9年度 神戸市埋蔵文化財年報』2000 神戸市教育委員会
- 『祇園遺跡 第5次発掘調査報告書』2000 神戸市教育委員会
- 『神楽遺跡発掘調査報告書』1981 神戸市教育委員会

## 第4節 調査の方法

**調査範囲の設定** 発掘調査は土地区画整理事業の道路築造工事に先行して行われたが、工事の進捗に合わせ、神戸市都市計画局より提示された範囲ごとに調査を行った。そのため、全体が連続する一つの範囲でありながら、実際には提示された順にその中を細かく区切って調査を繰り返すことになった。平成10年度の調査開始以来、平成12年度8月末日までに行った約2,800㎡の範囲は、実際には38回に分けて調査したものである。

今回の調査は道路築造工事予定地に関するものであるため、調査区の全体像は、御蔵通5丁目および6丁目全体を網目状に縦横に走るような形状である。

**調査回数の変更** 神戸市内で行なわれる発掘調査については、すべての遺跡について、着手された順に、各調査ごとに神戸市教育委員会文化財課の定める「調査回数」が付されている。本書に掲載する3ヵ年度分の「御蔵西地区震災復興土地区画整理事業」に伴う発掘調査に関しては、初回調査の「御蔵通跡第4次調査」以降、8頁に示した表中の「旧回数」の項にある数字が回数として付されており、神戸市教育委員会が毎年発行する『神戸市埋蔵文化財年報』にもこの「旧回数」によって調査概要報告が掲載されてきたが、平成12年度より、神戸市委員会内で調査回数の割り振りに関する規定の改正が行なわれたため、すべての過去の回数について整理が行なわれた。その結果、過去のすべての発掘調査について、平成12年度以前に割り振られていた回数を廃し、改めてそれまでと異なる回数が割り当てられることとなった。

この規定の改正に伴い、新しく割り振られた回数と改定前の回数について、それぞれの対応関係を8頁の表1に記した。平成12年度以前の改定前に割り振られた回数が表中の「旧回数」であり、平成12年度以降の改定後に定められた回数が表中の「回数」である。この表をもって、既刊の『神戸市埋蔵文化財年報』に掲載済の調査概要が本報告書中のどの調査区に該当するかを把握する資料とする。

**本書中の「地区」および「調査区」についての定義** また、本報告書では3年間、計38回にわたる調査のすべてを総括的に報告することを目的としているが、複数時にわたる調査内容を整理し、煩雑さを解消するため、3年分の調査完了範囲全体を現地の行政区画にそって、それぞれ「5丁目北地区」、「6丁目北地区」、「5丁目南地区」、「6丁目南地区」の4の地区に分けて報告している。さらに、この4つの地区内を基本的には道路毎に調査区を設定し、この調査区別に調査内容を掲載している。ここでいう調査区とは、同一時期の遺構面が連続して確認された範囲であるため、時には現地調査が複数回にまたがる（調査着手時に割り当てられる回数が異なる複数の調査）ものを一つの調査区として一括している場合もある。表1の「地区名」は大区画としての4つの地区を、「調査区名」は小区画としての各地区内の位置を示している。

次数	旧次数	地区名	調査区名	調査開始日	調査終了日	調査面積	調査担当者
4次	4次	5丁目北	第1調査区	1998年7月6日	1998年7月10日	45㎡	富木 巖
6-1次	6-1次	5丁目北	第4調査区	1998年8月10日	1998年8月25日	100㎡	富山 直人
6-2次	6-2次	5丁目北	第2調査区	1998年8月25日	1998年9月12日	370㎡	富山 直人
6-3次	8-1次	5丁目南	第5調査区	1998年9月12日	1998年9月21日	100㎡	富山 直人
6-4次	9次	6丁目北	第2調査区	1998年9月14日	1998年11月6日	114㎡	西岡 誠司
6-5次	8-2次	5丁目南	第2調査区	1998年10月10日	1998年11月13日	12㎡	口野 博史
6-6次	12次	6丁目北	第2調査区	1998年10月19日	1998年11月10日	70㎡	口野 博史
6-7次	15次	6丁目南	第1調査区	1998年11月25日	1998年11月25日	5㎡	石島 三和
6-8次	17次	6丁目北	第2調査区	1999年2月17日	1999年3月30日	100㎡	富山 直人
6-9次	19次	5丁目南	第2調査区	1999年3月23日	1999年3月27日	5㎡	富山 直人
14-1次	20-1次	5丁目北	第1調査区	1999年4月14日 1999年5月10日	1999年4月27日 1999年5月19日	150㎡	松林 宏典 石島 三和
14-2次	20-2次	5丁目北	第1調査区	1999年5月10日	1999年5月20日	40㎡	石島 三和
14-3次	20-3次	5丁目北	第2調査区	1999年4月27日	1999年5月11日	56㎡	石島 三和
14-4次	20-4次	6丁目南	第2調査区	1999年5月19日	1999年5月26日	30㎡	石島 三和
14-5次	20-5次	6丁目南	第5調査区	1999年5月25日	1999年5月26日	8㎡	石島 三和
14-6次	20-6次	6丁目南	第2調査区	1999年5月26日	1999年5月31日	11㎡	石島 三和
14-7次	20-7次	5丁目南	第1,2調査区	1999年5月31日	1999年6月18日	42㎡	石島 三和
14-8次	20-8次	6丁目北	第5調査区	1999年6月10日	1999年7月02日	143㎡	石島 三和
14-9次	20-9次	5丁目南	第4調査区	1999年6月8日	1999年7月10日	33㎡	池口 毅
14-10次	20-10次	6丁目北	第1調査区	1999年6月9日	1999年6月30日	30㎡	浅谷 誠吾
14-11次	20-11次	6丁目北	第4調査区	1999年6月21日	1999年6月23日	20㎡	安田 滋
14-12次	20-12次	5丁目北	第1調査区	1999年6月30日	1999年7月19日	158㎡	安田 滋
14-13次	20-13次	6丁目北	第4調査区	1999年7月2日	1999年7月12日	68㎡	石島 三和
14-14次	20-14次	6丁目北	第6調査区	1999年7月5日	1999年7月27日	36㎡	阿部 功
14-15次	20-15次	6丁目北	第3調査区	1999年7月12日	1999年7月21日	24㎡	石島 三和
14-16次	20-16次	6丁目南	第1調査区	1999年7月12日	1999年7月19日	40㎡	池田 毅
14-17次	20-17次	5丁目北	第1調査区	1999年7月21日	1999年8月02日	53㎡	石島 三和
14-18次	20-18次	6丁目北	第1調査区	1999年7月19日	1999年8月12日	159㎡	安田 滋
14-19次	20-19次	5丁目南	第3調査区	1999年9月3日	1999年9月30日	30㎡	川上 厚志
14-20次	20-20次	6丁目南	第1,3調査区	1999年11月10日	1999年11月16日	30㎡	富山 直人
14-21次	20-21次	5丁目北	第3調査区	1999年11月22日	1999年12月6日	43㎡	安田 滋
14-22次	20-22次	5丁目南	第6調査区	1999年12月9日	1999年12月24日	85㎡	内藤 俊哉
14-23次	20-23次	5丁目南	第6調査区	2000年2月4日	2000年3月8日	100㎡	阿部 敬生
32-1次	32-1次	5丁目南	第2調査区	2000年4月5日	2000年5月26日	235㎡	口野 博史
32-5次	32-2次	6丁目北	第1調査区	2000年5月15日	2000年5月26日	40㎡	内藤 俊哉
32-3次	32-3次	6丁目北	第7調査区	2000年7月10日	2000年7月18日	40㎡	西岡 功次
32-4次	32-4次	6丁目南	第3調査区	2000年8月4日	2000年8月21日	55㎡	井尻 柁
32-5次	32-5次	6丁目南	第4調査区	2000年8月22日	2000年8月30日	65㎡	関野 豊

表1 御蔵通沿 御曹西地区震災復興土地画整理事業に伴う発掘調査一覧

## 第5節 調査体制

## 平成10年度（第4・6次調査）

神戸市文化財保護審議会委員	史跡・考古担当
檀上重光	前神戸女子短期大学教授
工楽善通	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長
和田晴吾	立命館大学文学部教授
教育委員会事務局	
教育長	鞍本 昌男
社会教育部長	矢野 栄一郎
文化財課長	大勝 俊一
社会教育部主幹	奥田 哲通
埋蔵文化財係長	渡辺 伸行
文化財課主査	丹治 康明
同	丸山 潔
同	菅本 宏明
事務担当学芸員	安田 滋
同	東 喜代秀
同	井尻 格
調査担当学芸員	口野 博史
同	西岡 誠司
同	富山 直人
同	斎木 巖
同	石島 三和
保存科学担当学芸員	千種 浩

## 平成11年度（第14次調査）

神戸市文化財保護審議会委員	史跡・考古担当
檀上重光	前神戸女子短期大学教授
工楽善通	ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長
和田晴吾	立命館大学文学部教授
教育委員会事務局	(財)神戸市体育協会
教育長	会長 笹山 幸俊
社会教育部長	副会長 田村 篤雄
文化財課長	専務理事(兼務) 田村 篤雄
埋蔵文化財係長	常務理事 中野 洋二
文化財課主査	同 静観 圭一
同	総務課長 村田 孝政
同	総務課主幹 中西 光男
事務担当学芸員	同 奥田 哲通
同	同 丹治 康明
同	同 藤井 太郎
調査担当学芸員	同 事務担当学芸員 斎木 巖
同	同 調査担当学芸員 安田 滋
同	同 同 池田 毅
同	同 同 内藤 俊哉
同	同 同 阿部 敬生
同	同 同 浅谷 誠吾
同	同 同 石島 三和
同	同 同 阿部 功

平成12年度（第32次調査）

神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当

檀 上 重 光	前神戸女子短期大学教授
工 楽 善 通	ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長
和 田 晴 吾	立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教 育 長	木村 良一
社会教育部長	水田 裕次
文化財課長	大勝 俊一
社会教育部主幹	渡辺 伸行
(埋蔵文化財指導係長事務取扱)	
事務担当学芸員	西岡 誠司
同	東 喜代秀
同	橋詰 清孝

埋蔵文化財調査係長	丹治 康明
文化財課主査	宮本 郁雄
同	丸山 潔
同	菅本 宏明
事務担当学芸員	山口 英正
遺物整理担当学芸員	谷 正俊
保存科学担当学芸員	千種 浩
同	中村 大介

(財)神戸市体育協会

会長	笹山 幸俊
副会長	木村 良一
同	鞍本 昌男
(専務理事事務取扱)	
同	山田 隆
同	家治川 豊
相談役	加茂川 守
常務理事	静観 圭一
参事	財田 美信
総務課長	前田 惣晴
事業係長	瀬田 吉則
事業係主査(兼務)	丸山 潔
同(兼務)	菅本 宏明
事務担当学芸員	斎木 嶺
調査担当学芸員	西岡 功次
同	口野 博史
同	内藤 俊哉
同	井尻 格
同	関野 熈

## 第2章 5丁目北地区の調査

### 第1節 調査区の設定

5丁目北地区については区画道路および歩行者専用道路築造予定範囲約1015㎡について調査がおこなわれた。土地区画整理事業の進捗に合わせて調査を行ったため2カ年、計9回に分けて調査を実施した。現地での調査時には各調査毎に次数を付けて呼称していたが、本報告では基本的には土地区画整理事業の区画道路および歩行者専用道路毎に調査区を設定した。5丁目北地区内では4つの調査区に設定し直した。また、平成11年度より神戸市全体の発掘調査次数の整理が行われ、平成12年度以降新たな調査次数が付与されたことにより、調査時に付した調査次数に変更が生じた。よって下表により本報告の調査区名と調査時における調査次数および新調査次数の対応を示す。

本報告地区名	旧次数	新次数
第1調査区	4・20-1・20-2・20-12	4・14-1・14-2・14-12
第2調査区	6-2・20-3	6-2・14-3
第3調査区	20-21	14-21
第4調査区	6-1・20-17	6-1・14-17



第5図 5丁目北地区 調査区配置図（数字は各調査区、A～Dは基本順序の位置を表す）

## 第2節 基本層序

5丁目北地区は北から南に向かって緩やかに下っており、第1・2調査区および第4調査区東半部分は、ほぼ同様の層序となっている。但し後世の水田耕作等により削平を受け、地点によって多少層の欠如が生じるが、基本的には奈良時代～平安時代の遺構面と弥生時代後期末の2面の遺構面が存在する。

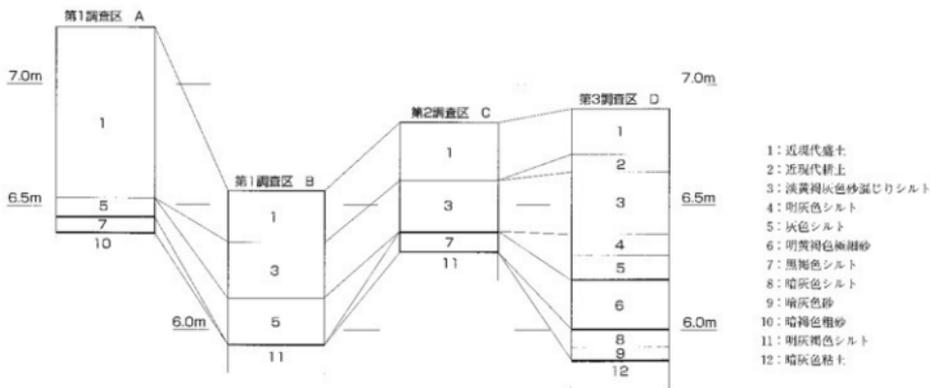
第3調査区と、第4調査区の西半については弥生時代後期末のベースとなる層が急激に下がり洪水砂と湿地状の堆積層が第1遺構面以下に存在する。第2調査区の南北区を境に東は遺構の存在する微高地となり、西は水田等に利用されていた後背湿地であると考えられる。基本層序については、第1・2調査区では基本的には上層から、

1. 近現代の盛土層
2. 淡黄灰色細砂層（中世後期～近世の旧耕土層）
3. 灰色シルト層（奈良時代～平安時代の遺物包含層）
4. 黒褐色シルト層（奈良時代～平安時代の遺構面・弥生時代後期末の遺物包含層）
5. 乳褐色粘土～暗褐色粗砂層（第2遺構面）

となる。第3調査区および第4調査区西半では基本的には上層から、

1. 近現代の盛土層
2. 淡黄灰色細砂層（中世後期～近世の旧耕土層）
3. 灰色シルト層（奈良時代～平安時代の遺物包含層）
4. 明黄褐色細砂層（奈良時代～平安時代の遺構面・洪水砂）
5. 暗灰色シルト層（弥生時代後期末水田耕土層?）
6. 黒褐色粘土層（弥生時代後期末遺構面）

となる。



第6図 5丁目北地区 基本層序模式図

### 第3節 第1調査区

#### 1. 概要

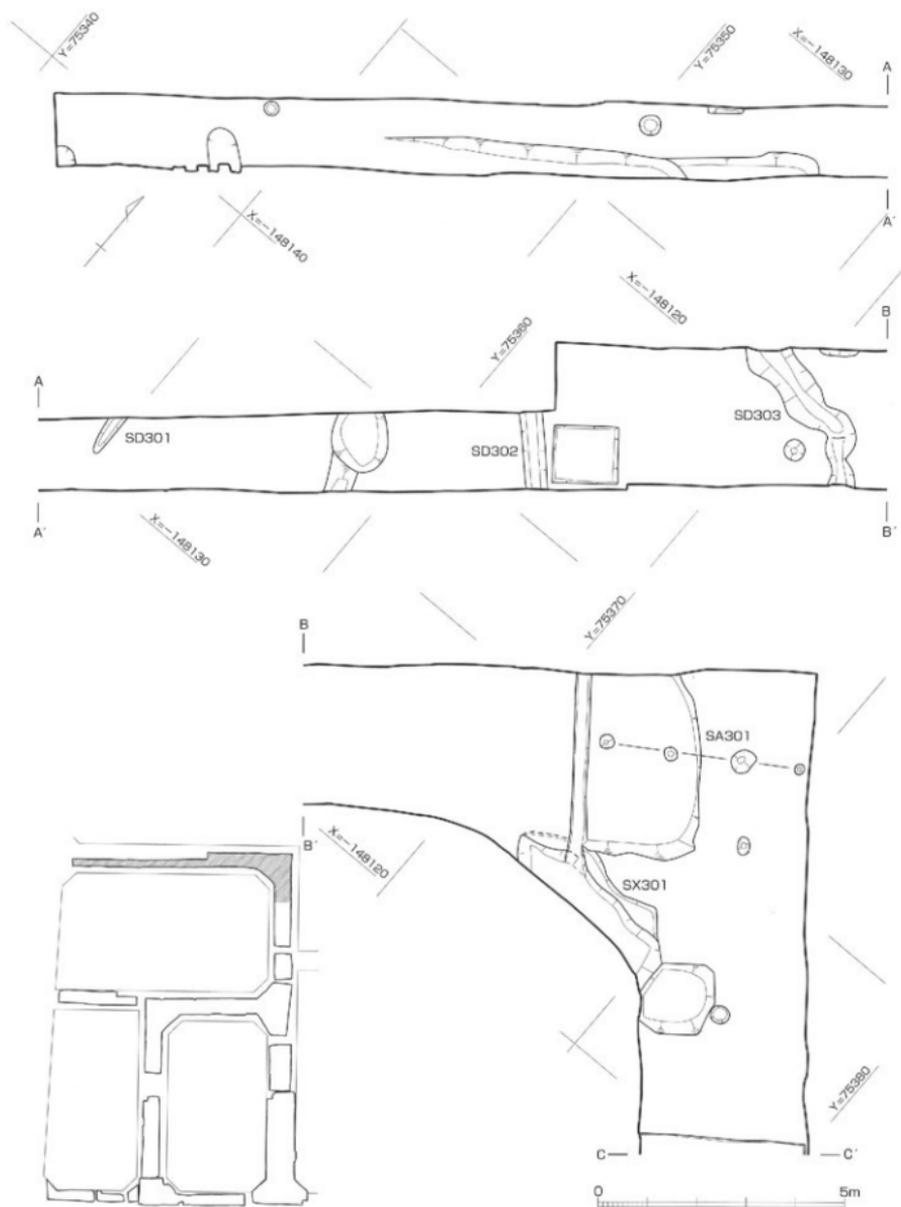
第1調査区は幅6m・長さ約115mの逆L字形に曲がる区西道路部分の調査区である。以下の文章では東西方向の道路部分を東西区、南北方向の調査区を南北区と呼称する。

層序の基本は上層より近現代の盛上・中世から近世の旧耕土・灰色粘土～シルト（奈良時代～平安時代の遺物包含層）・黒褐色粘土（弥生時代後期末の遺物包含層、上面が第1遺構面）・暗褐色粗砂または乳褐色粘土～シルト（上面が第2遺構面）となる。部分的には層の欠落する区域がある。第1遺構面については奈良時代～平安時代の遺構面、第2遺構面については弥生時代後期末（庄内併行期）の遺構面である。

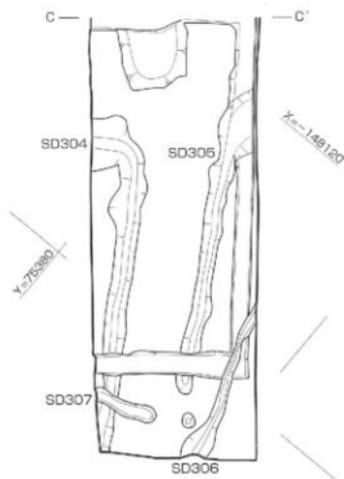
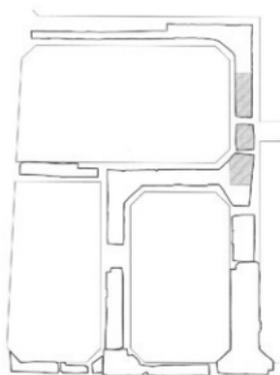
#### 2. 弥生時代後期末の遺構

第1調査区内の第2遺構面では、弥生時代後期末の掘立柱建物1棟・溝9条・土坑2基・落ち込み1基・ピット8基が見つまっている。

- S B301 S B301は南北区の中央部で見つかった掘立柱建物で南北2間、東西1間分が検出されている。柱間は南北2.5m、東西1.7mを測る。北側と東側は調査区外に伸びる可能性がある。柱穴の大きさは直径20cm、深さ20～40cmを測る。
- S K301 S K301は、長径が1.7m、短径が90cm程度で、深さは40～50cmと深い。この土坑の中からは、2～3個体分の甕の破片が出土している。その出土状況から、土坑を掘ってすぐにこれらの土器を中に入れたと考えられる。
- S K302 S K302は、近現代に攪乱された場所にあったため、遺構の上部は削られてなくなり、底の部分だけが浅いくぼみになって見つまっている。調査で確認されたこの遺構の大きさは、長径が1.7m、短径が80cm程度の楕円形で、S K301とほぼ同じ大きさである。深さは約5cmである。
- S D301 S D301は東西区に直交する溝で、幅45cm、深さ7cmの浅い溝である。出土遺物は少ない。
- S D302 S D302は東西区に直交する溝で、幅30cm、深さ6cmの浅い溝である。遺物は出土していない。
- S D303 S D303は東西区に直交する溝で、幅60～80cm、深さが約20cmで、やや不規則に蛇行して南北方向に走っている溝である。
- S D304  
～S D307 S D304～S D307については、南北区の北半に集中している。S D307は東西方向であるが、それ以外は南北に走るものばかりである。そのうち、S D305は、溝の端部分が見つまっている。S D304とS D305は、それぞれ西と東に鉤形に曲がっているが、曲がった先が調査区の外に伸びているため、全体像は不明である。S D306は、この2つとほぼ平行方向だが正確な形はわからない。幅はどの溝も10～20cm、深さはS D304とS D305が約20cm、S D306は10cm程度である。
- S D308 S D308は、南北区のほぼ中央で見つまっているが、一部分が調査区内に掛かっているだけで、大部分は調査地の外になる。幅約45cm、深さは30cm程度だが、大量の土器片が出



第7図 第1調査区 弥生時代後期末 遺構平面図(1)



SD309

上した。出土遺物には壺・甕の他に皮袋形土器も出土している。これは単に廃棄したのか、儀式的な意味のある投棄であるのかは不明である。

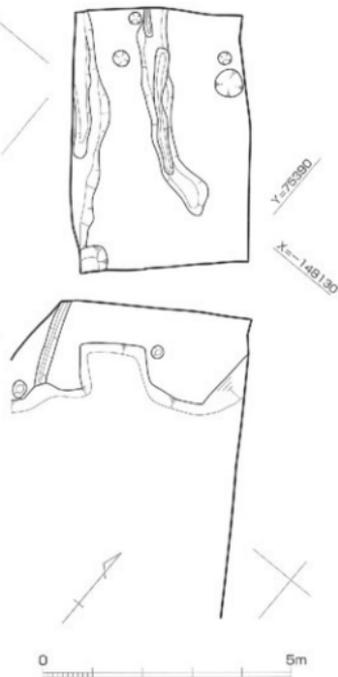
SD309は南北区南半で検出された、幅4.6m、深さ15cmの東西方向の浅い溝状の落ち込みである。埋土は黒褐色シルトで、埋土中から庄内併行期の土器片が多数出土した。自然の浅い流路に土器が溜まったものと考えられる。

SX301

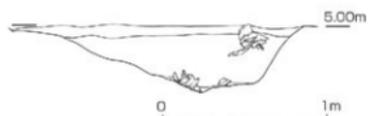
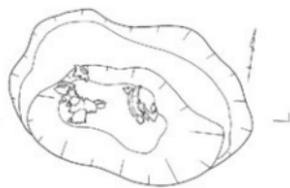
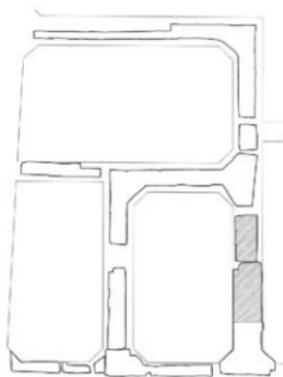
SX301はL字形の調査区のちょうど屈折部分で見つかった深い落ち込み状の遺構である。一部が調査区内に掛かっているのみなので、全体の形や機能は不明である。調査で見つかった範囲での大きさは、長径4m、短径1m程度で、深さは約30cmである。

ビット

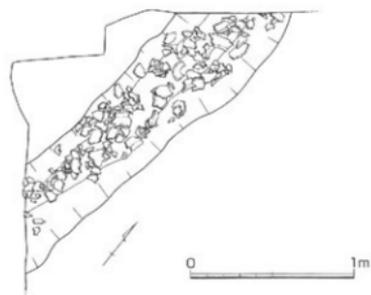
ビットは、調査区の屈折部付近で5基、南北調査区北半の溝群の付近で1基、南北調査区中央部で2基見



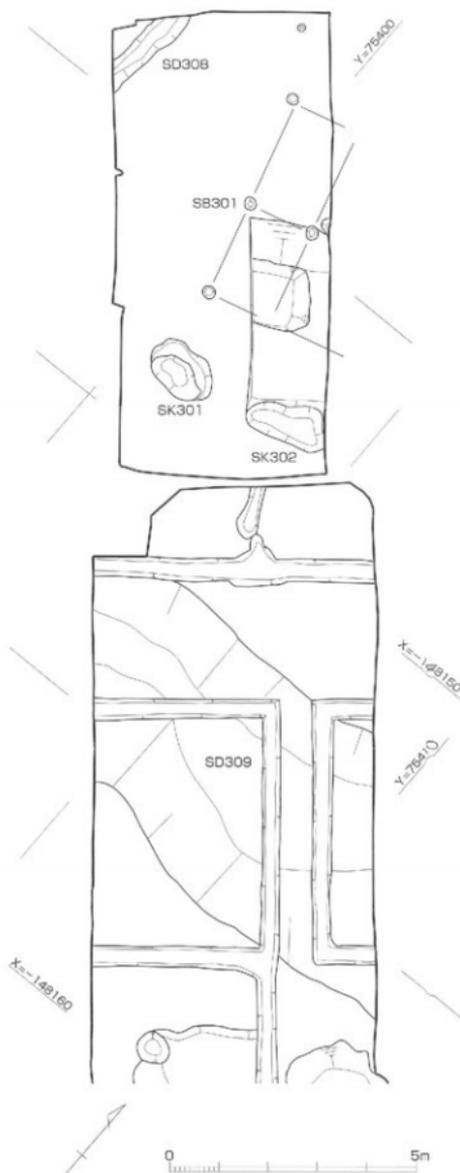
第8図 第1調査区 弥生時代後期末 遺構平面図(2)



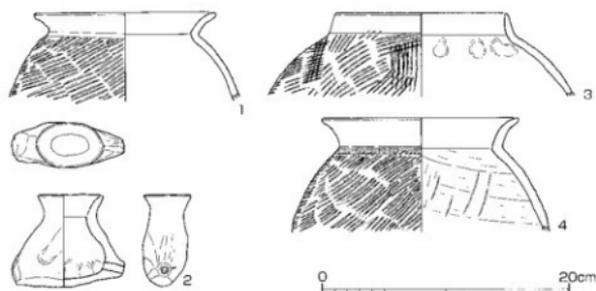
第10図 第1調査区 SK301 平面・立面図



第11図 第1調査区 SD308 平面図



第9図 第1調査区 弥生時代後期末 遺構平面図(3)



第12図 第1調査区 弥生時代後期末 出土遺物実測図

つまっている。調査区屈曲部付近の5基のピットのうち、4基が一列に並んでいるが、調査範囲が狭いため詳細は不明である。ピットの大きさは、並んでいる4基が、直径20～50cm程度で、深さは、深いもので45cm、浅いものでは25cm程度である。断面視察によると、ピット内の埋土は柱痕状に見えるものもある。これらは、調査区の東の外まで続く柵列のようなもの可能性もあるが、決定できるだけの要素がないため、可能性にとどまる。

南北調査区中央部のピットは、それぞれの位置は不規則で、建物の柱穴ではないようである。大きさは20cm前後で、深さは20～40cmである。

### 3. 弥生時代後期末の遺物

SK301

1はSK301出土の甕で、口縁部から体部上半の破片である。外反する口縁部を持ち、口縁端部は丸く収める。体部外面は右上がりのタタキを施す。内面の調整は表面が剥離しているため不明である。口縁部内外面にはヨコナデを施す。

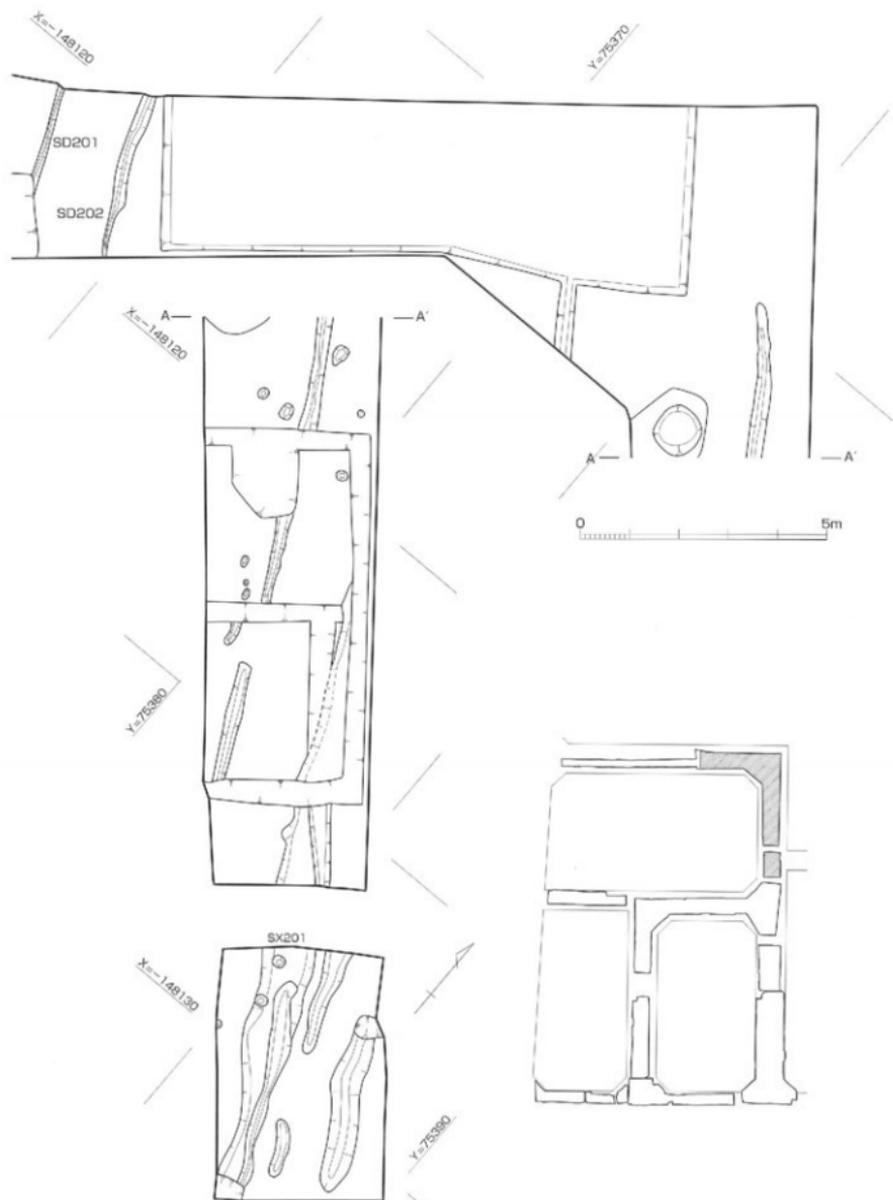
SD308

2～4はSD308出土の遺物である。

2は皮袋形土器である。側面の形態が二等辺三角形を呈し、片側の底角の部分には直径5mmの孔を開ける。口縁部は楕円形を呈す。手づくねで成形し、外面はハケで調整した後、全体を丁寧にナデを施し、側面にはミガキを施す。胎土は在地のものであり、色調は乳褐色を呈す。外面に黒斑を有す。

3は球形の体部にやや内傾ぎみに直立した短い口縁部を持つ。体部外面は右上がりのタタキに一部縦方向のタタキを施す。体部内面の調整は表面が剥離しているため不明である。胎土・焼成・製作技法・外面調整は甕と同様であるが、器形より、短頸甕と考えられる。

4は甕の肩部から口縁部で、外反する口縁部を持ち、口縁端部は丸く収める。体部外面は右上がりのタタキを施し、内面は細かい板ナデで調整する。頸部外面は口縁部接合後に縦方向のハケを施し、その後、口縁部全体をヨコナデで調整する。



第13図 第1調査区 奈良時代～平安時代 遺構平面図(1)

## 4. 奈良時代～平安時代の遺構と遺物

奈良時代から平安時代にかけての遺構は掘立柱建物1棟と溝・ピットである。東西区のほとんどは近世以降の削平を受けているため、この時代の層は残っていない。わずかに中央付近で削平をのがれた部分が残っているが、そこで浅い溝が2条見ついている。この溝以外の遺構は、南北区で検出した。

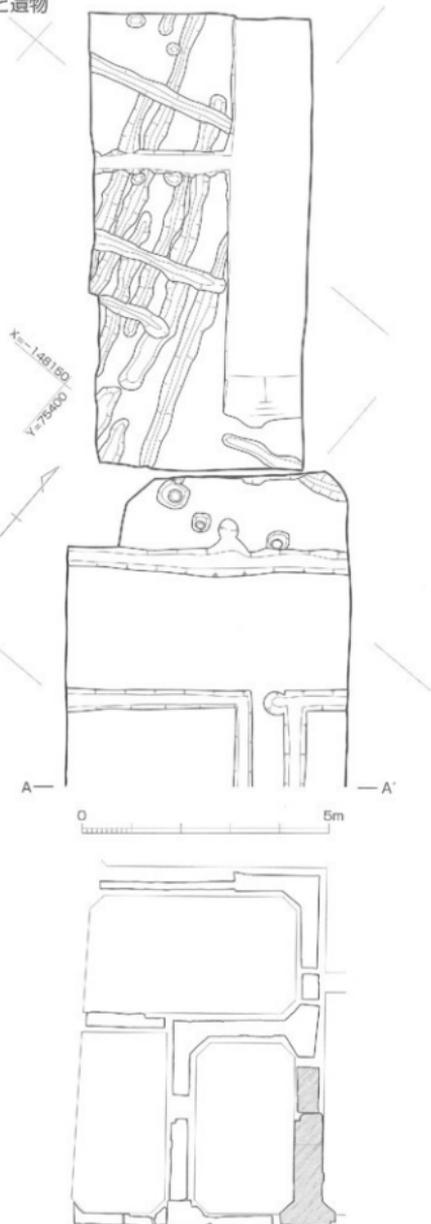
SB201

SB201は南北区南半で見つかった、3間×3間の総柱の掘立柱建物である。建物の規模は東西4.2m南北3.9mで、柱間は東西1.3m、南北1.2mを測る。側柱の柱穴の掘形は直径60～80cmの不定形を呈し、深さ40cmを測る。南列の2本では直径15cmのコウヤマキの柱材が残存していたが、その他の柱は埋土の状況から抜き取られたものと考えられる。東柱の柱穴は直径約50cmの円形を呈し、深さは20cmと浅い。南北方向の軸はN6°Eを測る。遺物は柱穴内から須恵器・土師器の小片が出土したのみで時期の判別は難しいが、直上の遺物包含層の遺物から奈良時代後半から平安時代前半の建物と考えられる。

SP201

銅鏡

この掘立柱建物SB201の南列柱穴のすぐ横のSP201内から銅鏡の破片が出土した。幅4.7cm・高さ2.1cm分の破片である。厚さは最も薄い部分で1.5mmを測る。復元すると口径約11.4cm程度と考えられる。口縁端部



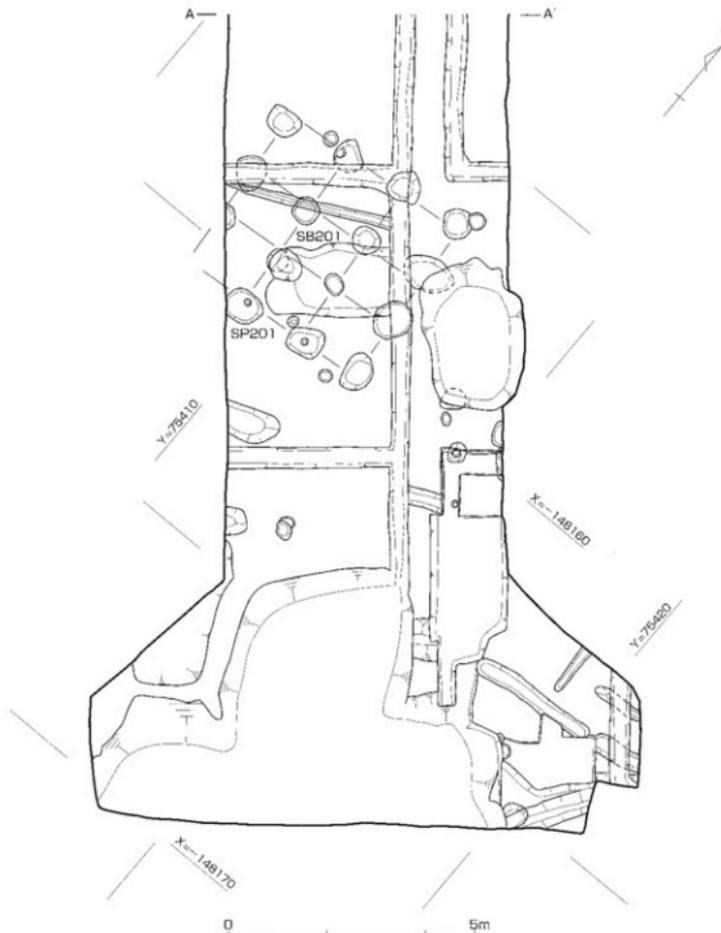
第14図 第1調査区 奈良時代～平安時代 遺構平面図(2)

は外面に肥厚し2段になっており口縁端部はやや内傾する面を持つ。内面は口縁部付近は横方向の、口縁端部からやや下がった部分では左上がりの斜め方向のロクロケズリによる線状痕が残る。破片の下部から側面にかけての斜めの割れ口は磨滅が著しい。とくに破片の先端部分の磨滅が著しく2次使用によるものと考えられる。

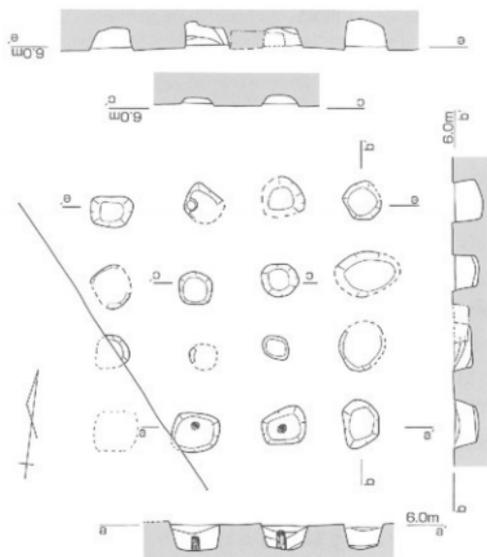
SD201・  
SD202  
SX201

SD201・SD202は東西調査区中央で見つかった溝で、どちらも浅く細いものである。幅は20cm程度で、深さは約5cm。南北方向に走っている。

SX201は南北区の北半で検出された溝状の遺構で、調査区を対角線状に横切っているため正確な規模は不明だが、確認できた範囲での最大幅は約1.2m、深さは10cm程度である。



第15図 第1調査区 奈良時代～平安時代 溝構平面図(3)



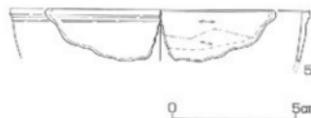
第16図 第1調査区 SB201 平面・断面図



溝ではない可能性もある。

#### ビット

南北区の北半で見つかった6基のビットはどれも径20~10cm程度のである。深さは、浅いものは1~2cmと大変浅いが、これは足跡の可能性もある。比較的深いものは、深さ20cm程度である。



第17図 第1調査区 SP201出土 銅鍔実測図

#### 溝

南北区中央では溝が10条確認された。これら溝は、東西方向のものが4条、南北方向のものが6条だが、東西方向のものがすべて南北方向のものを切っている。遺構面の東半分は削平されており、本来はもっと溝の数が多かった可能性がある。これらの溝は、ほぼ平行に均一な間隔で走っているが、この形状から鋤溝のようなものと考えられる。新しい時代の耕土の直下で遺構面が確認されているが、これは、いくら遺構面もこの耕土を盛る時に削って整地されていると考えられる。このため、溝の深さはどれも10~15cm程度だが、造られた当時の本来の深さは、もっと深かった可能性が高い。溝の幅は、どれも30~40cm前後である。鋤溝としてはかなり深く、残りのよい状態であると考えられる。

#### 馬歯

この溝中より馬の左第2前臼歯が出土している(図版8)。エナメル高37mm±a、同長28mm、同幅22mmを測り、老馬と考えられる。

これらの溝は日耕土直下で確認されたことと、出土した土器が小片ばかりだったことから、造られた時期を判別することは難しい。

## 第4節 第2調査区

### 1. 概要

第2調査区は幅6m、長さ58mの区画道路部分の調査区である。

この調査区では旧耕土下で弥生時代後期末（庄内併行期）の遺物包含層である、黒灰色粘土ないしは暗黒褐色シルトとなり、遺構は全てこの層の下で検出され、弥生時代後期末のものと考えられる。検出された遺構は、溝6条、土坑1基、ピット多数である。

### 2. 弥生時代後期末の遺構

**SD310** SD310は東西区中央に位置し、幅1.3m、深さ0.2mを測り、北北西から南南西方向の溝である。埋土は暗黒褐色シルトで、出土遺物は細片ながら、弥生時代後期末（庄内併行期）のものと考えられる。この溝を境に東側は高くなっており、比較的多く奈良時代～平安時代前半の遺物が出土している。この周辺が奈良時代～平安時代の遺構の西端にあたる可能性がある。

**SD311** SD311は南北区に位置し、幅0.7m、深さ0.3mを測り、北北西から南南東方向の溝である。出土遺物には弥生時代後期末（庄内併行期）の、壺・高環・甕があり、この時期の溝と考えられる。埋土の下層は暗褐色シルトで、上層は茶褐色のシルトである。

**SD312** SD312は南北区に位置し、幅0.3m、深さ0.1mを測り、南西から北東方向の溝である。出土遺物は小片の土器のみである。

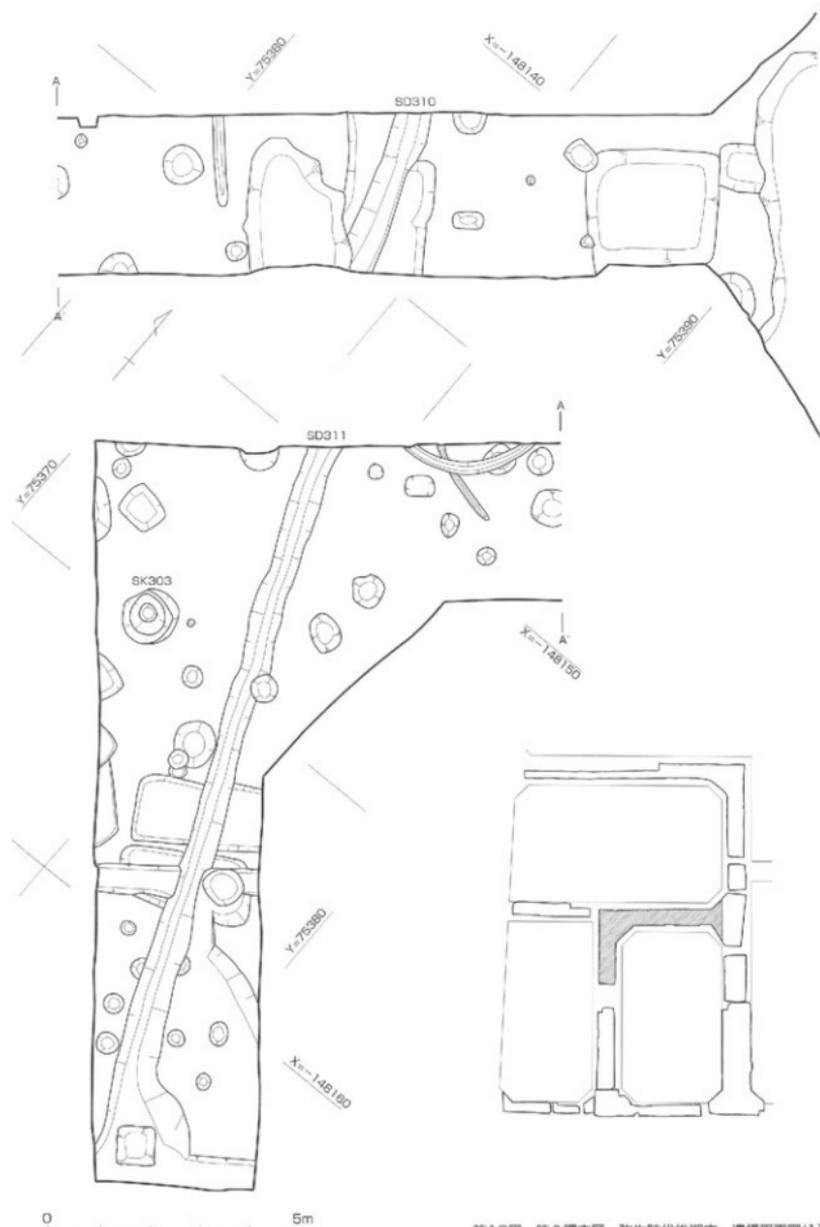
**SK303** SK303は直径1.1m、深さ0.93mを測る。埋土上層は黄色褐色シルト、下層は暗黒褐色シルトで、上層と下層の間に炭の層を挟む。埋土からは須恵器が出土しておらず、細片ながら、弥生時代後期末と思われる土器片が出土している。

南北区南半では弥生時代後期末（庄内併行期）の遺物包含層である黒灰色粘土層から出土する土器の状態は非常に良好である。遺構の希薄に対し、その直上層の遺物包含層は厚く、出土量も豊富である。包含層の状況から、遺構は元来存在しないと判断される。

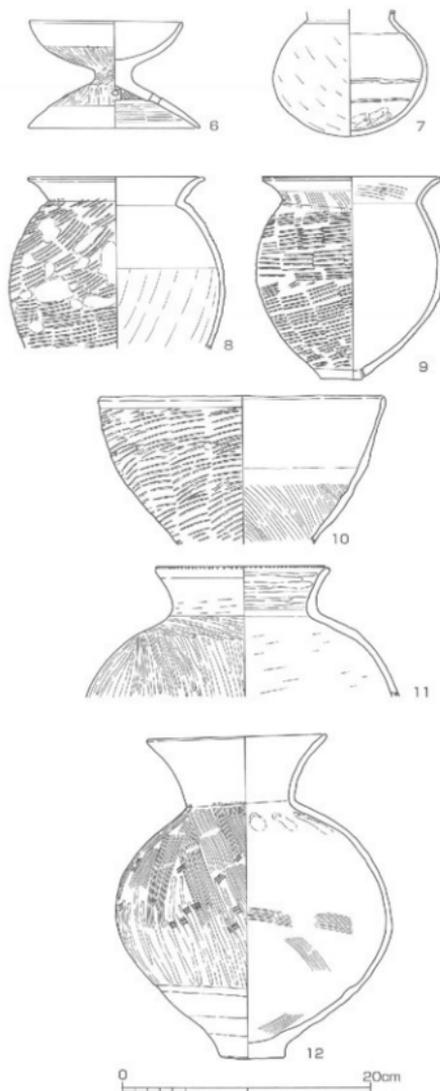
### 3. 弥生時代後期末の遺物

**SD311** 6～8はSD311から出土した土器である。6は高環で、環部・脚部ともに外面は縦方向のミガキを施す。脚部内面は横方向のハケメで調整する。7は壺の体部である。口縁部を欠くため全体の形状は明らかではないが、直線的に開く口縁部を持つと考えられる。体部内外面ともにナデ調整である。8は甕で、丸みを帯びた体部から緩やかに外反する口縁部を持つ。体部外面は右上がりのタキを施し、内面はケズリの後ナデ調整である。

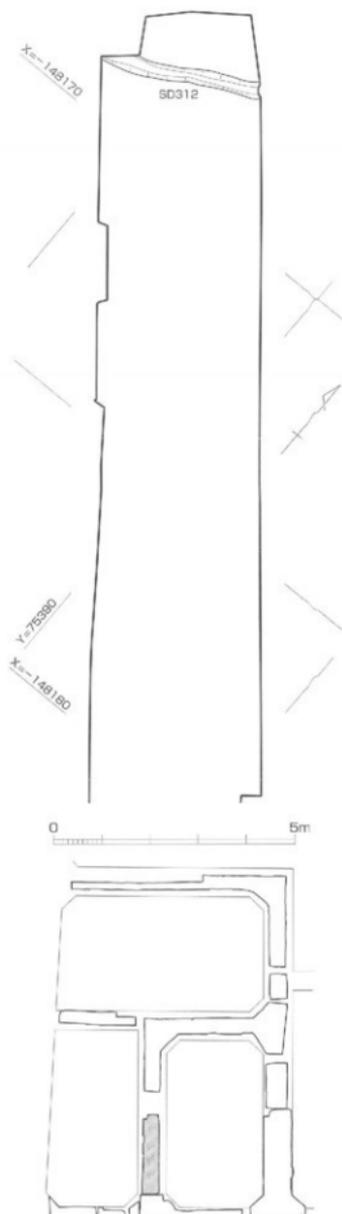
**遺物包含層** 9～12は南北区南半の遺物包含層出土の土器である。9は甕で、体部外面は右上がりのタキを施し、内面にはナデを施す。10は鉢で、内彎気味に開く体部をもち口縁部はそのまま丸く収める。体部外面は右上がりのタキを施し、内面下半はハケ、上半はナデで調整する。口縁端部はヨコナデを施す。甕の上半部を省き鉢として成形したものである。11・12は壺で、11の体部外面はナナメ方向のミガキを施し、口縁端部にキザミを施す。12の体部外面はタキで成形した後上半はハケ、下半はミガキとナデで調整している。



第18図 第2調査区 弥生時代後期末 遺構平面図(1)



第19図 第2調査区 弥生時代後期末 出土遺物実測図



第20図 第2調査区 弥生時代後期末 遺構平面図(2)

## 第5節 第3調査区

### 1. 概要

第3調査区は幅4m、長さ15mの歩行者道路部分の調査区である。

#### 基本層序

基本層序は盛土・耕土・淡黄褐色砂混じりシルト・灰色シルト細砂・明黄褐色極細（第1遺構面ベース）・淡暗灰色砂混じりシルト（庄内期水田耕土）・暗灰褐色シルト混じり砂（第2遺構面ベース）・暗灰色砂・暗灰色砂混じり粘土（第3遺構面ベース）となる。

### 2. 弥生時代後期末の遺構

上記の基本層序で述べたように弥生時代後期末の遺構面は第2遺構面と第3遺構面の計2面が確認された。

#### 第3遺構面

##### SE301

第3遺構面では井戸1基、ピット4基、溝4条が確認された。

SE301は直径1.7m、深さ1.1mの素掘りの井戸であるが、ほぼ半分が調査区の南に広がっている。断面の形状は、すり鉢形を呈しており、埋土は黒灰色粘土〜シルトが中心である。遺物は上層の黒茶褐色砂混じりシルト層からの出上りがほとんどであり、中・下層からの出上りは少ない。出土遺物より庄内併行期の遺構と考えられる。

#### 第2遺構面

##### 畦畔

第2遺構面では畦畔1条、溝2条が確認された。

畦畔1は幅1.3m、高さ5cmで、北西から南東方向の畦畔である。畦畔に沿った西側には溝2条が、畦畔と同一方向に存在する。同一層位と考えられる水田面はこれまでの御蔵遺跡の調査でも見つかっており、弥生時代後期末（庄内併行期）の水田と考えられる。

### 3. 奈良時代～平安時代の遺構

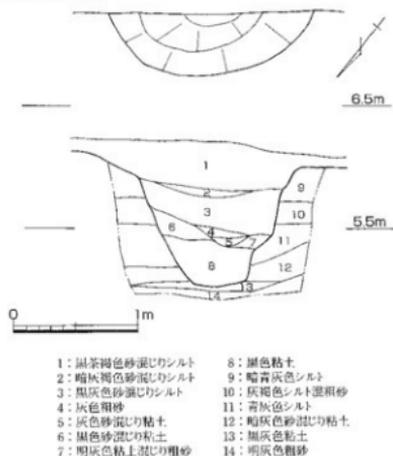
#### 第1遺構面

第1遺構面ではピット1基、溝4条が確認された。

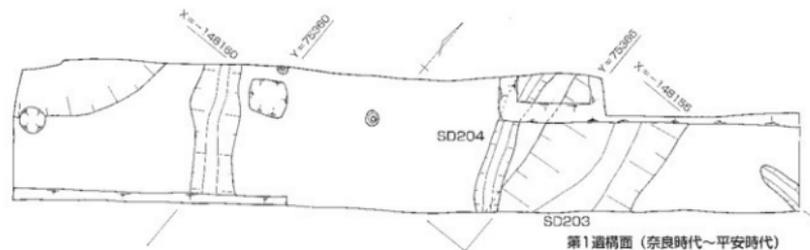
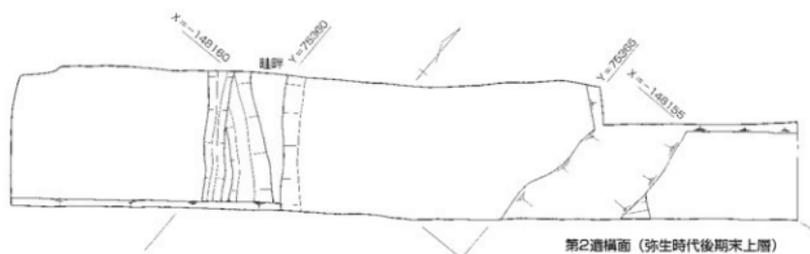
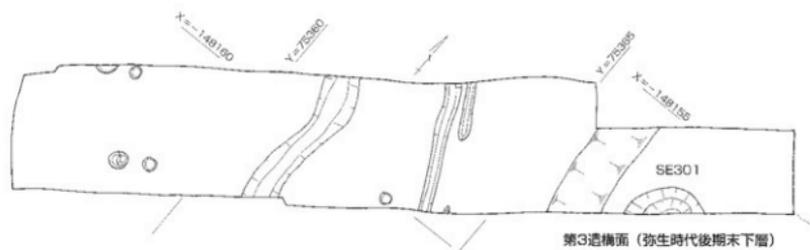
SD203は幅2.5m、深さ0.4mの南北方向に流れる溝である。断面はゆるやかなV字形を呈す。埋土は灰色砂混じりシルトで、遺物はほとんど含まない。

SD204は幅0.5m、深さ0.15mの南北方向に流れる溝である。SD203を切っている。埋土は灰色シルトで、遺物はほとんど含まない。

第1遺構面の遺構からは遺物がほとんど出土しておらず、時期の確定は難しいが、第1遺構検出面直上の遺物包含層からは奈良時代～平安時代の遺物が出土しており、第1遺構面の遺構はこの頃のものと考えられる。



第21図 第3調査区 SE301 平面・断面図



第22図 第3調査区 遺構平面図

0 5m

## 第6節 第4調査区

### 1. 概要

第4調査区は幅11mの区画道路のうち、現況道路が北側に拡幅される部分の幅3m、長さ50mの調査区である。基本層序は第2調査区とほぼ同じで旧耕土の下に弥生時代後期末の遺物包含層である黒褐色シルト層が存在する。但し西半ではこの層が急激に下がり、その上に黄色褐色系の洪水砂と奈良時代から平安時代の遺物包含層である灰色シルト層が存在するよって、西半では2面、東半では1面の遺構面が存在する。

### 2. 弥生時代後期末の遺構

SD313

SD313は調査区中央に位置し、幅2.1m、深さ0.3mを測り、東西方向に走る溝である。時期は、出土遺物から弥生時代後期末(庄内併行期)と考えられる。埋土は暗褐色シルトで、上層は茶褐色の中～粗砂である。

SD314

SD314は調査区東半に位置し、幅0.3m、深さ0.2mを測り、南北方向に走る溝である。時期は、出土遺物から弥生時代後期末(庄内併行期)と考えられる。埋土は暗黒褐色シルトである。

ピット

調査区中央で見つかったSP301・SP302・SP303の3基のピット内から甕・壺・高坏等の弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器が出土している。

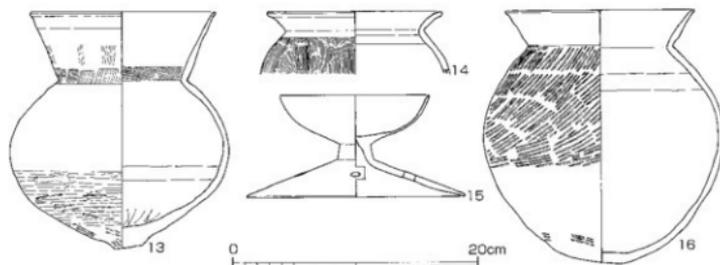
水田

調査区の西半では、第1遺構面の砂層を取り除いた、標高5.5m付近で確認された、黒褐色の粘土層で、人の足跡と思われるものが数ヶ所みつけた。庄内式期の水田の可能性が考えられる。この調査区のすぐ東側にある、第2調査区では、標高5.7m付近で庄内式期の遺構面を確認しているが、この調査区西半はすでに居住地となる微高地からはずれて、洪水砂に覆われた低湿地域に入ってくると考えられる。

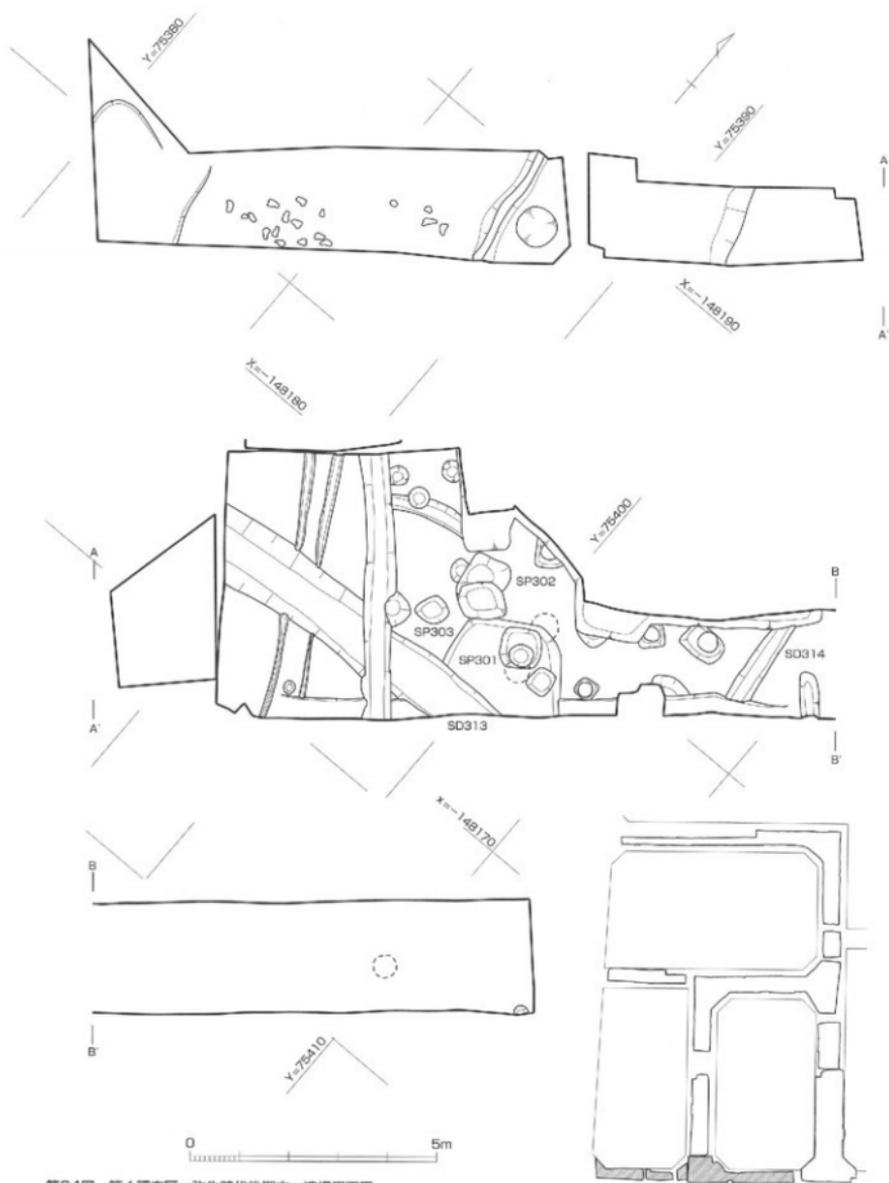
### 3. 弥生時代後期末の遺物

SP301

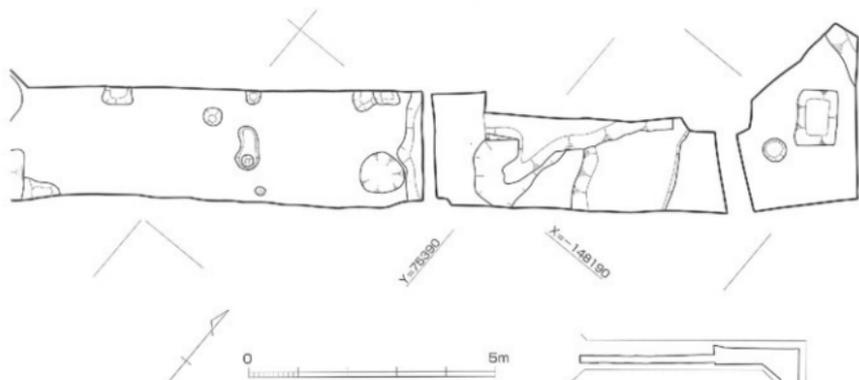
13・15はSP301出土の土器である。13は壺で、底部はやや突出し、偏球形の体部に直



第23図 第4調査区 弥生時代後期末 出土遺物実測図



第24図 第4調査区 弥生時代後期末 遺構平面図



第25図 第4調査区 奈良時代～平安時代 遺構平面図

線的に外方に開く口縁部を持つ。体部外面はタタキによって成形した後、上半はナデ、下半は横方向のミガキを施す。内面はハケの後ナデで調整する。底部内面には放射線状の工具痕が残る。口縁部外面は縦方向のハケの後、ヨコナデを施す。内面は頸部付近は斜め方向のハケメが残るが全体をヨコナデで

調整する。15は腕形の坏部に大きく開く脚部を持つ高坏で、脚部には、4方向に直径8mmの円形スカシを開ける。内外面ともに表面の剥離が激しく調整は不明である。

SP302

16はSP302出土の甕で、丸い体部に直線的に開く口縁部を持つ。底部は僅かにやや突出する。体部外面には右上がりのタタキを施すが、下半は板ナデによってタタキの痕は消されている。内面も板ナデによって調整されている。

SP303

14はSP303出土の甕で、外反する口縁部を持ち、口縁端部は丸く収める。体部内外面は細かいハケで調整する。

#### 4. 奈良時代～平安時代の遺構

灰色シルト層直下の面で、調査区の西側で上坑を1基確認している。奈良時代から平安時代の遺構面と考えられる。検出された範囲の径は約3.4m、深さは約30cmだが、一部は調査区の外にあり、全体の形は不明である。遺物は出土せず、機能についても不明である。

## 第7節 小結

以上のように、5丁日北地区においては、弥生時代後期末と奈良時代～平安時代前半の主に2時期の遺構・遺物が見つかった。以下、5丁日北地区におけるそれらの遺構・遺物について若干のまとめをおこなう。

### 弥生時代後期末

弥生時代後期末の遺構・遺物は全調査区から検出された。そのうち特に第1・第2調査区および、第4調査区東半からは遺構・遺物ともに多数検出された。また、第3調査区および第4調査区西半では水田が確認された。第3・第4調査区ともに、弥生時代後期末の遺構面のベースとなる層が大きく西に向かって落ち込みその落ち込みから西は水田が検出されたのみで、顕著な遺構は発見されず、また遺物の出上量も少ない。一方この落ち込みより東の第1・第2調査区および第4調査区東半においては遺物量は多く、土坑・溝・ピット等の遺構が見つまっている。以上のことより、第2調査区の南北区以西は後背湿地の低地となり水田域として土地利用されていたと考えられる。一方、第2調査区の南北区以東は微高地となり、竪穴住居は見つからないものの、土器の出土状態などから、集落が営まれていたものと考えられる。

これらの遺構の時期は、出土遺物から弥生時代後期末（庄内併行期）に属するものが殆どだと考えられるが、第4調査区S P302 出上の甕16はやや時代が下り、古墳時代初頭の（布留式併行期）に属し、弥生時代後期末から古墳時代の初頭までこの集落は続いたものと考えられる。

第1調査区S D308 出土の皮袋形土器2の類例は、神戸市灘区の篠原遺跡第21次調査<sup>(1)</sup>、兵庫県川西市栄根遺跡第19次調査<sup>(2)</sup>、大阪府枚方市鷹塚山遺跡等<sup>(3)</sup>で見つっており、いずれも弥生時代後期末に属するものである。但し、底部片側に孔のあるものは管見に触れない。

### 奈良時代

#### ～平安時代

奈良時代～平安時代の遺構も、弥生時代後期末と同様に、第2調査区南北区以東に多く見られる。S B201は3間×3間の総柱の建物であることから、倉庫と考えられる。同時期の建物は第1調査区北東側の第2次調査<sup>(4)</sup>や第1調査区中央の東側で行った第12(旧16)次調査<sup>(5)</sup>でも見つっており、第2調査区以東にこの時代の遺跡の中心があったものと考えられる。建物の方向性は、真北からやや西に振るものが多く、現況地割りとは方向が違う。

第2調査区以西は弥生時代後期末と同様に遺構は少なく、水田域として土地利用されたものと考えられる。

### 註

- (1) 平成12年度神戸市教育委員会調査。調査担当者の黒田恭正氏より御教示を受けた。
- (2) 岡野慶隆『川西市栄根遺跡—第19次発掘調査報告—』川西市遺跡調査会1988
- (3) 瀬川芳則他『鷹塚山弥生遺跡調査概要報告』鷹塚山遺跡発掘調査団1968
- (4) 岡野豊『御蔵遺跡第2次調査』『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2000
- (5) 山本雅和『御蔵遺跡第16次調査』『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2001

## 第3章 6丁目北地区の調査

### 第1節 調査区の設定

6丁目北地区については区画道路築造予定範囲約1300㎡について調査が行われた。これらの調査区については、道路築造工事の工程に従い調査を行ったため、連続する調査範囲でありながら、実際には3カ年、11回に分けて調査が行われた。各回の調査については、着手された順に神戸市教育委員会の定める調査次数が割り振られているが、本報告書ではこの次数とは別に、調査の行われた範囲について改めて7つの地区に地区割り作業を行い、それぞれの調査区に呼称を付け、その区ごとに調査結果を掲載した。この地区割り作業にあたっては、街路ごとを基本としたため、調査着手年次が複数にまたがっているものを、ひとつの調査区として一括している場合もある。

下表は調査着手時に定められた次数と本報告書内における調査地区名の対照表である。この表をもって本報告書に述べる調査区呼称が現地調査時のどの地区に該当するかを把握するための資料とする。

調査地区	旧次数	新次数
第1調査区	20-10次・20-18次	14-10次・14-18次
第2調査区	9次・12次・17次	6-4次・6-6次・6-8次
第3調査区	20-15次	14-15次
第4調査区	20-11次・20-13次・32-2次	14-11次・14-13次・32-2次
第5調査区	20-8次	14-8次
第6調査区	20-10次・20-14次	14-10次・14-14次
第7調査区	12次・32-3次	6-6次・32-3次

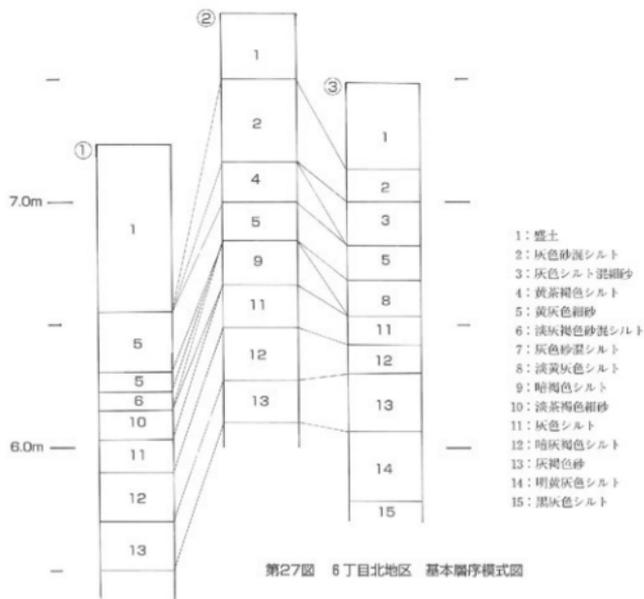


第26図 6丁目北地区 調査区配置図（数字は各調査区を表す）

## 第2節 6丁目北地区の調査の概要

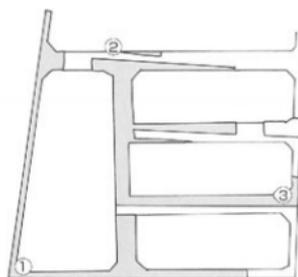
### 1. 基本層序

6丁目北地区の基本層序は以下の通りである。灰色シルト層の上面と下面がそれぞれ遺構検出面となっている他、全体では、層序の関係から、中世から古墳時代の各時代の遺構を確認しており、それぞれの調査区において2～3面の遺構面が検出されている。しかし、層の削平等により、調査区ごとに検出される遺構面に違いがみられる。



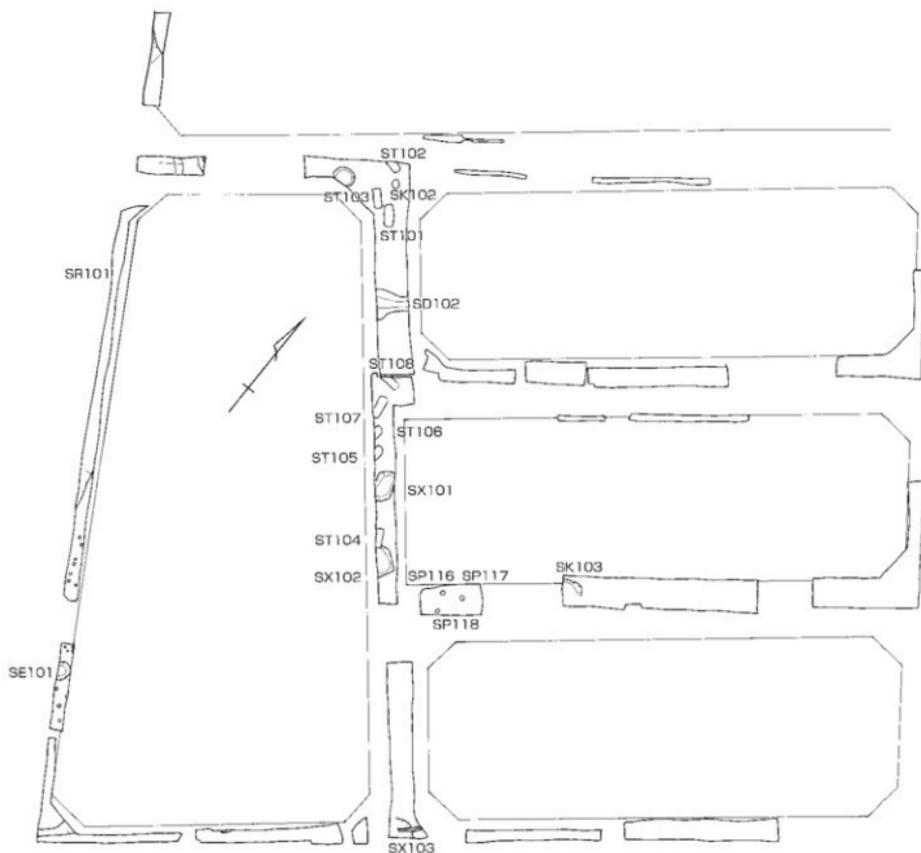
層序に連続性が認められるものは少ないが、キ一層と考えられるものが存在する。その層は、灰色シルト層で一部に砂質が強くなる地点もあるがおおむね同一層と認められるものである。この層は、奈良時代の土器を多く含んでいるが、平安時代の土器も含んでおり、おおむね11世紀に形成された層と考えられる。

下層に暗灰褐色シルト層があり、この層は10世紀の遺物を多く含み、10世紀中に形成されたと考えられる。さらに下層には黒灰色シルト層が存在しており、庄内期の遺構のベース面を形成していたと推測されるが、削平のため平安時代の遺構と同一面となるケースがある。



## 2. 調査概要

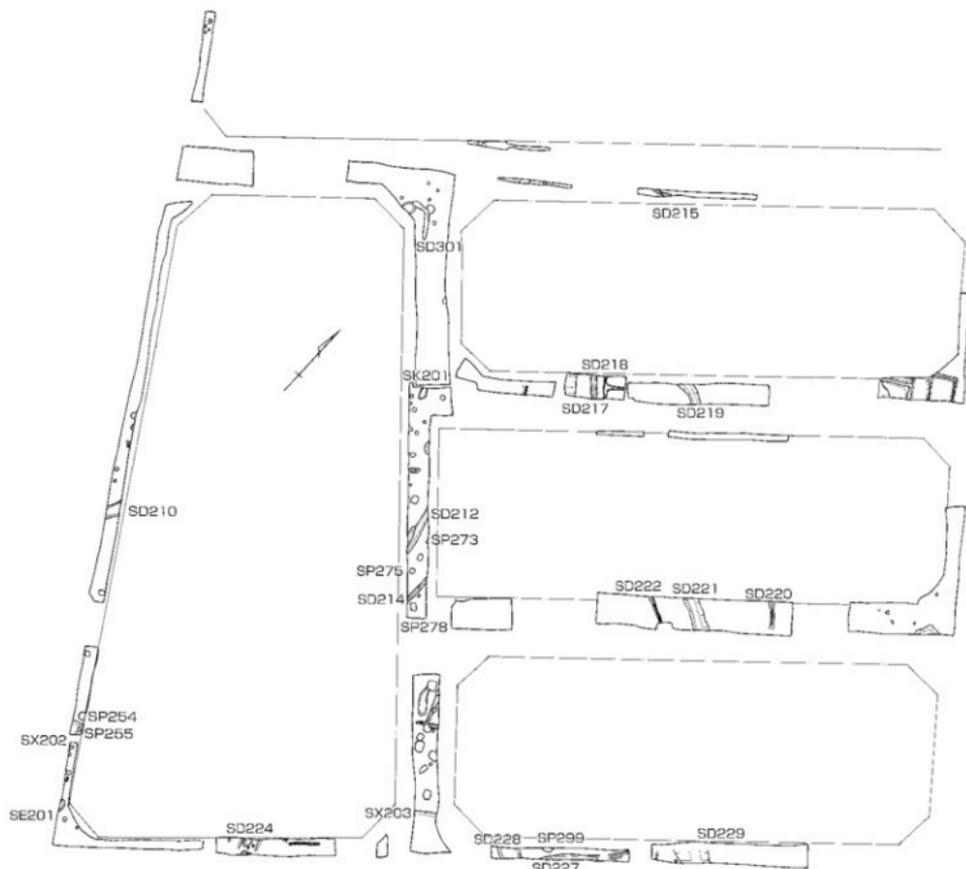
6丁目北地区の調査では、平安時代を中心として、弥生時代後期末（庄内併行期）から中世の遺構を検出しており、2面ないし3面の遺構面が確認されている。基本的に灰色シルトをベースとするもので、これが第1面、この層の下層で1面ないし2面の遺構面が存在する。調査地点によって、検出する遺構面に違いがあり、灰色シルト層上面や弥生時代後期末の遺構面で遺構が確認できなかった調査地も存在する。灰色シルト上面では、12世紀以降の木棺墓8基や、井戸1基、建物などを検出している。また、15世紀ごろまで残存する河道も検出されている。この地区における灰色シルト上面の検出遺構は、西半に集中しており、北東から南西にかけて緩やかに傾斜している地形に起因していると思われる。



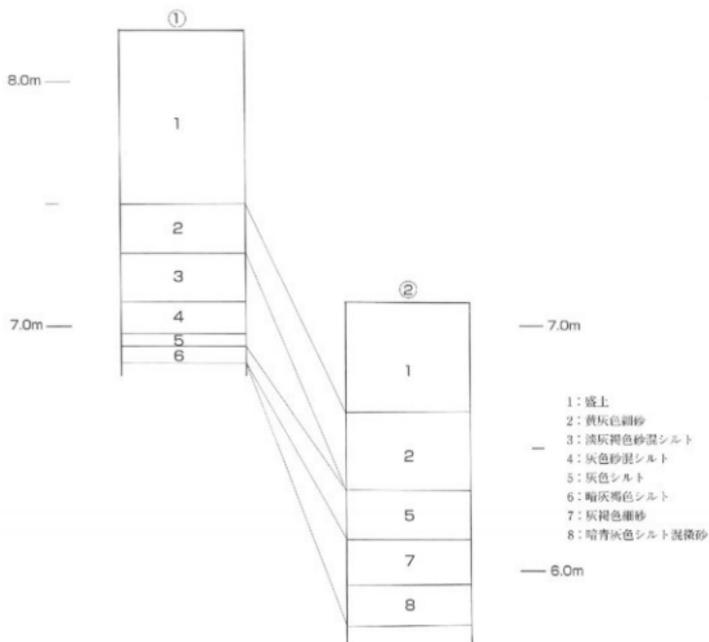
第29図 6丁目北地区 中世 遺構配置図 (S=1/500)

灰色シルト下層検出遺構としては、おおよそ2面以上存在する。8世紀から10世紀にかけての遺構としては、井戸1基をはじめとして、方形の柱掘形など建物の存在していたと考えられる遺構も検出されている。この時期の遺物は多量に出土しており、転用碗や盛書土器なども出土している。また、6世紀から7世紀にかけての土器が出土する溝なども確認されている。弥生時代後期末の遺構としては溝などの他、畦畔などが検出されており、一部では、小区画水田が検出されている。

以下に調査区毎に記述を進める。



第30図 6丁目北地区 平安時代 遺構配置図 (S=1/500)



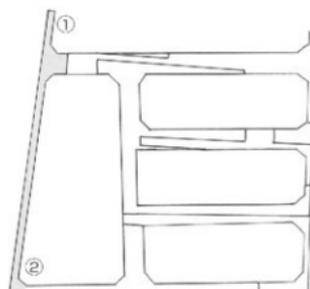
### 第3節 第1調査区

第31図 第1調査区 基本層序模式図

#### 1. 基本層序

当地区西に位置するトレンチである。平安時代から中世にかけての遺構が検出された。

北から南へかけて緩やかに傾斜している地形である。全体に先に述べた灰色シルト・暗灰褐色シルトの2つのキー層が存在する。ただし、北側では灰色シルトの上で1面、暗灰褐色シルトの上面と下面でそれぞれ1面検出しているのに対し、削平や、層の堆積の変化から、南端付近では、灰色シルトが存在せず、黒褐色シルト層上面で2面同時に検出しており、黒褐色砂質シルトの下面でそれぞれ遺構を検出している。それぞれ3面の調査となっているが、遺構面自体は灰色シルトの削平により、ズレが生じている。以下に、小区画毎に遺構の記述を進めることとする。



第32図 第1調査区 土層断面図位置図

## 2. 遺構

第1調査区は、3面の遺構検出面があり、奈良時代から中世にかけての遺構を検出した。

### 第3遺構面

第3遺構面は飛鳥時代から奈良時代の遺構面で、ピット、落ち込み、溝が検出された。

調査区南半からは多数のピットが検出された。直径約30cm～50cm、深さ約20cm～30cmを測るものが多い。ただし建物としての並びは確認していない。

SP229

SP229からは柱痕が確認されており、遺物も出土している。これからみると7世紀前半のものと考えられる。また、一辺約70cmの方形掘形をもつピットが1基存在する。

SD201

SD201は幅90cm、深さ40cmの東西方向に流れる溝である。出土遺物から8世紀の遺構と考えられる。

SD203

SD203は幅90cm、深さ40cmの東西方向に流れる溝である。出土遺物から8世紀の遺構と考えられる。

SX201

SX201は調査区内では直径2.2mの半円形の浅い落ち込みで、調査区外に広がっているため全体の規模、形状は不明である。第3遺構面の遺構は出土遺物より、奈良時代（8世紀）の遺構と考えられる。

### 第2遺構面

第2遺構面は、平安時代前半の遺構面である。井戸の他、ピットを多数、落ち込み1基、溝1条が検出された。

ピット

ピットは、調査区の南半から多く確認したが、調査区が狭く、建物としての並びは確認できなかった。幅約30cm～40cm、深さ約20cm～30cmを測るものが多い。一辺約50cmの方形掘形のピットも4基確認されている。中でもSP255は、ピット内から多数の遺物が出土しており、その出土遺物から、平安時代前期から平安時代中期にかけてのものとみられる。また、SP261からは柱痕が検出されている。

SX202

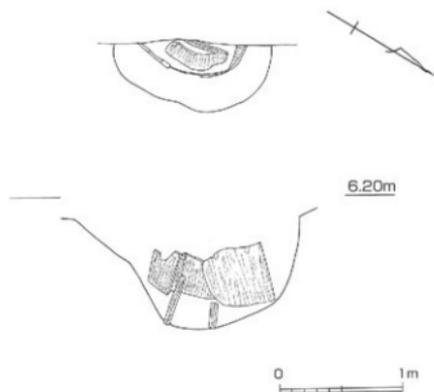
SX202は調査区の南半で検出された深さ約10cmの浅い落ち込みで、調査区外に広がっているため規模、形状は不明である。埋土には炭が多く含まれる。

SD210

SD210は幅110cm、深さ10cmの北東から南面方向に流れる浅い溝である。出土遺物より、平安時代前期（10世紀）の遺構と考えられる。

SE201

SE201は、堀形の幅約150cm、深さ約120cmを測る10世紀のくり抜き井戸である。井戸枠にはくり抜いた木材を3枚使用しており、井戸枠の幅約90cmを測る。井戸底には径約10cmほどの大礫を敷きつめてあった。



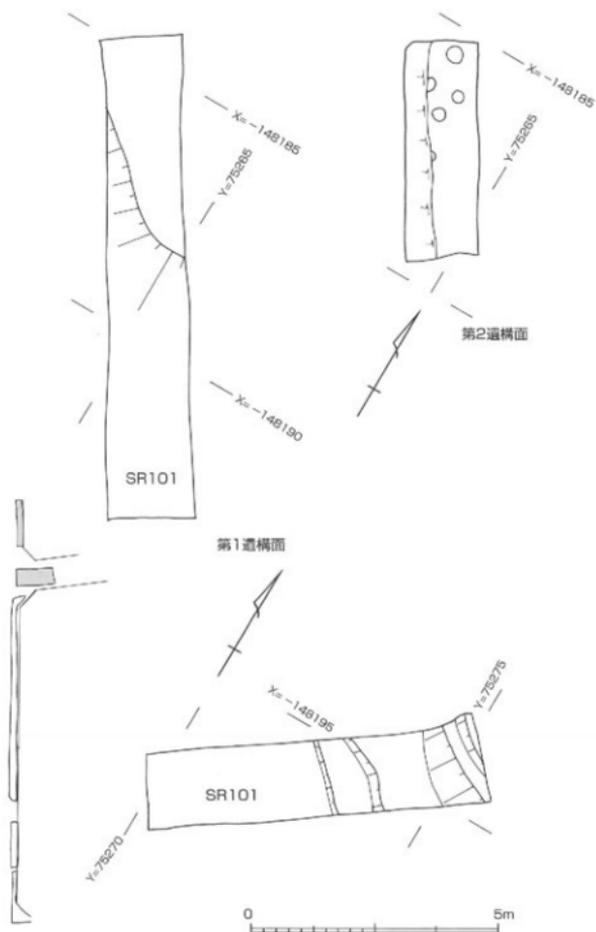
第33図 第1調査区 SE201 平面・立面図

## 第1遺構面

## SR101

第1遺構面では、井戸1基、溝1条、ピット、流路等が検出された。

SR101は、調査区の北半では北西から南東に、中央では北から南に方向を変えて流れる流路である。調査区内では東側の肩部が検出されたのみであるため、幅、深さは明らかでない。現在、調査地の西側に流れている、新湊川(旧刈藻川)の旧河道の可能性がある。この流路は第1遺構面より上層の旧耕土層から切り込んでおり、最終埋土層から出土した遺物より15世紀に埋没したものと考えられる。



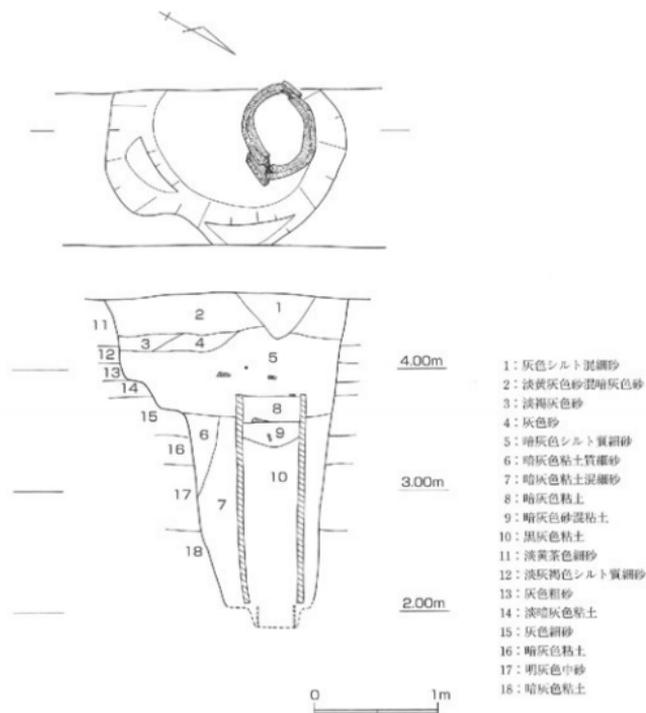
第34図 第1調査区北 遺構全体平面図

SE101 SE101は、半裁した大木をくり抜いたものを井側材として使用している井戸である。掘形は直径1.9m、深さ2.8mを測る。井側材は直径0.6m、長さ1.7mの一木を半裁してくり抜いた物を合わせている。合わせ部には上下2箇所にダボを噛ませてあり、その外側には幅25cm、長さ1.7mの板材をあててある。井戸底の水溜めには曲物を据えてある。出土遺物から12世紀のものと考えられる。

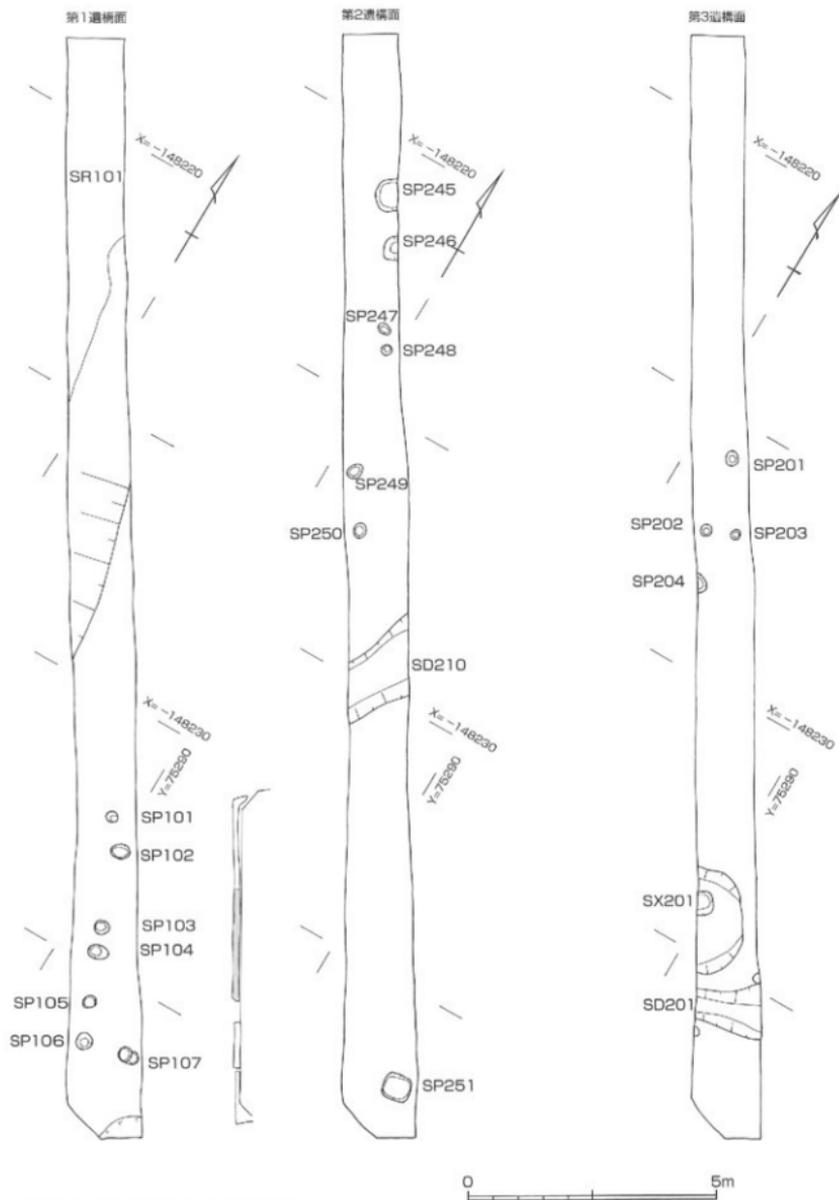
ピット その他、ピットが19基検出されたが、いずれも掘形の直径20~30cm、柱痕の直径約15cmを測る。調査区の幅が狭いため、掘立柱建物等は明らかでない。

SR102 調査区の南端から幅約50~180cm、長さ約30cmの流路を検出した。中世前期の遺物が比較的多く出土している。

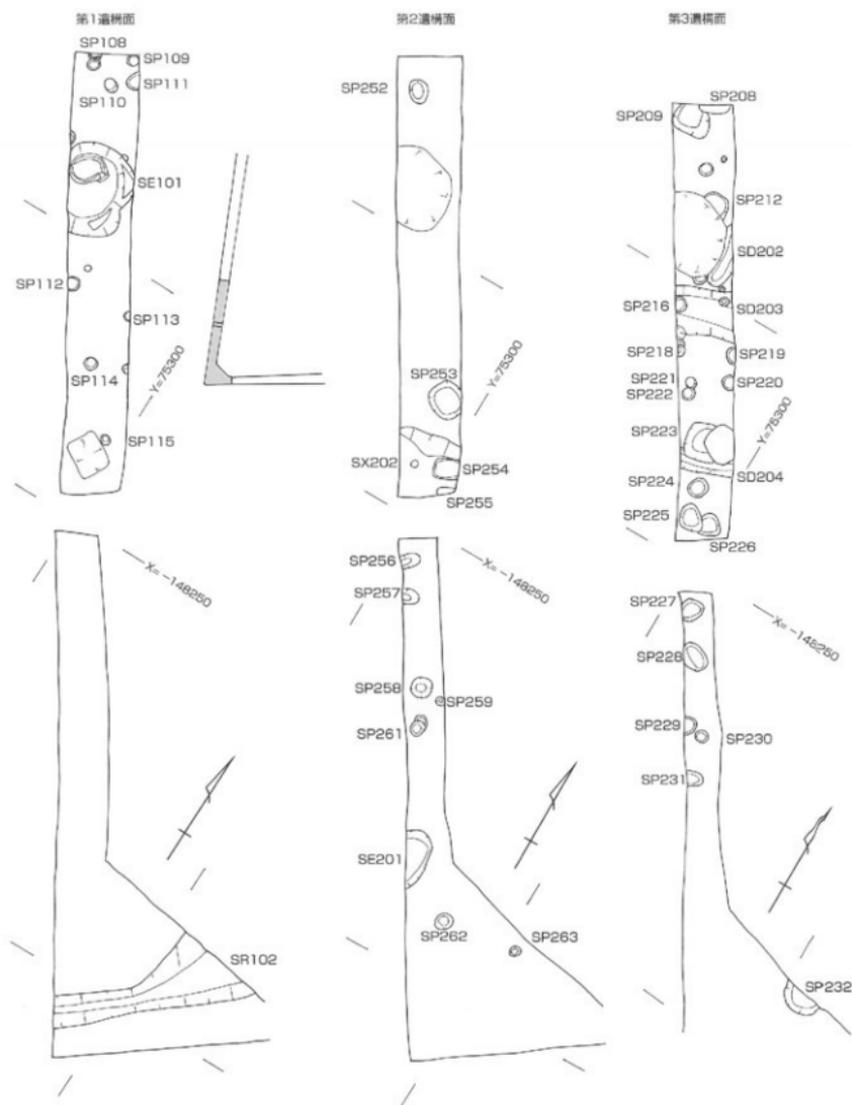
第1遺構面で検出されたSR101以外の遺構は、出土遺物から平安時代末(12世紀)の遺構と考えられる。



第35図 第1調査区 SE101 平面・断面図



第36図 第1調査区中央 遺構全体平面図



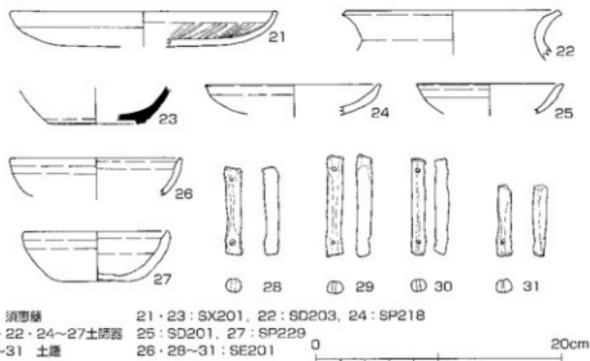
第37図 第1調査区南 遺構全体平面図



## 3. 出土遺物

## 土器類

- SX201 21は、SX201出土のものである。口径21.6cm、高さ2.9cmで、緩やかに彎曲しながらのびる体部と、内に肥厚し、上端に面を持つ土師器皿である。底部から体部にかけて内面に暗文を施し、底部外面はヘラ削りによって仕上げられている。
- 23は、SX201出土の須恵器坏である。底径8.0cmを測る。
- SD203 22は、SD203出土の土師器甕である。
- SP218 24は、SP218出土の土師器皿である。小さな底部とわずかに内彎しながら開く口縁部からなる器形で口縁径14.0cmを測る。内外面は横ナデである。
- SD201 25は、SD201出土の土師器皿である。小さな底部とわずかに内彎しながら開く口縁部からなるやや深い器形で口縁径12.0cmを測る。内外面は横ナデである。
- SP229 27は、SP229出土の土師器碗である。小さな底部とわずかに内彎しながら開く口縁部からなるやや深い器形で口縁径12.0cmを測る。内外面は横ナデである。



23 須恵器 21・23: SX201, 22: SD203, 24: SP218

21・22・24~27土師器 25: SD201, 27: SP229

28~31 土産 26・28~31: SE201

第38回 第1調査区 第3遺構画・SE201 出土遺物実測図

SE201 26・28~43はSE201出土の遺物である。

26は、小さな底部とわずかに内彎しながら開く口縁部からなるやや深い器形で口縁径12.0cmを測る土師器碗である。内外面は横ナデである。

28~31は、土錘である。

32~35は、口径11.2cm~14.5cm、器高3.3cm前後を測る土師器坏である。緩やかに外上方にのびる体部を持ち、口縁端部は横ナデをし、丸く収める。全体をナデで仕上げている。

35は、底部ヘラ切りの痕跡を残す。

36は、土師器である。底部に緩やかに外に開く高台を持つもので、全体をナデで仕上げたものである。高台径は7.8cmを測る。

39は、口径12.5cm、器高3.9cm前後を測る土師器坏である。緩やかに外上方にのびる体部を持ち、口縁端部は丸く収める。底部にはヘラ切りの痕跡が残る。底部外面の一部も含

めて、ヘラミガキを施している。

37・38は黒色土器である。高台を持つもの37と、持たないものがある。38は、外反する端部を持つもので、内面に横方向のヘラミガキを施す、内外面黒色のB類に属するものである。

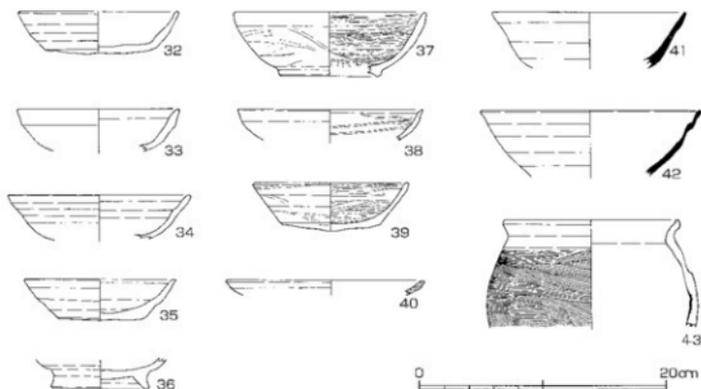
40は、口径17cm前後の緑釉陶器である。

41は、口径16.0cm、外傾する口縁部をもつ須恵器環である。

42は、口径18.0cm、緩やかに内彎する体部とやや外傾する端部を持つ須恵器碗である。

43は、口径14.5cm、短く外反する口縁部と器高中央付近最大径の位置する丸い体部の土師器甕である。

SE 201 出土遺物は、平安時代中期前半頃のものと考えられる。



32～36：土師器 40：緑釉陶器  
37～38：黒色土器 41～42：須恵器  
43：土師器

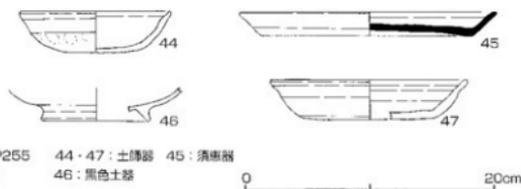
第39図 第1調査区 SE201 出土遺物実測図

SP255

44～46はSP 255 出土の遺物である。

44は、小さな底部とわずかに内彎しながら開く口縁部からなる器形で、口縁径12.2cm、高さ3.3cmを測る土師器環である。内外面は横ナデである。体部外面には指頭上痕が残る。

45は、短く外反する口縁部と下面にヘラ切り痕を残す平らな底部を持つ、口縁径20.8cm、



44～46：SP255 44・47：土師器 45：須恵器  
47：SP254 46：黒色土器

第40図 第1調査区 第2遺構面ビット 出土遺物実測図

高さ2.0cmを測る須恵器皿である。口縁部と底部の境は明瞭な稜となる。

46は、底径9.0cmを測る高台のつく内黒の黒色土器A類である。

SP254

47は、SP254出土の遺物である。外上方にのびる体部とあまり彎曲せずに内側に傾斜の面を持つ端部とからなる口縁径16.0cm、高さ3.2cmを測る土師器皿である。詳細な時期は確定しにくい、ピット出土の土器群は共に9世紀後半代と考えられる。

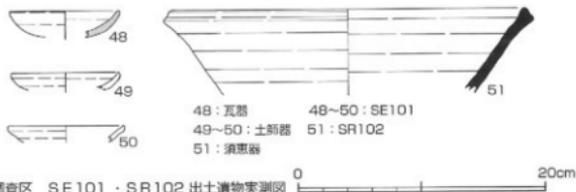
SE101

48~50はSE101出土の遺物である。

48は、口径9.0cmを測る瓦器小皿である。内面口縁端部付近に暗文を施す。49・50は口径8.8cm~9.3cm、口縁端部が断面三角形を呈する土師器皿である。12世紀代と考えられる。

SR102

51は、SR102出土の口径30cmを測る捏鉢である。



第41図 第1調査区 SE101・SR102 出土遺物実測図

黒褐色シルト

52~56は黒褐色シルト下層出土の遺物である。

下層

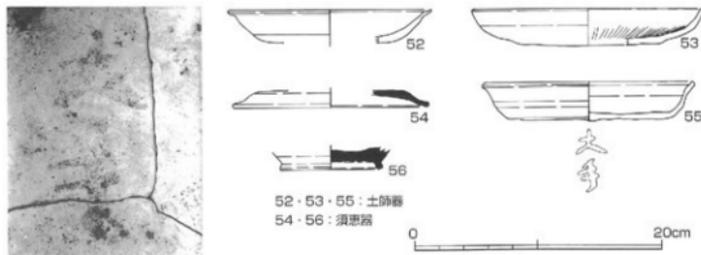
52は、口径16.5cm、器高2.7cm、平らな底部と斜め上にひらく短い口縁部からなる。口縁部は外傾し、わずかに内彎するもので、端部が内側に丸く肥厚する土師器皿である。

53は、口径19.0cm、器高3.0cm、平らな底部と斜め上にひらく短い口縁部からなる。口縁部は全体に内彎する弧を描き、口縁端部が内側にわずかに丸く肥厚する。内面に放射状の暗文をほどこす土師器皿である。

55は、口径17.4cm、器高3.1cm、平らな底部と斜め上にひらく短い口縁部からなる。口縁部は下半が内彎、上半がわずかに外反する弧をえがくものであって、口縁端部が内側に丸く肥厚する土師器杯である。底部に「大手」の墨書が認められる。

54は、口径16.0cm、平らな頂部およびわずかに屈曲する縁部から成る須恵器蓋である。

56は、高台径8.5cmを測る須恵器杯の底部である。底部に墨書が認められる。



挿図写真1 墨書土器55 赤外線写真

第42図 第1調査区 黒褐色シルト下層 出土遺物実測図

黒褐色

57～72は黒褐色シルト層出土の遺物である。

シルト層

63・64は、口径14.2cm～15.5cm、器高1.9cm～2.9cm、平らな底部と斜め上にひろく短い口縁部からなる。口縁部は外傾し、わずかに内彎するもので、端部が内側に丸く肥厚する土師器皿である。

65は、土師器環に高台のつくもので、高台径は10.0cmで、高台は外側に張り、断面形が角張っている。

66・67は、ゆるやかに弧を描く体部と肥厚し、垂直にのびる口縁部からなる土師器壺である。裂塩土器または飯蛸壺である可能性もある。

57・58は、口径13.6cm～14.6cm、器高4.9cmで、平坦な底部と斜め上にまっすぐのびる口縁部とからなる須恵器環である。底部外面には、高台がつくものである。高台は外側に張り、断面形が角張っている。57は一部に打ち欠きと思われる痕跡をのこす。甎に転用された痕跡があり、転用にあって、器形を整えたものと考えられる。

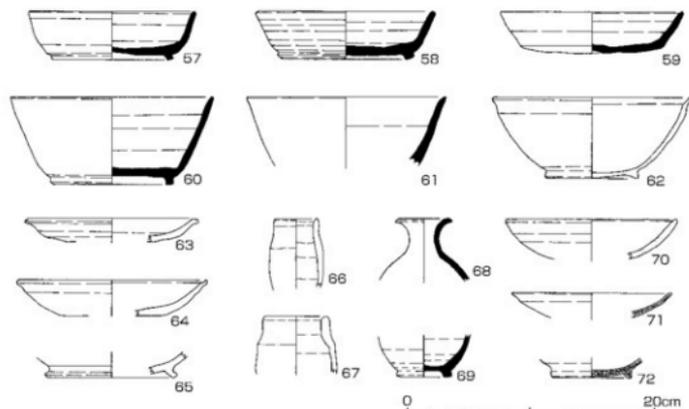
転用甎

59は、口径15.0cm、器高3.4cmで、平坦な底部と斜め上にまっすぐのびる口縁部とからなる須恵器環である。底部外面には、ヘラ切り痕をとどめている。

60・61は、口径16.2cm～16.6cm、器高7.1cmで、平坦な底部と斜め上にまっすぐのびる口縁部とからなる須恵器環である。底部外面には、高台がつくものである。高台は外側に張り、断面形が角張っている。

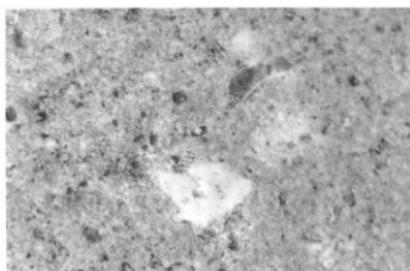
68・69は、口径4.6cmで、徳利形の小型壺。粘土塊から一氣に引き上げられたもので、頸部内面にはしぼり目を残す。

62・70は黒色土器A類である。62は、口径16.2cm、器高6.6cm、体部は緩やかに内彎し、口縁部は軽く外反する。口縁部外面にヨコナデをほどこす。高台は低く、断面は逆台形で外側にふんばる。

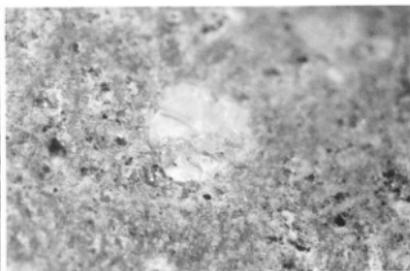


57：須恵器転用甎 58～61・68・69：須恵器 63～65：土師器 66・67：土師壺 62・70：黒色土器  
71・72：埴輪陶器

第43図 第1調査区 黒褐色シルト層 出土遺物実測図



押図写真2 転用硯57 使用痕跡顕微鏡写真(×17)



押図写真3 転用硯57 使用痕跡顕微鏡写真(×34)

71・72は、口径13.0cm、外上方にのびる体部とやや外反する口縁部とからなる緑釉陶器である。

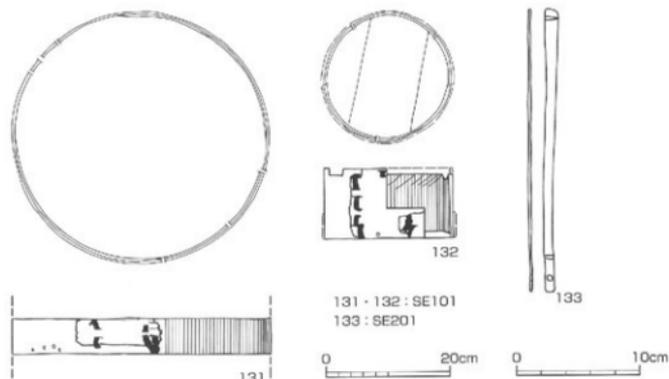
黒褐色シルト層に含まれる土器は、飛鳥から奈良時代の土器も多く含まれているが、もっとも新しい一群の土器の年代としては、9世紀後半を中心としたものと考えられる。

#### 木製品

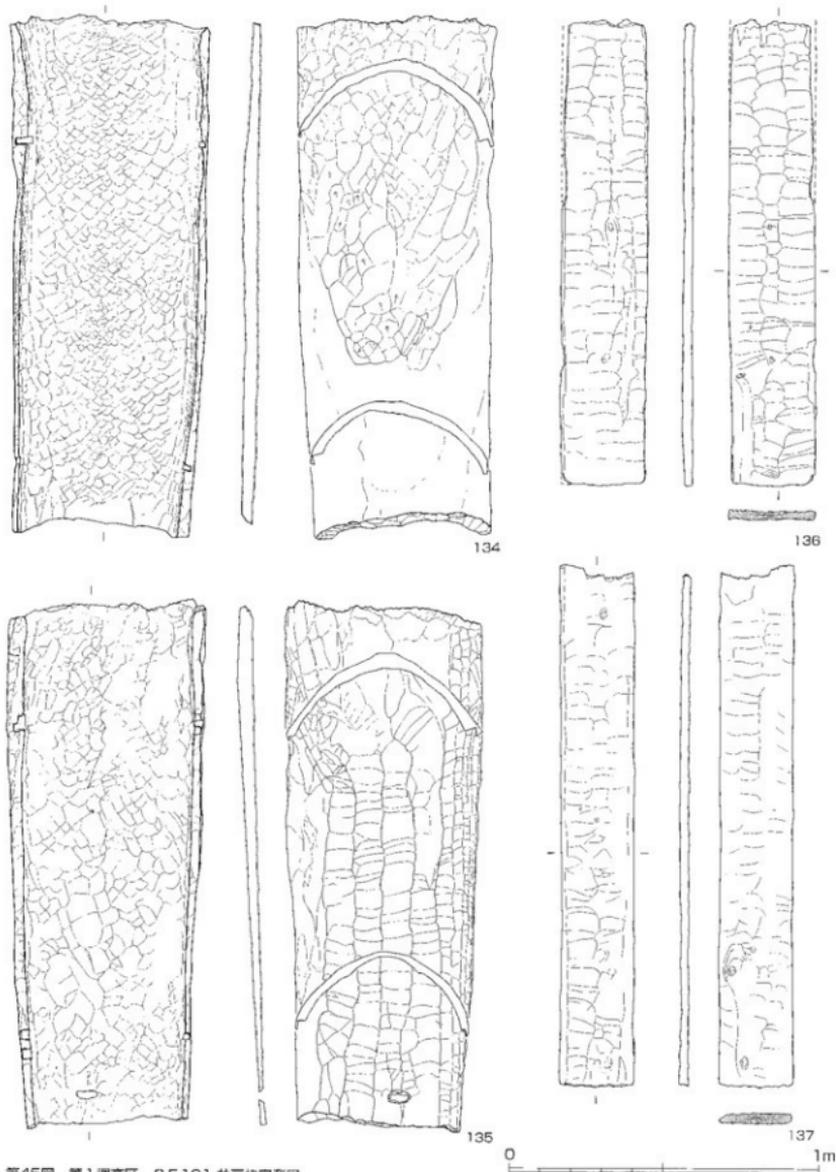
#### SE101

132はSE101出土の曲物である。直径24.6cm、高さ11.6cmで、1列下外上内4段綴じの釘結合曲物に属するもので、木釘の使用が認められる。内面には縦平行線のケビキを入れる。結合孔は、6ヶ所不均等に配する。

131・134～137はSE101の井戸構築材である。131は水溜に使用された曲物で、直径40cm、高さ11.6cm以上で、皮綴じの釘結合曲物に属するもので、木釘の使用が認められる。内面には縦平行線のケビキを入れる。134・135は井戸枠である。モミ属の一木を半裁して



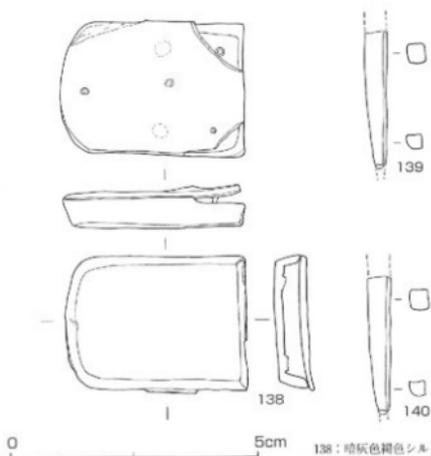
第44図 第1調査区 SE201・SE101 出土木製品実測図



第45図 第1調査区 SE101 井戸柱実測図



押図写真4 鉈尾X線写真



138：暗灰褐色シルト層出土鉈尾  
 139：暗灰褐色シルト層出土鉄釘  
 140：第2調査区ST107出土植釘

第46図 6丁目北地区出土 金属製品実測図

くり抜いている。135には縄掛け用と思われる孔が開けてある。内外面にチョウナ痕が明瞭である。136・137は井戸枠の合わせ目に添えていた板材である。136はモミ属。137はヒノキで内外面共にチョウナ痕が明瞭である。

SE201

138は、S E 201 出土の扇子骨である。長さ23.8cm、幅1.05cm、厚さ0.3cmを測る。

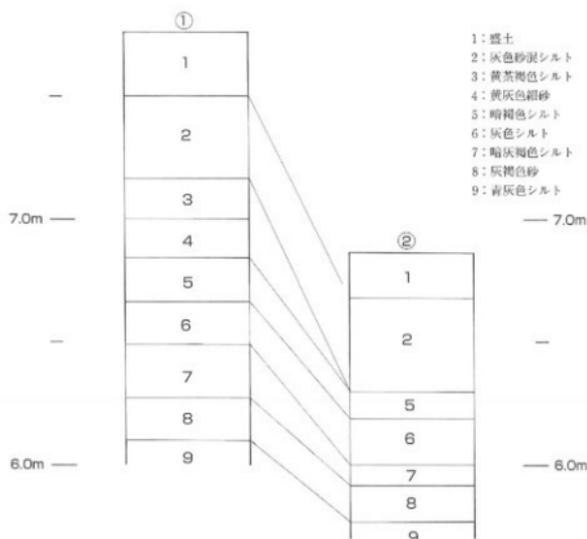
#### 金属器

138は、長さ3.63cm、幅2.85cm、重さ13.68gを測る銅製帯金具の鉈尾である。長方形の先端を弧形に作る横長のものである。表金具と裏金具がある。表金具の裏面にある3ヶ所の鉾および3ヶ所の突起は表金具と一体に鋳込まれている。裏金具にも3ヶ所の留め穴がある。なお、中央の突起は、裏金具との間にわずかな隙間が認められ、機能としては、結合のためではなく、中の中空を保つためにもうけられたものと考えられる。また、中央上下にある突起は、やや盛り上がった状態のもので、これに伴う裏金具の留め穴がなく、中央の突起と同じ機能であった可能性もあるが、元々鉾のように延びていたかは断言できない。表金具の表面には模様はなく、何かが表面に塗られていた可能性はあるが、明らかではない。

暗灰褐色シルト層からの出土であり、時期は特定できない。また、丸鞘や遡方などは出土していない。

139は断面方形の鉄釘の一部である。第1調査区南の暗灰褐色シルト層より出土したものである。

140は断面方形の鉄釘の一部である。第2調査区のST107の木棺痕跡付近より出土しており、棺釘と考えられる。



## 第4節 第2調査区

第47図 第2調査区基本層序模式図

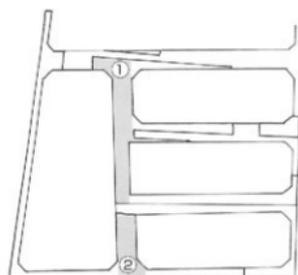
### 1. 基本層序

第1層 現代盛土。場所によって異なるが、60～25cmの厚さで盛られている。

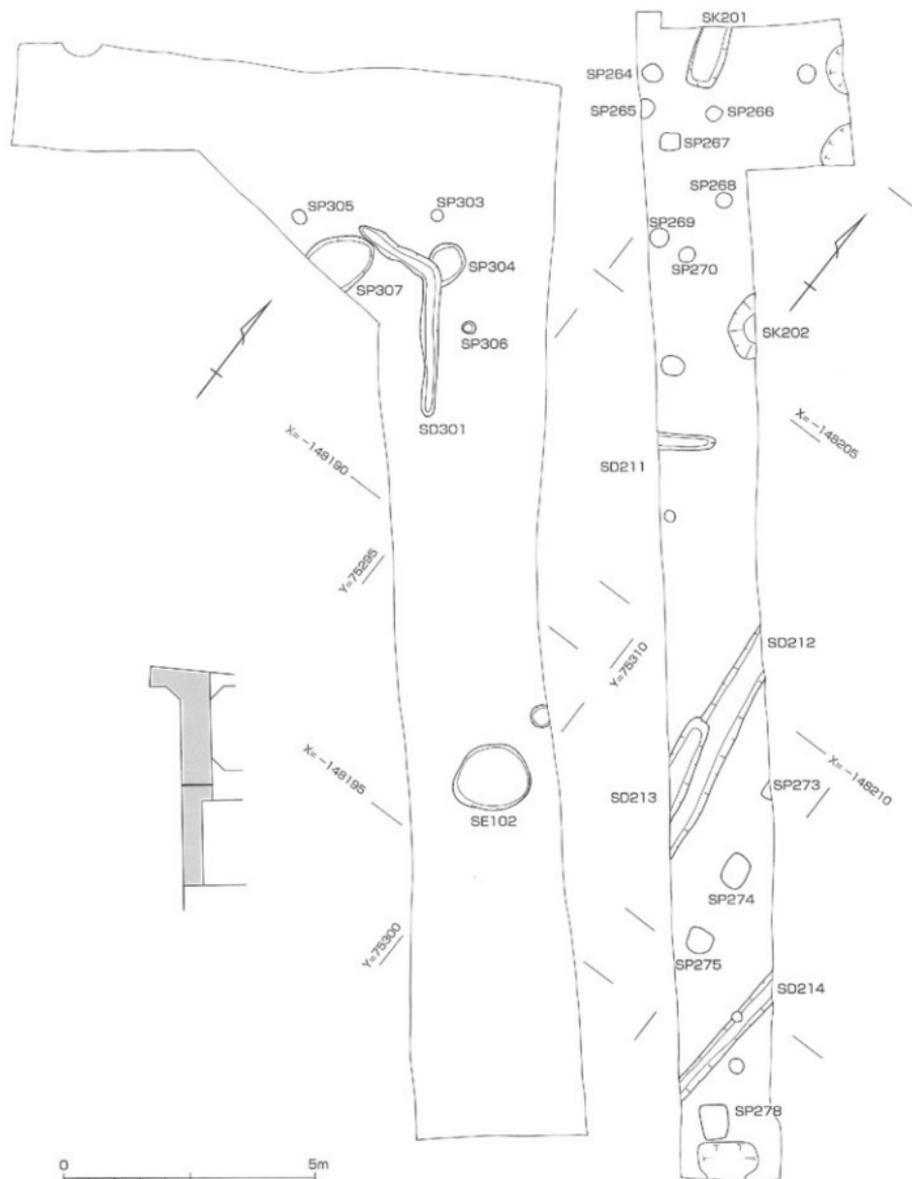
第2～5層 灰色砂混シルト層～暗褐色シルト層＝旧耕土である。旧耕土と考えられる層は調査区の最も厚いところで5層、少なくとも2層は盛られていることが確認されているが、層の数にかかわらず地表面から110～70cm程度の深さである。

第6層 灰色シルト層である。奈良時代の土器を多く含む層である。時期を示す土器としては8世紀から10世紀代のものが中心であり、堆積時期としてはそれ以降と考えられる。上位の層の違いによらず、調査区の全域で、地表面から110～70cm下で確認した。灰色シルト層の上面で11世紀末から12世紀初頭の木棺墓を検出しており、これが第1遺構面となる。この第1遺構面で、古墳時代末頃の遺構が検出しており、古墳時代の遺構が何らかの形で削平を受けずに残ったためと考えられる。

第7層 暗灰褐色シルト層。湿地性の堆積層と考えられるが、この層の上面で遺構を確認している。第2遺構面である。この層は、砂～シルトの多様な土の堆積の集合体である。



第48図 第2調査区 土層断面図位置図



第49図 第2調査区 第2遺構面北・中央 遺構平面図

## 2. 遺構

## 第3遺構面

第3遺構面は、地表下約0.9m～1.4m（標高約6.20m～6.50m）で検出された古墳時代前期の遺構面である。

検出遺構は、古墳時代前期頃の溝2条（SD301・SD305）・ピット7基（SP301～SP307）である。

## SD301

SD301は、調査区中央付近で検出された北西から南東方向へ伸びる溝状遺構で、現存長4.5m、幅25cm～40cm、深さ10cm～20cmを測る。ピットは、直径20cm～60cm、深さ10cm～20cmを測るが、建物としては纏まらなかった。各遺構の埋土内より、土師器の小片が出土しており、古墳時代前期頃の遺構であると推定される。

## SD305

SP279からSK203の周辺で、全体に土層の変化があり、この部分について全体に0.1m程掘削するとSD305が検出された。北はSP279に切られ、幅約0.6m・深さ0.1mの規模の溝状遺構となった。

## 第2遺構面

第2遺構面の検出遺構は、古墳時代～平安時代の溝6条（SD211～SD215・SD223）・ピット28基（SP278他）、土坑2基である。

## SD212

調査区中央で検出した幅80cm、深さ20cmを測る南北に走る溝である。

この溝は、方形の柱掘形と方位が一致しており、何らかの区画する溝である可能性がある。また、ST104に切られており、12世紀前半以前の時期のものと考えられ、検出面の灰褐色砂層中には5世紀後半代の土器が含まれていることから、この溝は6世紀から11世紀の間に築かれたものと考えられる。

## SP273

## ～SP275

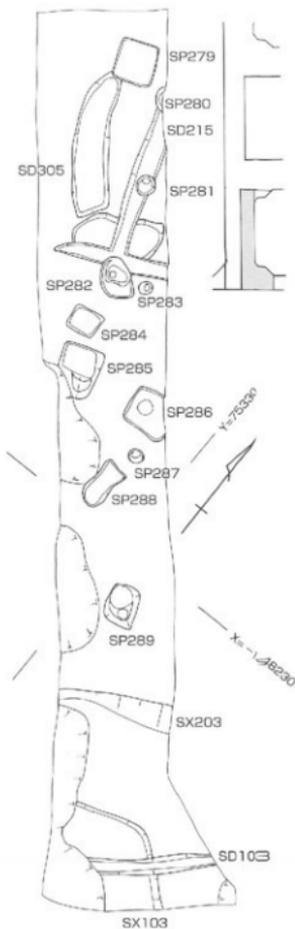
北に延びる2間（南北5m以上）以上の柵になると考えられる。柱掘形は、一辺0.5mを測り、柱間は1.8mである。いずれも抜き跡があり、SP274の断面によれば、南に抜き取られたようである。SD212と方位が一致しており、何らかの区画か又は建物が存在していた可能性がある。

## SK201

調査中にSE202と呼称していた遺構である。調査区北端で検出した幅70cm、長さ140cm以上、深さ75cmを測る土坑である。最終堆積層中から平安時代の土器が出土している。

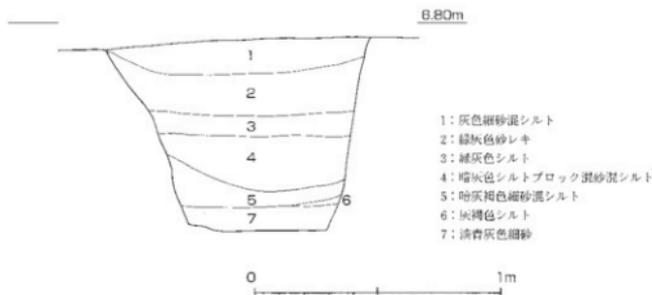
## SP278

一辺0.6mの柱掘形である。柱の抜き取りの痕跡がある。この柱に伴うようなものではなく、建物としてはまとまらなかった。抜き取り穴の最上層の埋土内に須恵器坏身が1点完



0 5m

第50図 第2調査区南 遺構平面図



第51図 第2調査区 SK201 断面図

形で出上している。この土器の年代は、TK43型式にあたることからして、この柱に伴う建物の廃絶時期は、後述のSD223と余り時期差はないものと思われる。

## ピット

調査区中央から南半で、ピットを幾つか検出している。いずれも時期としては、平安時代のものと考えられるが、建物として組めるようなまとまりには至っていない。

SP279は、一辺0.8m・深さ0.6mを測る方形の掘形をもつ。検出時は柱穴と思われたが、遺構内の層序は、水平に堆積する炭層が堆積上を大きく上下二つに分け、柱痕が存在しないような堆積状況であった。遺構の性格については不明である。

SP282・SP284・SP285・SP286・SP289は柱穴と考えられる。SP282・SP286・SP289では柱痕が確認できた。SK203は溝状遺構で切られていたため当初柱穴と考えたが、長径1.9m、短径1.0m、深さ0.1mを測る長円形の上坑状の遺構となった。またSP288も柱穴と思われたが、長径1.0m、短径0.6m、深さ0.1mを測る不整形の上坑状の遺構となった。須恵器皿の半分の破片が出土した。SP283・SP287・SP281・SP282は円形の掘形をもつ柱穴と考えられる。

## SD215

SD215は幅約0.3～0.4m、深さ0.05mの浅い溝状遺構で、T字状に交わるが、特に切り合いはない。

## SX203

SX203は、南側へ落ち込む遺構である。地形が南へと下っていくことを示すものであろう。

## 第1遺構面

第1遺構面は、地表下約0.8m～1.0m（標高約6.50m～6.70m）で検出された平安時代末の遺構面である。

## SK101

SK101は、調査区西側で検出された楕円形の土坑で、長径2.1m×短径1.5m以上、深さ15cm～20cmを測る。

現状でも常時、湧水があり、「溜め井戸」的なものであった可能性が考えられる。

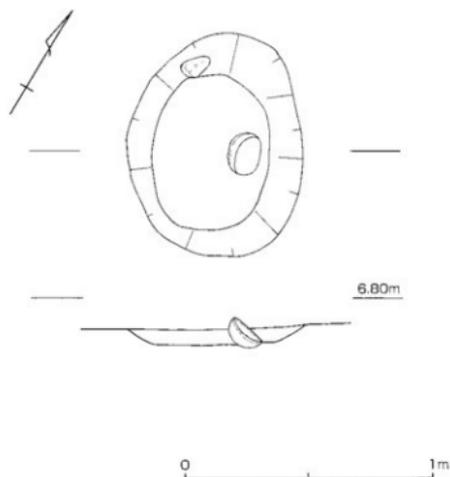
埋土内から、平安時代の須恵器・土師器が出土している。

## SK102

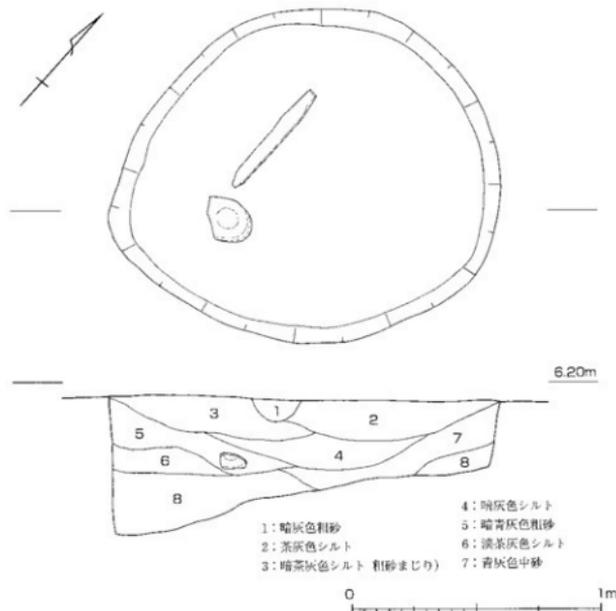
SK102は、調査区北側で検出された楕円形の土坑で、ST02の南東方約0.7mに位置している。長径90cm×短径70cm、深さ5cm～10cmを測る。埋土内から、平安時代の須恵器塊が1点出土している。

## SD102

SD102は、調査区北半で検出された東西方向にのびる溝状遺構で、全長3.5m以上、



第52図 第2調査区 SK102 平面・断面図



第53図 第2調査区 SE102 平面・断面図

- 1: 暗灰色粗砂
- 2: 茶灰色シルト
- 3: 暗茶灰色シルト (粗砂まじり)
- 4: 暗灰色シルト
- 5: 暗青灰色粗砂
- 6: 淡茶灰色シルト
- 7: 青灰色中砂
- 8: (不明)

幅 1.7m ~ 3.2m、深さ 20cm ~ 25cm を測る。周辺の地形を見ると、北側から南側へと低くなる緩斜面であるが、SD102は、この斜面の等高線に沿っている点から、人工的に掘削された溝であると考えられる。

埋土内から、平安時代の須恵器・土師器の他、全長 90cm × 幅 10cm の板材が 1 点出土している。

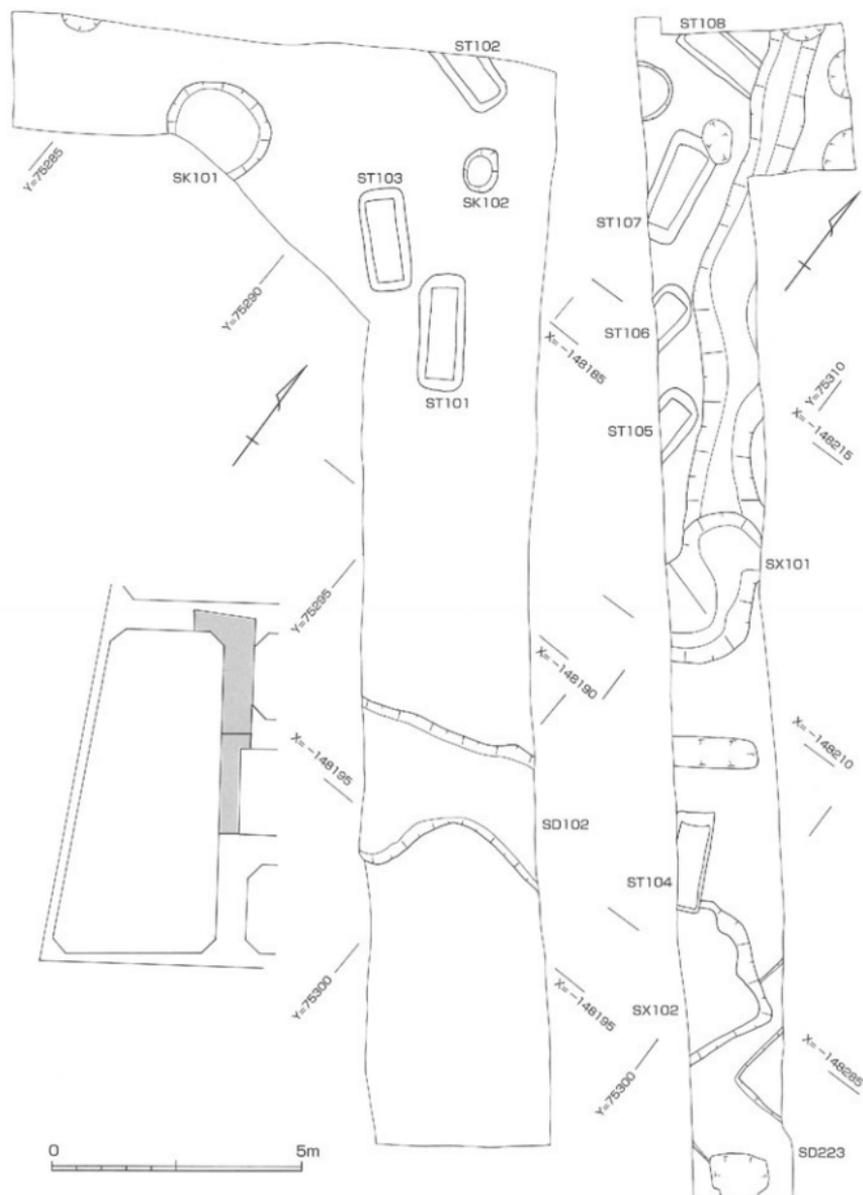
SE102は、調査区北半で検出された楕円形の井戸である。長径 1.5m × 短径 1.3m、深さ 0.6m ~ 1.1m を測る。SD102内に位置しており、第 2 遺構面検出時に確認されたが、本来は、第 1 遺構面に伴う遺構であると考えられる。

埋土内から、平安時代の須恵器・土師器が出土している。

SP120は、調査区北側で検出されたピットで、直径 20cm、深さ 15cm を測る。それ以外には、ピットは検出されなかったため、建物に伴うものであるかどうかは、不明である。

埋土内から、平安時代の須恵器・土師器が出土している。

調査区南端では、平安時代末以降の遺構面で、幅約 0.3m、深さ 0.1m の規模の溝状遺構 (SD103) と SD103 に切られる浅い落ち込み状遺構 (SX103) が検出された。いずれも少量の上師器・須恵器が出土した。



第54図 第2調査区 第1遺構西北・中央遺構平面図

SD223

第1遺構面の同一面上で、古墳時代の遺構を検出している。  
 調査区南で確認した幅1.6m、深さ5cmを測る溝である。南北方向から直角に折れ曲がり、東西方向に向きを変えている。

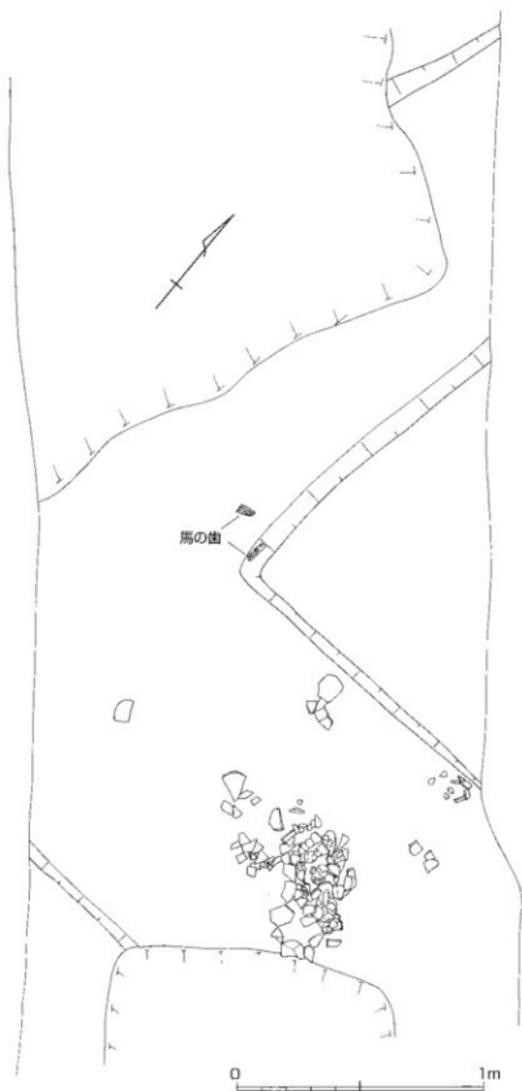
コーナー部分には馬の歯が出土している。溝出土遺物の内、須恵器の坏身は口径がまだ人振りで、端部は短いものである。おそらくTK209型式の範疇で捉えられるものと考えられる。

溝の埋没時期は、おそらく6世紀末頃と考えられる。

周辺の調査で、この遺構に関連するものは確認されておらず、遺構の性格についての詳細は不明である。

層序の上から考えると古墳時代以降、この部分が高まりとして存在し、削平を受けずに部分的に残った結果と考えられる。

御蔵遺跡全体ではこの時期の遺物は他の調査地点でも確認されており、本来的にはこの時期の遺構も当遺跡には存在していたと考えられる。



第55図 第2調査区 SD223 平面図

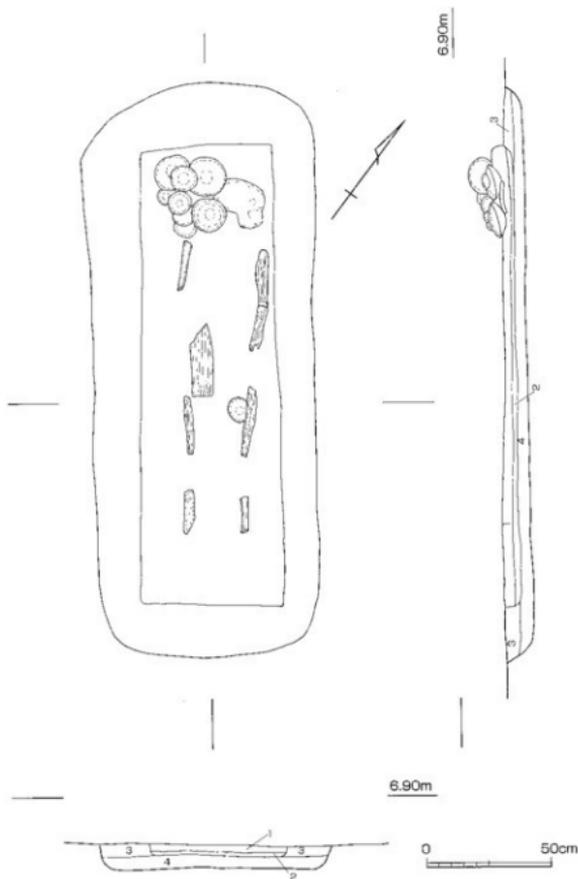
## ST101

ST101は、調査区北端で検出された長方形を呈する木棺墓で、全長230cm×幅85cm～95cmを測る。後世の攪乱により、上面は削平を受けており、現存する深さ10cm～15cmを測る。主軸方位は、N36°Wで、頭位の方向は、北西側である。

木棺の痕跡が明瞭に残っており、復元される木棺の規模は、全長185cm×幅55cm、深さ10cm以上を測る。棺内中央付近で、底板と思われる板材が一部確認されている。

木棺内では、人骨を検出しており、遺存状況は良好ではないが、ほぼ現位置を保っていると考えられ、頭蓋骨・左右の上腕骨・左右の大腿骨等が部分的に確認できた。人骨は、右側頭部を上にして、東向きに埋葬されていた。人骨から見て、推定される身長は約1.55m～1.65mと考えられるが、性別・年齢等については、全く不明である。

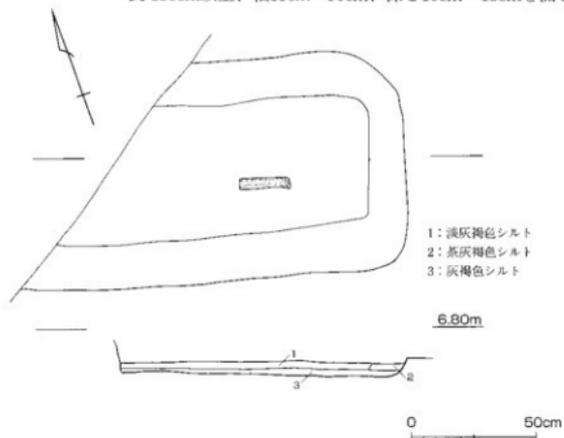
後頭部のすぐ西側で、頭蓋骨の上面に接するようにして、須恵器碗3個・土師器小皿5枚が、いずれも口縁部を上向きにして置かれた様な状態で出土している。おそらく木棺上に供献された土器が、棺材が腐食したため、棺内に転落したとも考えられる。また、頭蓋骨周辺から出土した遺物の他に、左大腿骨付近から土師器小皿が1枚出土している。また、棺内埋土及び棺外の掘り方内より、須恵器・土師器の小片が出土している。



第56図 第2調査区 ST101 平面・断面図

- 1: 淡青灰褐色シルト
- 2: 淡灰褐色シルト
- 3: 茶灰褐色シルト
- 4: 灰褐色シルト

ST102 ST102は、調査区北端で検出された長方形を呈する木棺墓で、ST101の北西方約3.5mに位置している。西側は調査区外にのびているため、全体の規模は不明であるが、現存長150cm以上、幅85cm～90cm、深さ10cm～15cmを測る。



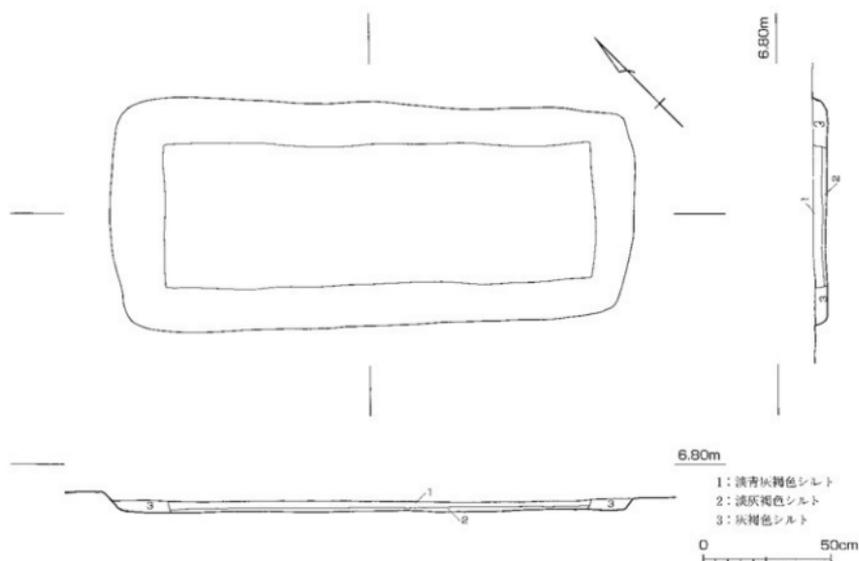
第57図 第2調査区 ST102 平面・断面図

主軸方位は、 $N72^{\circ}W$ で、頭位の方向は、西北西側であると推定される。

ST101に比べると不明瞭ではあるが、木棺の痕跡が確認できた。推定される木棺の規模は、全長125cm以上×幅50cm～55cm、深さ5cm以上を測る。

木棺上面で、牛骨が出土している。検出面よりもやや浮いた状態で出土しており、木棺の蓋が崩落した段階に混入したと考えられる。

埋上内から、平安時代の須恵器・土師器が出土している。



第58図 第2調査区 ST103 平面・断面図

ST103 ST103は、調査区北端で検出された長方形を呈する木棺墓で、ST101のすぐ西方約0.2m～0.5mに位置している。全長205cm×幅80cm～95cm、深さ10cm～15cmを測る。

主軸方位は、N45°Wで、頭位の方向は、人骨が検出できなかったため、明確ではないが、北西側の木棺の幅が、南東側に比べて若干広いという点やST101とほぼ同一方向を向いている点等からして、北西側である可能性が高いと推定される。

ST101に比べると不明瞭ではあるが、木棺の痕跡が確認できた。推定される木棺の規模は、全長170cm×幅55cm～60cm、深さ10cm以上を測る。

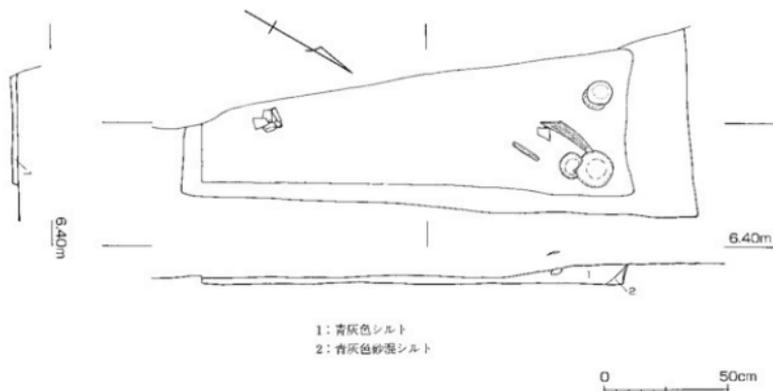
身長については、木棺の規模から見て、ST01とほぼ同じくらいと推定されるが、性別・年齢等については、全く不明である。

埋土内から、平安時代の須恵器・土師器が出土している。

ST104 ST104は、調査区中央で検出した木棺墓である。墓域は、幅78cm以上、長さ202cm、深さ13cmを測る。木棺は長さ170cm、幅は北小口部で60cm、南小口部で50cm（推定）を測り、平面は台形を呈する。深さ9cmを測る。棺材は蓋と思われるものが若干検出されたが、その他は、木棺痕跡も含めて明確には検出出来なかった。

棺内には頭位と思われる部分よりややや上に、土師器がそれぞれ2枚づつ頭の右と左に置かれていた。また、頭位については、歯が1点出土しており、ほぼ特定できるものと思われる。また、その付近の土壌の中から、歯が4点、頭骨と思われる骨が僅かではあるが検出している。歯はかなり磨耗しており、年齢としては、壮年期の可能性が高い。また土器は、本来の頭位の推定範囲の上に一部重なり、棺上遺物である可能性が高い。

棺内の出土遺物の内1点は、ての字状口縁の痕跡を残すもので、時期としては、12世紀初頭の時期が与えられる。

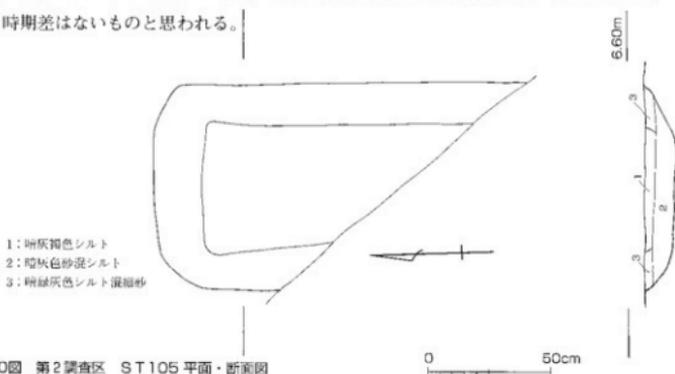


第59図 第2調査区 ST104 平面・断面図

ST105

ST105は、調査区中央やや北で、検出した木棺墓である。墓域は北半部分のみを検出しており、幅25cm、長さ148cm以上、深さ11cmを測る。木棺は長さ110cm以上、幅は北小口部で54cmを測り、平面は台形を呈すると思われる。深さは3cmを測る。棺材は検出されなかった。

出土遺物は、いずれも細片であり、時期の特定は困難であるが、おそらくST104とあまり時期差はないものと思われる。

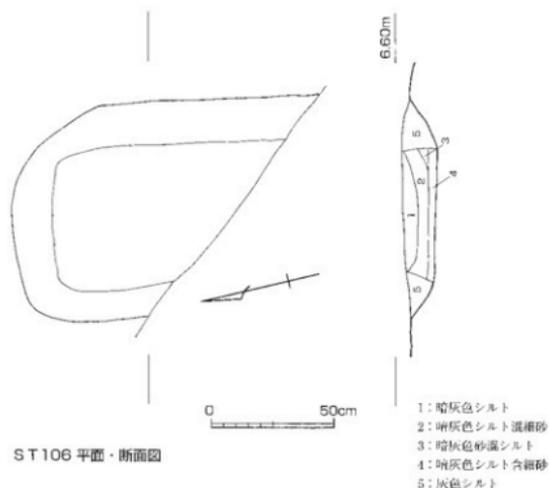


第60図 第2調査区 ST105 平面・断面図

ST106

ST106は、調査区中央の北寄りで検出した木棺墓である。墓域は北半部分のみを検出しており、幅87cm、長さ126cm以上、深さ14cmを測る。木棺は長さ95cm以上、幅は北小口部で58cmを測り、平面は台形を呈すると思われる。深さは14cmを測る。棺材は検出されなかったが、土層断面から木棺痕跡を確認している。

棺内には頭位と思われる部分より、須恵器皿が縦向きになって出土している。この出土



第61図 第2調査区 ST106 平面・断面図

状況からみて、おそらくこの土器も棺上遺物であると考えられる。この棺内からは、人骨等は出土していない。また土器は、本来の頭位の推定範囲の上に一部重なることから、棺上遺物である可能性が高い。なお、出土した須恵器の年代観から、11世紀末と考えられる。

## ST107

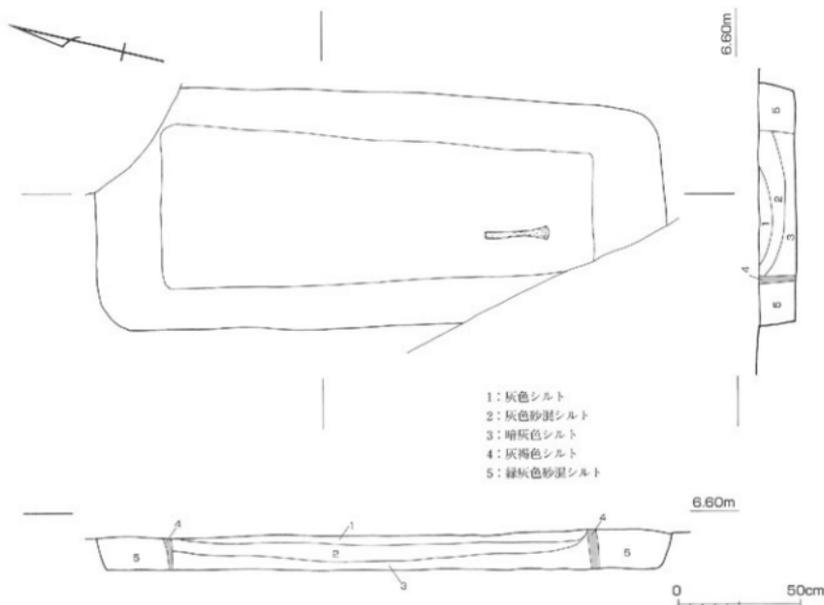
ST107は調査区北で検出した木棺墓である。墓域は幅98cm、長さ232cm、深さ16cmを測る。木棺は長さ176cm、幅は北小口部で67cm、南小口部で49cmを測り、平面は台形を呈する。深さは16cmを測る。棺材は確認できていないが、土層断面から、木棺痕跡を確認している。

棺内には頭位と思われる部分よりやや上に、土師器が割れた状態で3点出土している。

また、棺の南西端付近から、右脛骨と思われる人骨を検出している他、釘釘も1点骨の付近での木棺痕跡の部分で検出している。

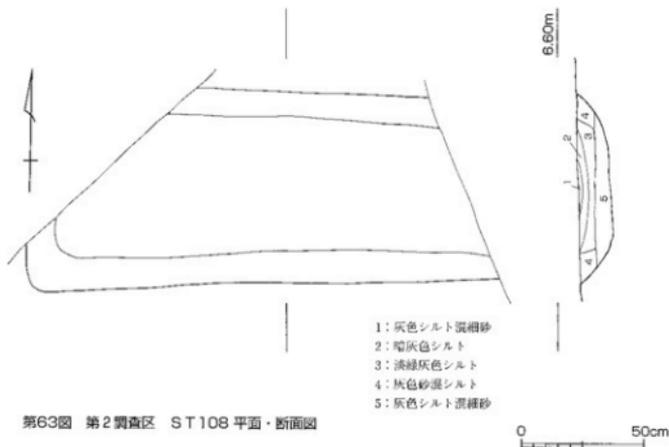
また、土器は、本来の頭位の推定範囲の上に一部重なることから、棺上遺物である可能性が高い。

棺内の出土遺物から、11世紀末の時期が与えられ、ST104より先行するものと思われる。



第62図 第2調査区 ST107 平面・断面図

- ST108** ST108は、調査区北で検出した木棺墓である。墓壇は幅83cm、長さ192cm、深さ14cmを測る。木棺は長さ178cm以上、幅は西で60cm、東で51cmを測り、平面は台形を呈する。深さは7cmを測る。棺材は検出できておらず、木棺痕跡も明確には検出できなかった。
- 棺内には頭位と思われる部分よりやや上に、土師器が1枚置かれていた。また土器は、本来の頭位の推定範囲の上に一部重なることから、土器は棺上遺物である可能性が高い。棺内の出土遺物から、12世紀初頭の時期が与えられる。



第63図 第2調査区 ST108 平面・断面図

### 3. 出土遺物

73~75は、立ち上がりが低く内傾し、体部は浅い須恵器環である。73はSP278出土で、TK43型式併行と考えられ、74・75はSD223出土で、TK209型式併行と考えられる。

- SK201** 76は、須恵器の蓋である。

77・78は、口径14cm~16cm、器高4.1cm~4.4cmで、平坦な底部と斜め上にまっすぐのびる口縁部とからなる須恵器環である。底部外面には、高台がつくものである。高台は外側に張り、断面形が角張っている。

79は、口径14.9cm、器高2.7cmで、平坦な底部と斜め上にまっすぐのびる口縁部とからなる須恵器皿である。底部外面にヘラケズリをほどこす。

#### 黒褐色

##### シルト層

80は、口径14.0cm、器高3.0cm、平らな底部と斜め上にひらく短い口縁部とからなる。口縁部は下半が内彎、上半がわずかに外反する弧をえがくものであって、口縁端部が内側に丸く肥厚する土師器環である。

81は、口径16.0cm、器高4.7cm、平らな底部と斜め上にひらく口縁部とからなる黒色土器A類である。

83は、口径16.0cm、器高5.5cm、外側に張る高台と内湾しながらやや斜め上方にのびる口縁部とからなる。灰釉陶器皿である。

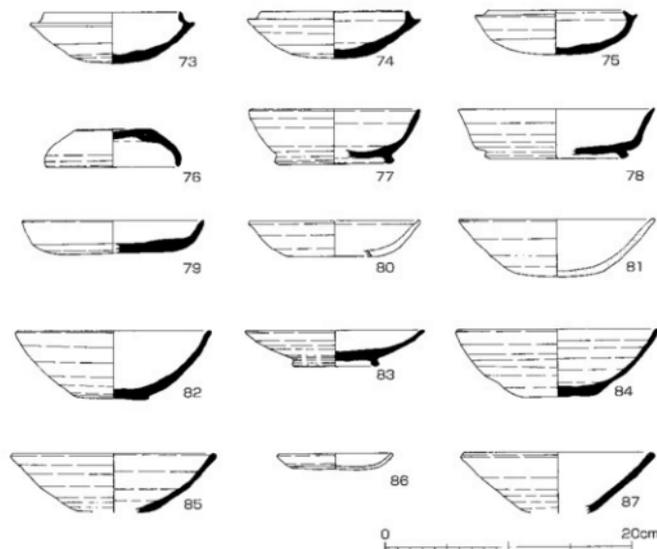
SK 102 82は、口径16.0cm、器高5.5cm、低い高台と内湾しながら斜め上方にのびる口縁部とからなる。端部は丸く収める。底部には糸切り痕が残る。須恵器碗である。

SE 102 84は、口径16.5cm、器高5.5cm、平らな底部と内湾しながら斜め上方にのびる口縁部とからなる。端部は丸く収める。須恵器碗である。

SX 102 85は、口径16.7cm、器高4.8cm、平らな底部とやや内湾しながら斜め上方にのびる口縁部とからなる。端部は丸く収める。須恵器碗である。

SX 101 86は、口径16.5cm、器高2.7cm、平らな底部と斜め上にひろく短い口縁部からなる。口縁部はわずかに内湾するもので、端部先端が内傾し、断面三角形を呈する。内面には、の字ナデの痕跡を残す土師器皿である。

87は、口径15.8cm、器高5.0cm、平らな底部と斜め上方にのびる口縁部とからなる。端部は丸く収める。須恵器碗である。



73～79・82・85・87：須恵器  
80・86：土師器 83：灰釉陶器  
81：黒色土器

73：SP278、74・75：SD223、76～79：SK201  
80・81・83：黒褐色シルト、82：SK102、84：SE102  
85：SX102、86・87：SX101

第64図 第2調査区 遺構・黒褐色シルト層 出土遺物実測図

ST 101 97は、口径9.5cm、器高1.3cm、平らな底部と斜め上方にのびる短い口縁部からなる。底部には糸切り痕を残す土師器皿である。

98～101は、口径9.0cm～10.4cm、器高1.3cm～1.8cm、やや丸みを帯びた底部と斜め上方にのびる短い口縁部からなる。口縁部はての字状口縁の形態を残す。

102～104は、口径16.7cm、器高4.8cm、低い高台と内灣しながら斜め上方にのびる口縁部とからなる。端部は丸く取める。底部には糸切り痕を残す須恵器甕である。

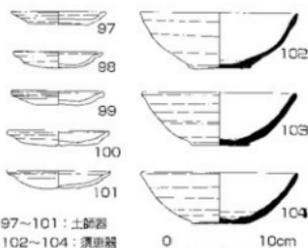
ST104

105は、口径9.0cm、器高1.6cm、平らな底部と斜め上方にのびる短い口縁部からなる。底部には糸切り痕を残す土師器皿である。

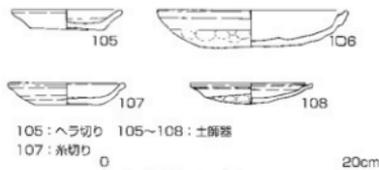
106は、口径15.4cm、器高3.1cm、平らな底部と内灣ぎみに斜め上方にのびる短い口縁部からなる土師器杯である。

107は、口径10.0cm、器高1.7cm、やや丸みを帯びた底部と斜め上方にのびる短い口縁部からなる。口縁部は、ての字状口縁の形態を残す土師器皿である。

108は、口径9.6cm、器高1.8cm、平らな底部と斜め上方にのびる短い口縁部からなる。底部にはヘラ切り痕を残す土師器皿である。



第65図 第2調査区 ST101 出土遺物実測図

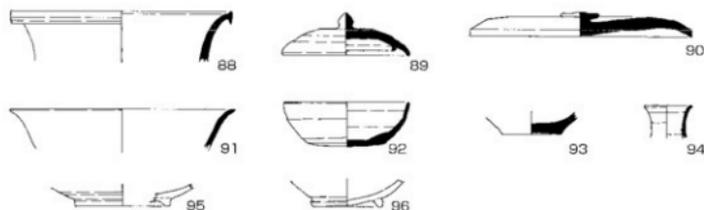


第66図 第2調査区 ST104 出土遺物実測図

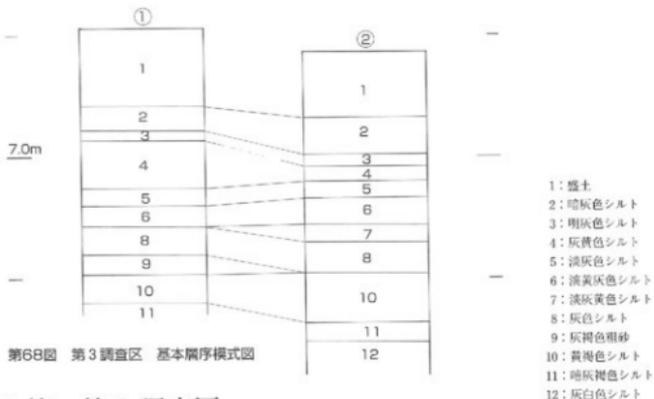
灰色シルト層

88は、口径17.0cmで、口縁部が垂下する須恵器の甕である。89は、口径10.4cmで、宝珠形つまみを持つ須恵器蓋である。口縁部内面に返りを持つが、返りの先端が口縁部以下に突出することはない。90は、口径17.8cm、平らな頂部およびわずかに屈曲する縁部から成る須恵器蓋である。頂部に扁平なつまみを持つ。91は、口径18.2cm、外反する口縁を持つ須恵器である。92は、口径10.2cm、器高3.8cm、内灣しながら立ち上がる口縁をもつ須恵器杯である。93は、底径5cmの須恵器である。94は、小型壺。粘土塊から一気に引き上げられたもので、頸部内面にははしぼり目を残す。

95・96は、断面台形状の高台の付く土師器である。



第67図 第2調査区 灰色シルト層 出土遺物実測図



## 第5節 第3調査区

### 1. 基本層序

この調査区は6丁目北地区の北に位置する。調査地内の基本層序については以下の通りである。

東から西へかけて緩やかに傾斜している地形である。全体に先に述べた灰色シルト層・暗灰褐色シルト層の2つのキー層が存在する。

第1層 現代盛土。場所によって異なるが、40～35cmの厚さで盛られている。

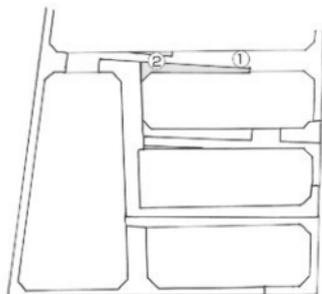
第2～7層 暗灰色シルト層～淡灰色シルト

層＝旧耕地である。旧耕土と考えられる層は調査区の最も厚いところで6層、少なくとも4層は盛られていることが確認されているが、層の数にかかわらず地表面から80～65cm程度の深さである。

第8層 灰色シルト層。時期を示す土器としては8～10世紀代のものが中心であり、堆積時期としてはそれ以降と考えられる。上位の層の違いによらず、調査区の全域で、地表面から60～80cm下で確認した。灰色シルト層の上面は削平を受けているようで遺構は検出できていない。

第9～10層 灰褐色粗砂～黄褐色シルト層である。あまり遺物は含まれていない。

第10層 暗灰褐色シルト層。湿地性の堆積層と考えられるが、この層の上面で遺構を検出している。以上がこの調査区の基本的な層序だが、調査地は、幅70cm程度の細いトレンチであるため、得られたデータはごく限られたものとなった。調査は工程の便宜上、街路の側溝が入れられる部分について、設計上の掘削深度までしか行わなかったため、標高6.3mより下層については未調査となった。



第69図 第3調査区 土層断面図位置図

## 2. 遺構

先に述べたのように、第10層上面で溝を1条検出している。SD215は、幅約10cm、深さ20cm程度である。調査地の幅が狭いため、詳細は不明である。また、3ヶ所で畦畔状の高まりを検出している。いずれも遺物が出土しておらず、時期は確定しにくい。

## 3. 出土遺物

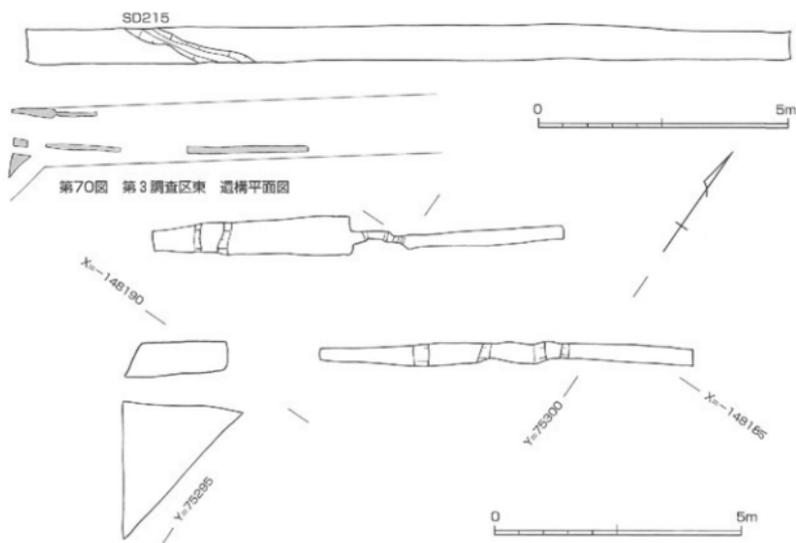
### 灰色シルト層

109は、外上方にのびる口縁をもつ内面黒色の黒色土器A類である。

111は、口径8.0cm、器高1.5cm、平らな底部と斜め上方にのびる短い口縁部からなる。底部には糸切り痕を残す土師器皿である。

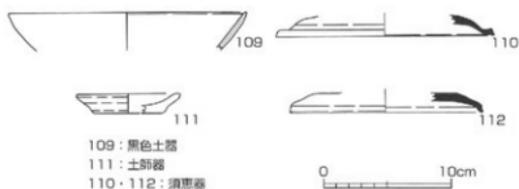
110は、口径17.0cm、笠形の頂部で下方へ突出する短い縁部をもつ須恵器坏蓋である。

112は、口径15.0cm、扁平な頂部に屈曲し下方へ突出する短い縁部をもつ須恵器坏蓋である。



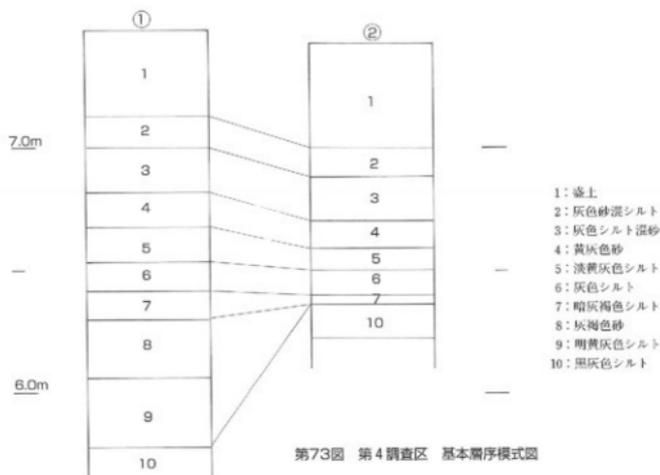
第70図 第3調査区東 遺構平面図

第71図 第3調査区西 遺構平面図



109：黒色土器  
111：土師器  
110・112：須恵器

第72図 第3調査区 灰色シルト層 出土遺物実測図



第73図 第4調査区 基本層序模式図

## 第6節 第4調査区

### 1. 基本層序

この調査区は6丁目北地区の中央から東に位置する。調査地内の基本層序については以下の通りである。

第1層 現代盛土。場所によって異なるが、45～35cmの厚さで盛られている。

第2～5層 灰色砂混シルト層～淡黄灰色シルト層＝旧耕土である。旧耕土と考えられる層は調査区の最も厚いところで4層、少なくとも

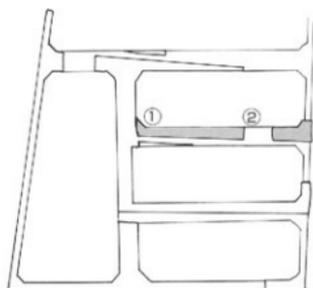
2層は盛られていることが確認されているが、層の数にかかわらず地表面から70～100cm程度の深さである。

第6層 灰色シルト層。奈良時代の土器を多く含む層である。時期を示す土器としては9世紀代のものが中心であり、堆積時期としてはそれ以降と考えられる。上位の層の違いによらず、調査区の全域で、地表面から60～80cm下で確認した。灰色シルト層の上面は削平を受けているようで遺構は検出できていない。

第7層 暗灰褐色シルト層。湿地性の堆積層と考えられるが、この層の上面で遺構を検出している。この層は、砂～シルト層の多様な土の堆積の集合体である。

第8～9層 灰褐色砂～明黄灰色シルト層。下層の一部に庄内期の遺物を含む。

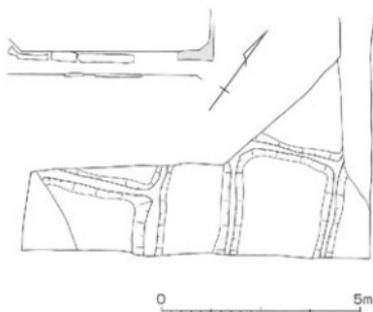
第10層 黒灰色シルト層。水田耕土と考えられる層で、この上面で遺構を検出している。



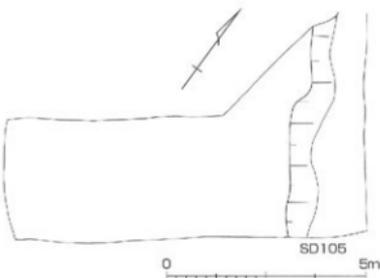
第74図 第4調査区 土層断面図位置図

## 2. 遺構

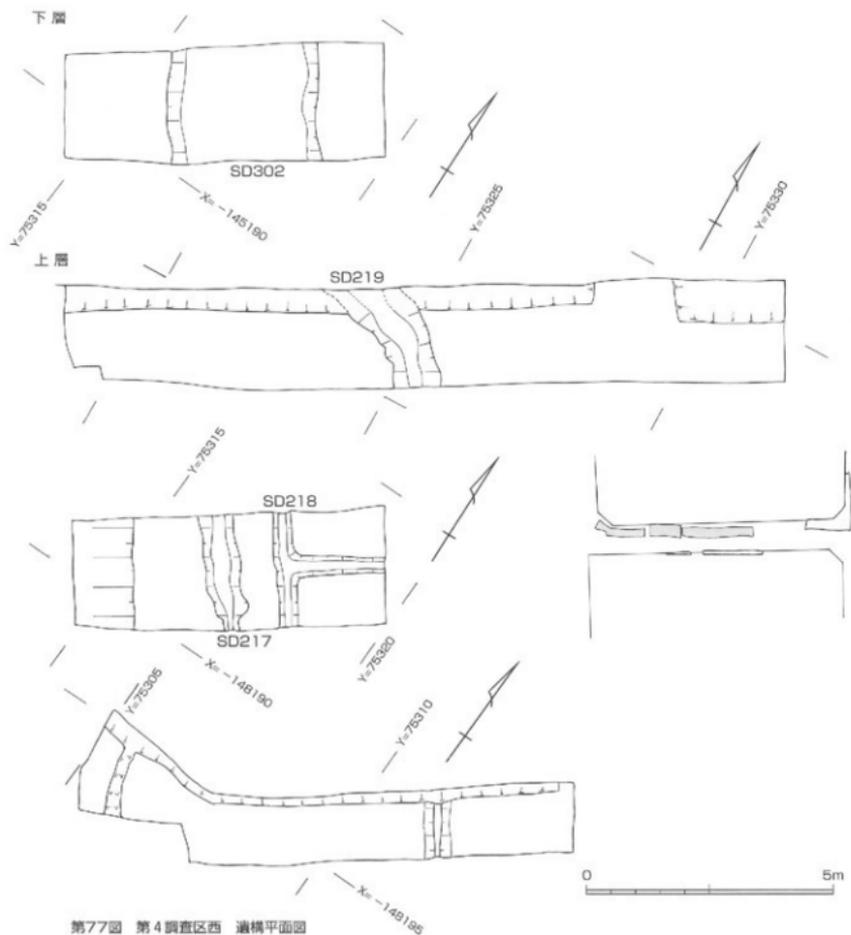
- 下層** 下層で検出した遺構は、溝が1条、小区西の水田6面である。
- SD302** 調査区西半で検出した溝SD302は、幅約3m、深さは約20cmである。南北方向に延びていると考えられるが、全体像や、機能については不明である。
- 水田** 調査区東で検出した小区西の水田6面は、いずれも部分的で1枚の水田の広さは不明である。
- 畦畔は南北方向3条、東西方向2条の合わせて5条である。上端部の幅10~20cm、下端部の幅45~80cmで、高さ3~10cmで断面形は蒲鉾状である。各々の畦畔はT字状に交差しており水口等は検出されなかった。また稲株痕や足跡等も認められなかった。
- 今回検出された水田面は、細片であるが古墳時代と思われる須恵器を含む土石流に切られていることや東隣の調査地や周辺で検出された水田面の時期などから、おそらく弥生時代後期末（庄内併行期）のものであると考えられる。
- 上層** 上層で検出した遺構は、溝が4条と、西へ下がる段差、畦のような隆起がそれぞれ1ヶ所である。溝は南北方向に走るもの3条と、T字のものが1条である。
- SD217** 溝は、調査区中央の南北方向の溝、SD217が、幅80cm、深さ約10cm程度のものである。
- SD218** SD218は、調査区の中央で検出されたT字形のものである。幅は約40cm、深さは10~15cm程度である。
- SD219** SD219は、調査区の中央で検出したもので、幅約1m、深さは10cm程度である。機能については不明である。
- 段差** SD217の西側で西へ下がる段差を確認しているが、高低差は10cmほどのものである。段差の性質は不明である。畦状の隆起は調査区の西側で見つかった。幅は50cm、高さは15cm程度である。水田の畦のようにみえるが、調査区が狭く、正確なことはわからない。
- 畦状隆起**
- SD105** SD105は、南東方向に流れる水路状の遺構で、南西の肩のみ検出しており、深さ50cm以上である。上面を同方向の近世以降の水路に削平されている。中世末から近世初めにかけての遺物が出土している。



第75図 第4調査区東 下層 遺構平面図



第76図 第4調査区東 上層 遺構平面図



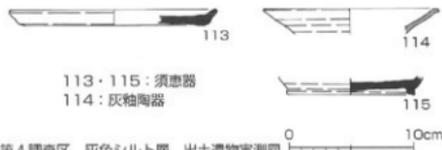
### 3. 出土遺物

#### 灰色シルト層

113は、短く外反する口縁部と下面にヘラ切り痕をとどめた平らな底部を持つ、口縁径16.5cm、高さ1.3cmを測る須恵器皿である。口縁部と底部の境は明瞭な稜となる。

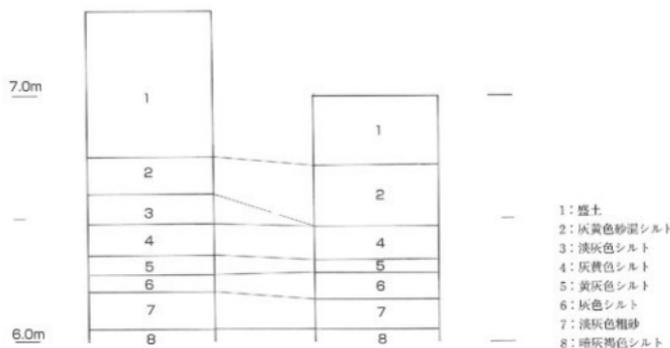
114は、外上方にのびる口縁をもつ灰釉陶器皿である。

115は、底部外面には、高台がつく須恵器である。高台は外側に張る。



113・115：須恵器  
114：灰釉陶器

78図 第4調査区 灰色シルト層 出土遺物実測図



第79図 第5調査区 基本層序模式図

## 第7節 第5調査区

### 1. 基本層序

第1層 現代盛土。場所によって異なるが、60～35cmの厚さで盛られている。

第2～5層 灰黄色砂混シルト層～黄灰色シルト層。旧耕土である。旧耕土と考えられる層は調査区の最も厚いところで6層、少なくとも2層は盛られていることが確認されているが、層の数にかかわらず地表面から60～35cm程度の深さである。

第6層 灰色シルト層。奈良時代の土器を多く含む層である。時期を示す土器としては8～9世紀代のもものが中心であり、堆積時期としてはそれ以降と考えられる。上位の層の違いによらず、調査区の全域で、地表面から60～100cm下で確認した。灰色シルト層の上面でビット等の検出しており、これが第1遺構面となる。この第1遺構面は、西半部分にのみ存在しており、東側は、何らかの形で削平を受けているものと考えられる。

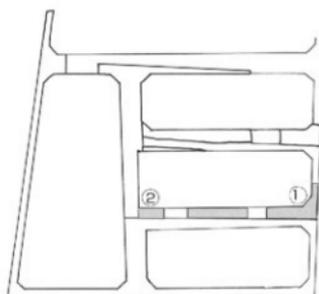
第7層 淡灰色粗砂である。あまり遺物は含まれていない。

第8層 暗灰褐色シルト層。湿地性の堆積層と考えられるが、この層の上面で遺構を検出している。第2遺構面である、この層は、砂～シルトの多様な土の堆積の集合体である。

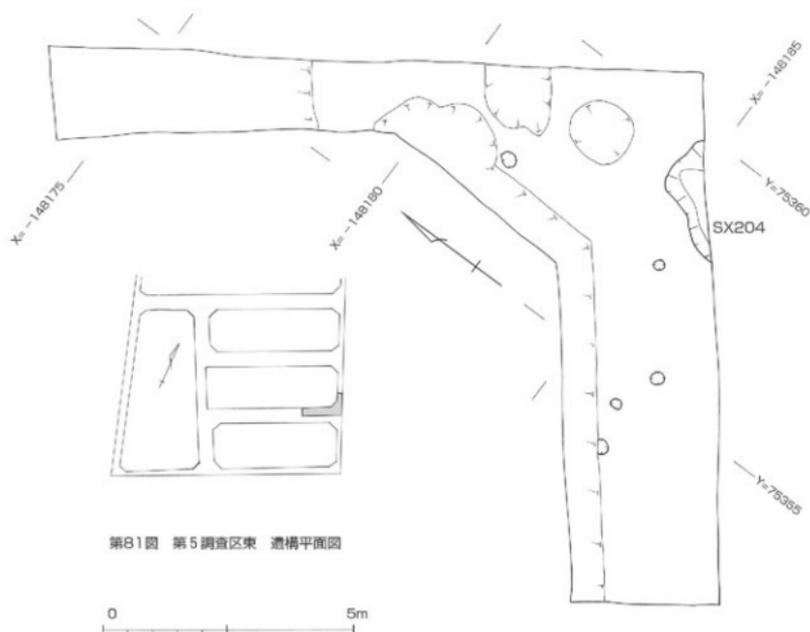
### 2. 遺構

#### 下層遺構面

下層遺構面は、出土遺物がごく小さな物ばかりであったため、正確な時期を判定できなかった。上位の遺構の時期から判断して奈良時代かそれ以前だと考えられる。暗灰褐色シ



第80図 第5調査区 土層断面図位置図



第81図 第5調査区東 遺構平面図

ルト層上面で検出した遺構は、溝3条、ビット5基、土坑1基である。

## 溝

溝はどれも調査区中央で見つかっている。幅はそれぞれ異なるが、方向はどれも南北方に走っている。どの溝も遺物の出土量は少ない。調査区の外に延びているため、全体像は不明だが、幅と深さについては、S D 220 が幅40cm程度で深さは約15cm、S D 221 と S D 222 は幅がそれぞれ約130cm・30cm深さが20cm・5cm程度である。

## SX204

SX 204 は調査区東で検出したもので、半分は調査区の外にあるため全体像は不明である。検出した範囲では径約2.5m深さは0.25m程度だが、機能についてはよくわからない。

## ビット

検出した5基のビットすべてが調査区東で確認されたものである。どれも径は20cm、深さ20cm程度のものだが、配列などからみて、建物等には纏まらないものと考えられる。

## 上層遺構面

基本層序の項で述べたように、奈良時代の土器を多く含む灰色シルト層の上面に造られた遺構面である。遺構は第5調査区の中でも、西側にだけ集中して存在しており、遺構は調査区中央西端がその広がり の東限と考えられる。検出した遺構は掘立柱建物が1棟と、土坑が1基である。

## 掘立柱建物

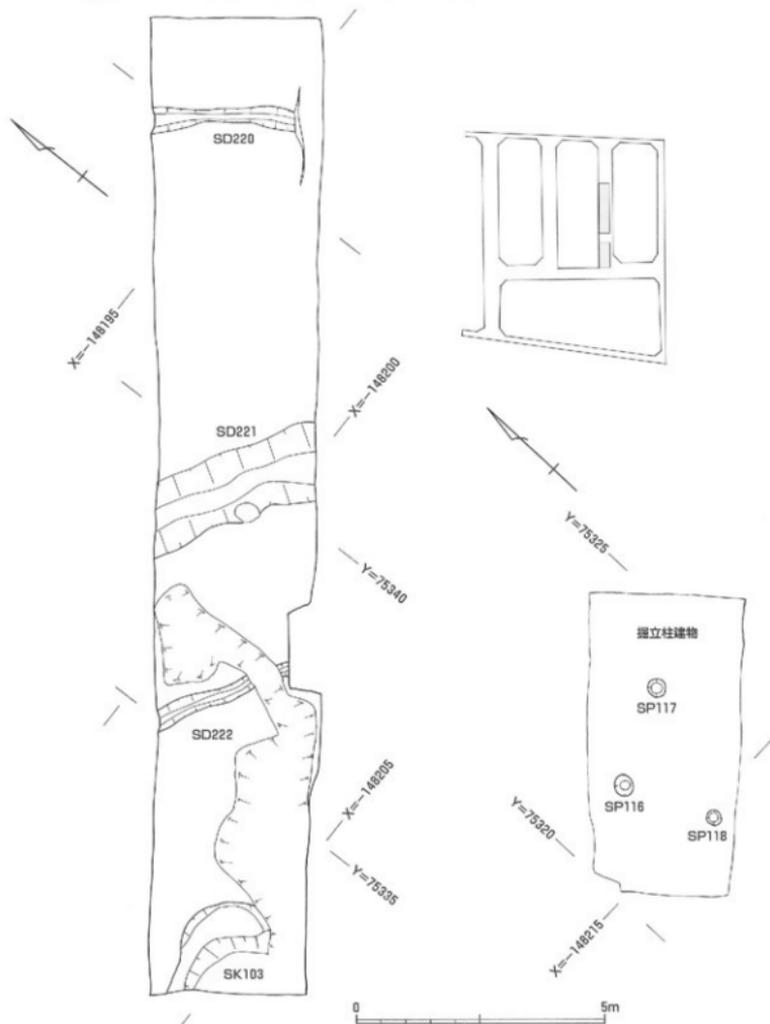
掘立柱建物は、調査区西で検出された。この調査区で確認されたのは、柱穴が3基(S P 116～S P 118)だが、どの柱も穴の中に礎盤と呼ばれる、柱の基礎になる石が据えられていた。柱穴はどれも径40cm程度である。断面で内部につまった土の様子を観察した結果、40cmを測る掘形の穴の底に基礎石を据え、そこに25cm程度の太さの柱を立てていたのではないかと考えられる。建物はほぼ東北に軸をもち、南北1間以上×東西2間以上の

柱間である。

SK103

SK103は、調査区中央区の西の端で一部を検出した。半分は調査区の外である。検出された範囲では直径が2.8m以上、深さは0.8mだが、本来はもう少し深さのあったものが、上側は後の時代に削られて、残った下側だけが調査で発見されたのではないかと考えられる。奈良時代末～平安時代の時期の遺物が比較的多く出土している。

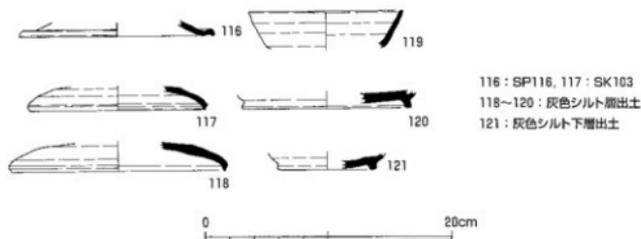
機能については不明だが、外見からは井戸の可能性が考えられる。



第82図 第5調査区 西・中央 遺構平面図

## 3. 出土遺物

- SP116 116は、口径16.0cm、笠形の頂部で下方へ突出する短い縁部をもつ須恵器杯蓋である。
- SK103 117は、口径14.4cm、扁平な頂部に屈曲し下方へ突出する短い縁部をもつ須恵器杯蓋である。
- 灰色シルト層 121は、底径8.0cm、底部外面には、高台がつくものである。高台は外側に張り、断面下層形は角張っている。
- 灰色シルト層 118は、口径17.5cm、扁平な頂部に屈曲し下方へ突出する短い縁部をもつ須恵器杯蓋である。
- 119は、口径12.5cmで、平坦な底部と斜め上にまっすぐのびる口縁部とからなる須恵器杯である。
- 120は、底径14.0cm、底部外面には、高台がつくものである。高台は外側に張っている。

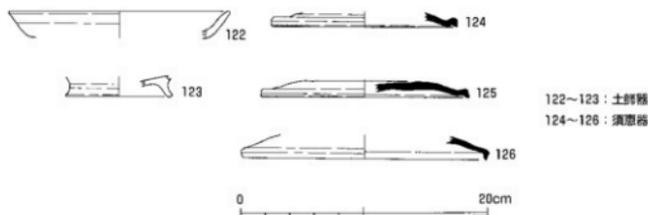


第83図 第5調査区 遺構・灰色シルト層 出土遺物実測図

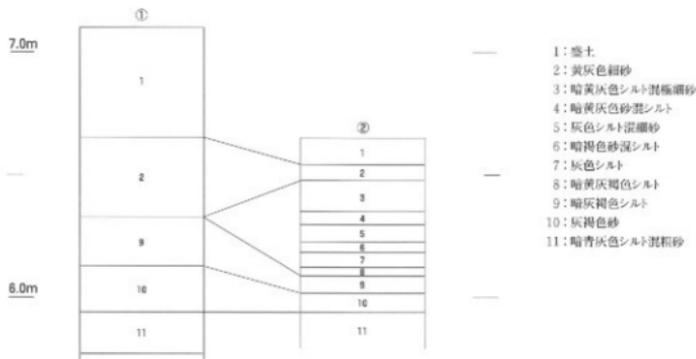
122は、口径18.0cm、斜め上にひろく短い口縁部からなる。口縁部は下半が内彎、上半がわずかに外反する弧をえがく土師器皿である。

123は、底部に緩やかに外に開く高台を持つもので、全体をナデで仕上げるものである。高台径は8.5cmを測る土師器である。

124～126は、口径15.0cm～20.0cm、扁平な頂部に屈曲し下方へ突出する短い縁部をもつ須恵器杯蓋である。



第84図 第5調査区 灰色シルト層 出土遺物実測図



第85図 第6調査区 基本層序模式図

## 第8節 第6調査区

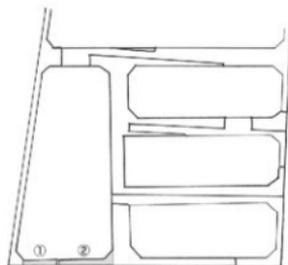
### 1. 基本層序

第1層 現代盛土。場所によって異なるが、50～20cmの厚さで盛られている。

第2～6層 黄灰色細砂層～暗褐色シルト層。旧耕土である。旧耕土と考えられる層は調査区の最も厚いところで6層、少なくとも2層は盛られていることが確認されているが、層の数にかかわらず地表から40～80cm程度の深さである。

第7層 灰色シルト層。奈良時代の土器を多く含む層である。時期を示す土器としては8世紀～9世紀代のものが中心であり、堆積時期としてはそれ以降と考えられる。

第9層 暗灰褐色シルト層。湿地性の堆積層と考えられるが、この層の上面で遺構を確認している。この層は、砂～シルトの多様な土の堆積の集合体である。



第86図 第6調査区 土層断面位置図

### 2. 遺構

調査区の西半は工事影響深度の関係で遺物包含層上面までの調査である。

建物基礎の攪乱による影響はあったものの遺構面は残存しており、南側を中心に、溝3条、土坑1基、ピット4基を検出した。

SD224 S D224は、幅100cm、検出面からの深さ14cmの南北方向の溝である。埋土は灰色シルト層で、奈良時代の須恵器、土師器が出上している。

SD226 S D226は、幅30cm、検出面からの深さ8cmの南北方向の溝である。埋土は灰褐色シル

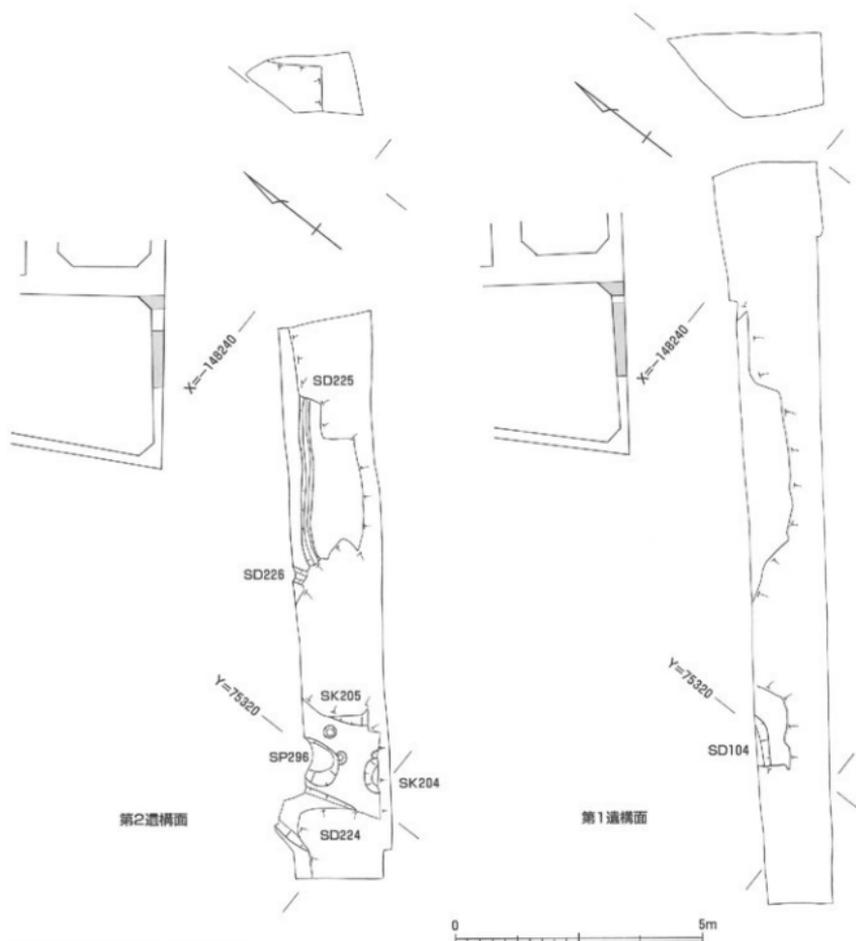
ト層で、遺物の出土はなかった。

SD225は、幅20cm前後、検出面からの深さ8cmの北東から南西方向の溝である。埋土は灰褐色砂質シルト層で、遺物の出土はなかった。

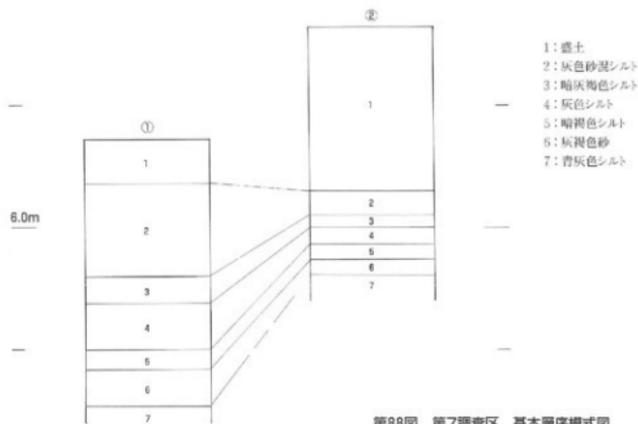
SK204は、調査区中央で検出した径70cm、深さ10cmの落ち込み状の土坑である。埋土は暗黄灰褐色シルトである。奈良時代の須恵器、土師器が出土している。

ビット 調査区西端部で4基を検出したが、建物を構成するものかどうかは不明である。

SD104は、調査区中央で検出された溝である。規模は調査区外へと続くため不明であるが、幅約1.0m程の溝になると考えられる。



第87図 第6調査区東 遺構平面図



第88図 第7調査区 基本層序模式図

## 第9節 第7調査区

### 1. 基本層序

第1層 現代盛土。場所によって異なるが、60～20cmの厚さで盛られている。

第2～3層 灰色シルト層～暗褐色シルト層。旧耕土である。旧耕土と考えられる層は調査区の最も厚いところで6層、少なくとも2層は堆積しているが、層の数にかかわらず地表面から65～90cm程度の深さである。

第4層 灰色シルト層。時期を示す土器としては9世紀～10世紀代のもものが中心であり、堆積時期としてはそれ以降と考えられる。上位の層の違いによらず、調査区の全域で、地表面から65～90cm下で確認した。この層の上面で遺構を検出した。

第5層 暗灰褐色シルト層。湿地性の堆積層と考えられるが、この層の上面で遺構を確認している。この層は、砂～シルトの多様な土の堆積の集合体である。

第6～7層 灰褐色砂層～青灰色シルト層。遺物は確認されていない。

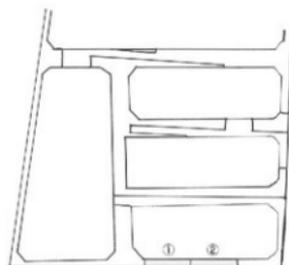
### 2. 遺構

#### 第2遺構面

第2遺構面は第1遺構面を形成する灰色シルト層を除去した結果、奈良時代遺物包含層である暗灰褐色シルト層上面で溝1条・落ち込み1基・ピット1基を検出した。

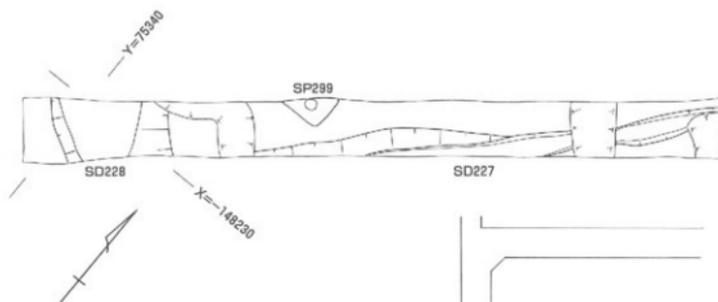
#### SD229

溝SD229は、調査区中央で検出した南北溝である。幅3.0m、深さ30cm前後の断面Ⅲ状の溝である。溝の西側の肩は段状に落ち込む。埋土内からは土師器細片が出上している。

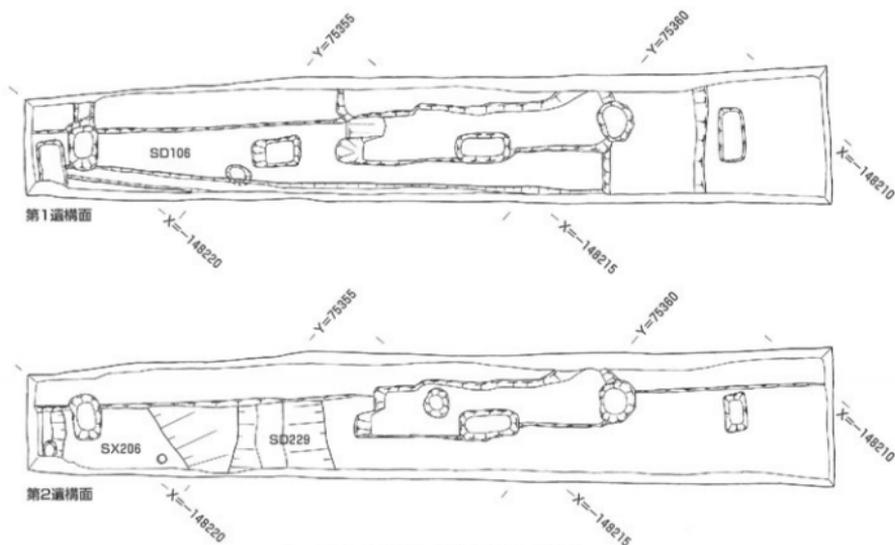


第89図 第7調査区 土層断面位置図

- SX206 落ち込みSX206は、調査区中央で検出した深さ18cm前後、断面形U字状の落ち込みであるが、周辺部が攪乱されているため、平面形状については不明である。埋土内からの出土遺物はない。
- ビット SD229の西屑に接して径20cm、深さ5cm前後の円形小ビットを検出した。灰色シルトを埋土としているが、出土遺物はない。
- SP299 SP299は一辺0.8m、深さ0.4mを測る方形の掘形をもつ柱穴である。
- SD228 SD228は幅約2.3m、深さ0.3mの規模の溝状遺構である。ただし溝底よりの湧水が激しく遺構は完掘できなかった。SD227は幅約0.5m、深さ0.2mの規模の溝状遺構である。調査区中央部では段が付くような溝状遺構である。



第90図 第7調査区西 遺構平面図 (S=1/100)



第91図 第7調査区東 遺構平面図 (S=1/100)

**第1遺構面** 第1遺構面は現状道路面より約70cm下で奈良時代～平安時代の遺物を含む灰色シルト層上面で確認された遺構面である。検出した遺構は調査区南壁沿いで検出した溝1条である。遺構面の上面には中世の土師器・須恵器を含む灰色シルトが被覆する。

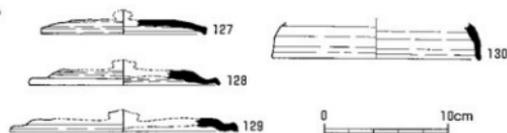
**SD106** SD106は幅30cm、深さ10cm前後の断面U字形で、調査区南壁沿いを直線的に走り、調査区東部では南肩が調査区外となる。溝の埋土は暗褐色シルトで、埋土内からは土師器細片が出土した。

**ピット** 調査区西部南壁寄りで、SD106に切られるピット1基を検出した。長径50cm、短径35cmの楕円形で、深さ30cm前後を測る。埋土内からの出土遺物はなかった。

### 3. 出土遺物

須恵器蓋127は頂部を不定方向にナデで仕上げ、頂部と口縁部は画さず、口縁部はほぼ直角に折り曲げて端面をつくっている。須恵器蓋128はヘラ切りした未調整の頂部に段状に屈曲した口縁部をもつ。口縁部内面にはナデによるくぼみがめぐる。須恵器蓋129は蓋128と同様な形態であるが、口径18.0cmと比較的大型品である。

須恵器蓋130は天井部と口縁部を画する稜がわずかに立ち上がり、稜の上下を強くなでて凹線を巡らせる。天井部はヘラケズリを行なう。口縁部端面はまるく仕上げ、内面にやや内傾した面をつくる。



第92図 第7調査区 暗灰褐色シルト層 出土遺物測図

## 第10節 小結

6丁目北地区の調査において、時期を確定する重要な手がかりは、灰色シルト層出土遺物の時期である。灰色シルト層出土遺物の多くは8世紀～9世紀のもので占められる。しかし、量は少ないが10世紀前半代までの遺物は確実に出土しており、この層の堆積の上限は10世紀中頃と考えられる。また、この面で検出された遺構の内、確実に時期の押さえられるものは、11世紀末頃と考えられることからこの層の堆積の下限を設定できる。また、暗灰褐色シルト層出土遺物は、7世紀～8世紀の遺物を多く含むが、9世紀後半の時期の土器も多く含まれており、上面で検出されたS F.201は10世紀前半と考えられることから、およそ9世紀代の堆積と考えられる。

当地区では、11世紀末～12世紀初頭にかけて墓が築かれるが、その墓のほとんどが副葬品を持たないか、あっても須恵器・土師器程度であり、周辺の遺跡の調査例と比べると副葬品に差が認められる。なお、墓が築かれるようになった段階には、集落の衰退が認められ、耕作域の拡大が認められる。現況の地割りに一致する耕作痕も認められるが時期は確定しがたい。ただし、墓の方位を参考にできるとすれば、この地域の地割りの確定は少なくとも12世紀初頭以降におこなわれたものと考えられる。

## 第4章 5丁目南地区の調査

### 第1節 調査区の設定

**地区と調査区** 5丁目南地区については、区画道路築造予定範囲約640mについての調査が行われた。これらの調査区については、道路築造工事の工程に従い調査を行ったため、連続する調査範囲でありながら、実際には3ヵ年、9回に分けて調査がおこなわれた。各回の調査については、着手された順に神戸市教育委員会の定める調査回数が割り振られているが、本報告書ではこの回数とは別に、調査の行われた範囲について改めて5つの地区に地区割り作業を行い、それぞれの調査区に呼称を付け、その区ごとに調査結果を掲載した。この地区割り作業にあったっては、同一時期の遺構面が連続する範囲を優先したため、時には調査着手年次が複数にまたがっているものを、一つの調査区として一括している場合もある。

**調査回数** 下表は調査着手時に定められた回数と、本報告書内における調査区名の対応表である。この表をもって本書中に述べる調査区呼称が、現地調査時のどの地区に該当するかを把握するための資料とする。

地区名	旧回数	新回数
第1調査区	20-7次	14-7次
第2調査区	8-2次・19次・20-7次・32-1次	6-5次・6-9次・14-7次・32-1次
第3調査区	20-19次	14-19次
第4調査区	20-9次	14-9次
第5調査区	8-1次	6-3次
第6調査区	20-22次・20-23次	14-22次・14-23次



第93図 5丁目南地区 調査区配置図(数字は各調査区を表す)

## 第2節 基本層序

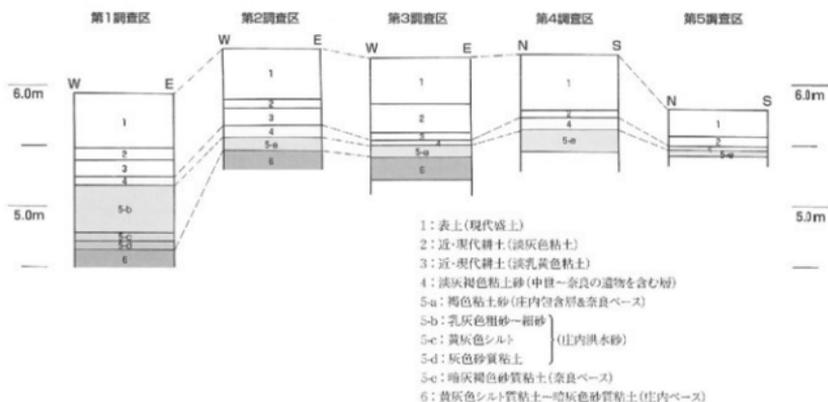
5丁目南地区内の土層の堆積状況はその調査区の位置によってそれぞれ異なるが、大きくは調査区西側の層序（第94図の第1調査区）、東側の層序（第94図の第2・3調査区）、南側の層序（第94図の第4・5調査区）の3種類に大別して捉えることができる。この3つの堆積状況を柱状模式図にして示したものが下図である。

### 第1調査区

1. 表土
- 2, 3. 近・現代の耕作土
4. 淡灰褐色粘質砂（中世の土器片をわずかに、奈良時代～平安時代の土器を多く含む）
- 5-b～5-d. 乳灰色粗砂～細砂、黄灰色シルト、灰色砂質粘土  
（庄内式併行期の土器を含む。この時期の洪水性堆積物と考えられる）
6. 黄灰色シルト質粘土（無遺物の堆積層。庄内水田層の可能性が高い）

### 第2・3調査区

1. 表土
- 2, 3. 近・現代の耕作土
4. 淡灰褐色粘質砂（中世の土器片をわずかに、奈良時代～平安時代の土器を多く含む）
- 5-a. 褐色粘質シルト（奈良時代～平安時代の遺構面・庄内式併行期の遺物包含層でもある）
6. 黄褐色混礫粘土（庄内式併行期の遺構面）



第94図 5丁目南地区 基本層序模式図

## 第4～6調査区

1. 表土
2. 3. 近・現代の耕作土
4. 淡灰褐色粘質砂（中世の土器片をわずかに、奈良時代～平安時代の土器を多く含む）
- 5-e. 暗灰褐色砂質粘土（奈良時代～平安時代の遺構面）

これら3種類の土層堆積状況は、それぞれ類似しており、第1層から第4層まで（表土層、現代耕作土層、中世および奈良時代～平安時代の遺物を含む層）はどの地点でも普遍的に観察することができた。したがって調査区間の相違点は奈良時代～平安時代の遺構面を形成する堆積層以下の層に関して存在することになる。

第2～6調査区、遺構面の存在する範囲内では、どの場所でも奈良時代～平安時代および中世の遺物を含む灰色層（第4層）の直下に堆積する層の上面で、奈良時代～平安時代頃の遺構を確認している。

第2・3調査区では、5-a層から庄内式期の土器が出土する。出土土器の残存状態は良く、この層が同時期の良好な遺物包含層でもあったと考えられる。この層を除去すると、次の層の上面で庄内式期の遺構面を確認することができる。しかし第4～6調査区では、同じように第4層の直下に堆積する層の上面に奈良時代～平安時代の遺構面を形成する層を確認しているが、これらの地区ではこの遺構面を形成する層からは庄内式期の遺物は出土しておらず、その直下層の上面で庄内式期の遺構を確認することもなかった。

また、もっとも西よりの第1調査区では、第4層の下層には、第2～6調査区のような遺構面を形成する層は存在せず、かわりに庄内式併行期の洪水砂層が堆積しているのを確認している。この洪水性堆積物の上面には、他の調査区で確認したような遺構は発見されなかった。

上記のように、第4層は、5丁目南地区の全域にほぼ水平に堆積していることが確認できたが、この層は出土遺物から判断して、中世の堆積層である可能性が高い。もっとも西よりの第1調査区では、第4層の直下層上面には他の地区のような、奈良時代～平安時代頃の遺構は存在しなかった。第1調査区の周辺に遺構が造られた当時、すでに洪水砂層は堆積を終えており（その堆積は庄内式期の出来事と考えられる）、この層が他の調査区の遺構面同様に地表面を形成していたと考えられるが、その上面に何ら遺構が残されていないという事実は、あるいは奈良時代～平安時代頃の人々は、流水性堆積層から形成される軟弱地盤地帯に建物を建てることを避けたのかもしれない。

また、第2・3調査区では、第4層のさらに下層に、庄内式期の遺構が確認されたが、南側の第4～5調査区では、庄内式期の遺構面は存在しなかった。このことから、5丁目南地区の、もっとも南側の部分には、庄内式の時期の遺跡は広がっていない可能性が高いと考えられる。

## 第3節 第1調査区

### 1. 概要

第1調査区は、5丁目南地区の中で最も北西よりに位置する。この調査区では、第4層のすぐ下に、庄内式併行期に堆積したと思われる洪水砂層の堆積が確認された。これらの層については、第4層が標高約5.25m地点、その下の庄内式併行期の洪水砂層が標高約5.18m付近の高さまで掘り下げた地点で堆積が確認された。

5丁目南地区の他の調査区では、第4層の直下に堆積する層の上面に、奈良時代から平安時代頃のものと思われる（一部中世を含む）遺構が残されているのを確認しているが、この第1調査区では、第4層の直下には他の地区と異なり、洪水砂層が堆積していて、その上面には該当する時代の遺構は確認できなかった。

本調査区の地形は、西から東へ向かって上っていく傾斜を示している。奈良時代から平安時代頃のものと思われる（一部中世を含む）遺構が確認されている、第2調査区に続く東側ほど高くなる。前節の通り、第4層は他の調査区に比べ標高にして約20cm低い高さで確認されていて、東へ向かってしだいに高くなっていく。このことから第4層が堆積した時点では、地形は緩やかに東へ上がっていく斜面地形だったと考えられる。

第5-b～5-d層となる洪水性の堆積層は、低地部分にだけ堆積していて、東端の高い部分には見られない。調査区東端の地面が高くなっている範囲（第2調査区）には、かわりに庄内式併行期の土器を大量に出す層の遺構が見られる。この層が奈良時代～平安時代頃の遺構が造られた層となるが、ここで注意すべき点は、洪水砂層第5-b～5-d層と、第2調査区以東の奈良時代から平安時代頃の遺構面を形成している第5-a層の時間的な順序である。

出土する遺物は、ともに庄内式併行期である。したがって遺物から前後関係は判定できないが、調査区の断面視察によると、調査区の東端で、洪水砂層は奈良時代から平安時代頃の遺構面を形成している層（庄内式併行期の包含層）の上にかぶさるようにして堆積が始まっており、低地部分にのみ堆積している。このことから第5-b～5-d層は第5-a層より後から堆積したと考えられる。

この洪水砂を取り除くと、庄内式期の遺構面となる第6層が現れるが、この層の上面でピットを10基確認している。この、遺構面となる第6層は標高4.65m付近まで掘り下げると現れる。この層は東側の第2調査区へと続いているのが確認できるが、この連続する層は、第2調査区では、洪水砂ではなく先述の第5-a層を取り除いた標高5.50m付近で確認されており、低地の第1調査区と高い第2調査区以東では、その高低差は約85cmとなる。

### 2. 弥生時代後期末の遺構

#### ピット

上述のように、本調査区では、庄内式併行期の洪水性堆積層を取り除いた標高4.65m付近地点で、わずかな遺構を確認している。遺構は直径20cm～30cm程度の（不整）円形のピットである。第95図の平面図に見るように、これらのピットはその並びも不規則で、建物などの柱痕である可能性も少ない。深さは10cm～15cm程度とどれも浅いものばかりで、

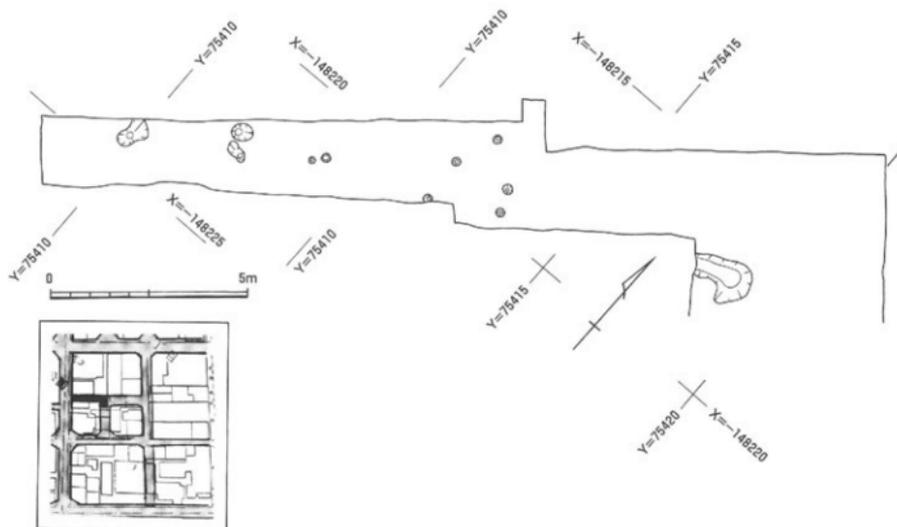
埋土も単層である。これらの遺構からは、遺物も出土しなかった。

平面形、配列、埋土の堆積状況などからは、これらの遺構の性格を知る手がかりは得られなかった。機能不明の遺構として報告しておく。

### 3. 調査区の旧地形

上述のようにこの調査区では、標高5.25m付近まで掘り下げた地点で、中世および奈良時代～平安時代の土器を多く出土する第4層を確認している。この層は、5丁目南地区の他の調査区でも堆積が確認されているが、他の地区に比べ約35cm程度低い地点で確認したことになる。断面観察の結果、第1調査区は、東側に続く第2調査区からみて、西に下がっていく斜面地形の部分にあたるということがわかった。第4層の下層には、出土する遺物から判断して庄内式併行期の時期に堆積したと思われる洪水砂層が堆積していて、その上には奈良時代～平安時代および中世の遺構は存在しなかった。

洪水砂を取り除くと、標高4.65m付近で庄内式併行期の遺構面が現れる。この層の上では、ピットがわずかに確認されたものの、それ以外顕著な遺構は発見されなかった。庄内式期の遺構面を形成している層については、その堆積はさらに東、第2調査区以東に続



第95図 第1調査区 弥生時代後期末 遺構平面図

いていく。ただし連続する同一層だが、第2調査区との境となる東端の地点に向かって上がっていく斜面地形となっており、その高低差は約85cmにもおよぶ。

これらのことから、5丁目南地区でもっとも北西に位置する第1調査区は、弥生時代後期末（庄内式併行期）には、人間の生活に適さない低湿地と微高地の境界地点であったと考えられる。洪水性堆積物はこの低地部分にだけ堆積していたが、これは低湿地が庄内式期に洪水などの自然作用で急速に埋没したことを示している。

弥生時代後期末に西が低い低湿地状地形であったため、この湿地が埋没したあとも緩く西へ下がる斜面地形のままになっていたと考えられる。洪水砂層の上位には、他の調査区同様、中世および奈良時代～平安時代の土器を多く含む灰色粘質シルト層が堆積しているが、洪水砂層上面には遺構は存在していない。当時の人たちはあるいは砂層からなる軟弱地盤の土地を忌避した可能性が考えられる。

## 第4節 第2調査区

### 1. 概要

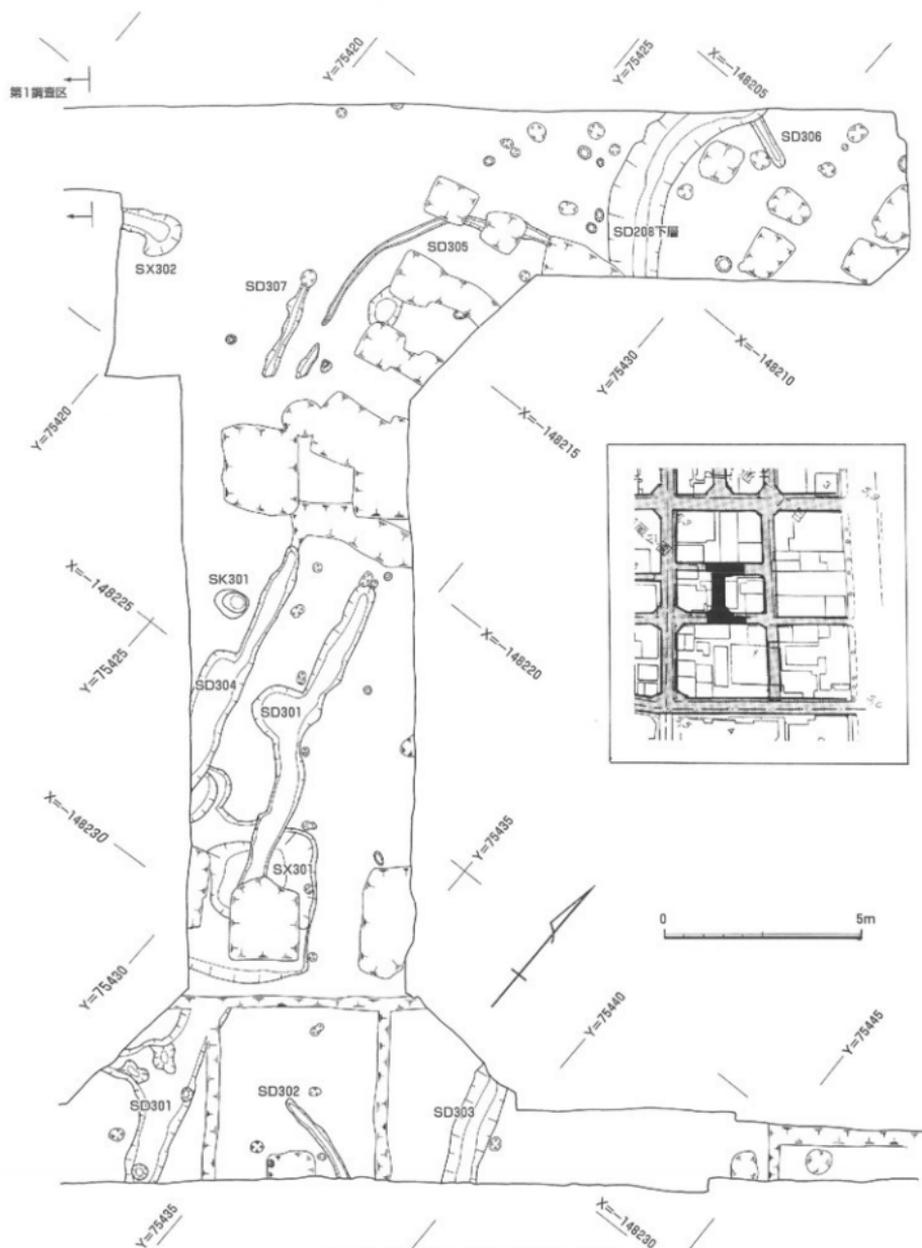
第2調査区は、第1調査区の東に続く南北に長い調査区である。この調査区では、第1調査区と同じ、中世および奈良時代～平安時代の土器を多く出土する第4層を、標高5.65mまで掘り下げた地点で確認している。これは第1調査区に比べて、約35cm高い位置での検出となる。第2調査区では、第4層の直下で、褐色粘質砂層、5a層を確認している。この層の上面、標高5.50m地点には、多くの遺構が残されていた。

5a層はまた、庄内式期の遺物包含層でもあり、それを取り除いたさらに下層、標高5.45m地点で現れる第6層上面には、庄内式期の遺構が残されているのを確認した。

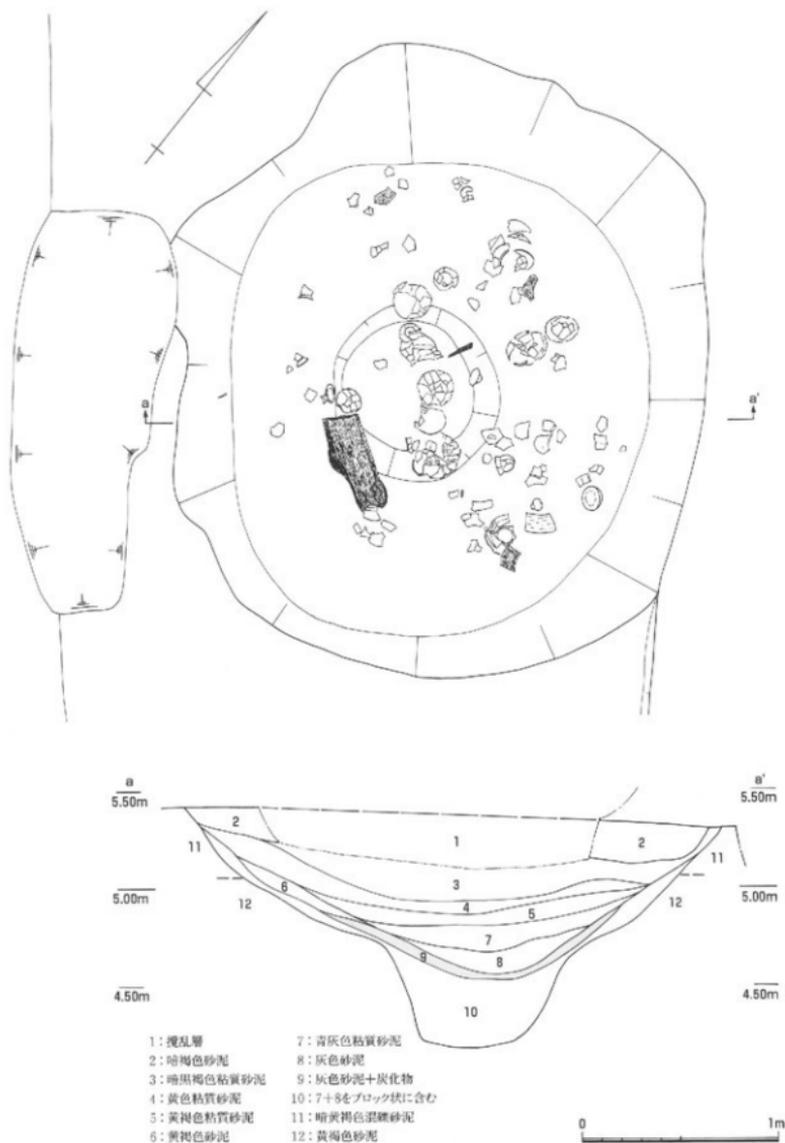
### 2. 弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺構

第2調査区では、2時期、2面の遺構面を、それぞれ異なる層で確認しているが、そのうち下位の遺構面で確認された遺構の総数は、溝状遺構8条・落ち込み状遺構2基・ピット16基である。その他遺構ではないが、東西約2m・南北約7mに亘って土器が集中して出土する範囲が存在した。これは遺構としては検出し難く、土器溜まり状に遺構面上に土器が散乱している状況だった。

- SK301 土器溜まりの上層群を取り除いたところ現れた。長径0.85m・短径0.7m・深さ0.6mの土坑である。弥生時代最終末ころの甕などが出土した。
- SD301 SD301は途中攪乱によって途切れるが、調査区中央から南西端に走る、幅0.7～1.1m・深さ0.1mの浅い溝状遺構である。SX301の上面を切り南西部では2条に分岐する。少量の上層器が出土した。
- SD303 SD303は調査区南東部で検出された、幅1.0m・深さ0.5mの断面V字形を呈す溝状遺構である。少量の弥生土器・上層器が出土した。断面形と方向からSD208下層と同様のものとも思われるが、出土遺物の時期差から同様のものとは考えにくいようである。



第96図 第2調査区 弥生時代後期末 遺構平面図

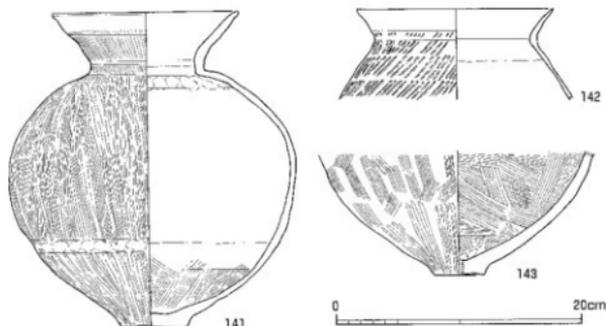


第97図 第2調査区 SX301 平面・断面図

- SD208下層** SD208下層は、褐色粘質砂層を掘削し、遺構検出作業を行ったところSD208の両側に幅約0.2m程の遺構面と異なる上層が観察された。これを掘削するとSD208に比べ北東方向へ屈曲する幅1.4m・深さ0.6mの断面V字形を呈す溝状遺構となった。土師器・須恵器が少量出土し、7世紀後半に属する須恵器坏身・坏蓋が出土した。平面形がほぼ重なり、出土遺物が他の遺構と比べて時期差が短い為にSD208下層とした。
- SD305** SD305は幅0.1m・深さ0.05mの弧状に検出された溝状遺構である。微量の土師器片が出土した。直径8mほどの竪穴住居の周壁溝の痕跡であろうか。
- SX301** SX301は浅い落ち込み状遺構のなかで更に深く落ち込む南北3.3m・東西2.6m・深さ1.2mの楕円形の落ち込み状遺構である。上面から比較的多くの遺物が出土したが、埋土下層で、土師器壺・甕・坏・低脚坏・木片などがまとまって出土した。下層の埋土は、多くは炭化物で構成されており、以下の層からは殆ど遺物は出土しなかった。木片は炭化しているものが多くあり、土器も火を受けているものが見うけられた。以上の状況から判断して火を使った何らかの行為が行われたように考えられる。
- ピット** その他ピットが検出されているが、散在する状況で遺構としてまとまりがあるようには見られない。

### 3. 弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺物

- SK301** 遺構内から3個体の土器が出土した。遺物の出土状況は、遺構内の堆積土が3層にわかれ、その1・2層目から破片で出土した。
- 141は直口壺でほぼ完形である。体部は球形で、口縁部はまっすぐ外方にひろがる。体部外面はハケ調整の後、縦ミガキを施す。下半1/3は全体に縦ミガキである。底部外面は単一方向のケズリである。内面下半1/3はハケ調整、残りの部分は頸部までナデ調整である。下半1/3の内面には接合痕があり、外面にはユビオサエ痕がある。頸部外面はハケ調整、口縁部は横ナデで仕上げる。
- 胎土には石英・長石のほか1～5mm程度のクサリ礫を含む。
- 142は甕で、土器の残存状況が悪く、体部外面はタタキ、口縁部はナデと観察される。胎土は141と同様であるが、焼成が悪く外面は赤褐色である。
- 143は141と同様の最大径をもつ壺底部である。外面は上半はハケ、下半はミガキを施す。内面はハケ調整である。
- 土器溜まり** 土器溜まりの土器は、図示できたのはその一部で、器種は壺・甕・鉢・低脚坏などである。
- 144は広口壺、145は細頸壺である。145は土器表面の残存状況が悪く調整はほとんど不明である。146も広口壺で、外面は縦方向のミガキを施し、頸部と体部界を波状文で飾る。口縁部はヨコナデである。口縁部内面は横方向のミガキで、縦10mm横1mmほどの工具痕が数カ所認められる。体部内面はナデ調整である。147は大型の直口壺である。口縁部の内外面はナデ調整である。体部内外面とも残存状況が悪く調整は不明である。144～146の色調は乳褐色から淡褐色で、長石・石英クサリ礫を含む。147は胎土に1mm前後の長石・石英とカクセン石・雲母を含み、淡茶褐色である。胎土から搬入品と思われる。
- 148～151は鉢である。148は強弱を付けたヨコナデで調整する。肉眼観察出来る砂粒は



第98図 第2調査区 SK301 出土遺物実測図

1mm以下の長石・石英・チャートである。土器の表面は白っぽく、内部は黒褐色である。148のもつ胎土の特徴は157・158にも共通している。これらは山陰方面からの搬入品である可能性が高い<sup>(1)</sup>。

149は土器表面の残存状況が悪く調整はほとんど不明である。胎土には1~3mm大の石英・長石・クサリ礫を含み、赤褐色の土器である。胎土は在地性の強いものと考えられる。150・151は底部が平らな鉢である。胎土には石英・長石・クサリ礫・チャートを含み、淡赤褐色を呈す。

152~154・159・160は胎土に石英・長石・クサリ礫を含み、淡赤褐色を呈す、在地産の甕である。153・159は粗いタタキを施すが、160は細かいタタキを施した後、やや粗いハケ調整を行う。152の内面はケズリの後粗いナデを施す。154は内面はケズリを施す。153・159は内面の調整は不明である。160はわずかにハケ調整が残るが、全体にナデを施す。160は球形の体部に径39mmの底部が付く器形である。

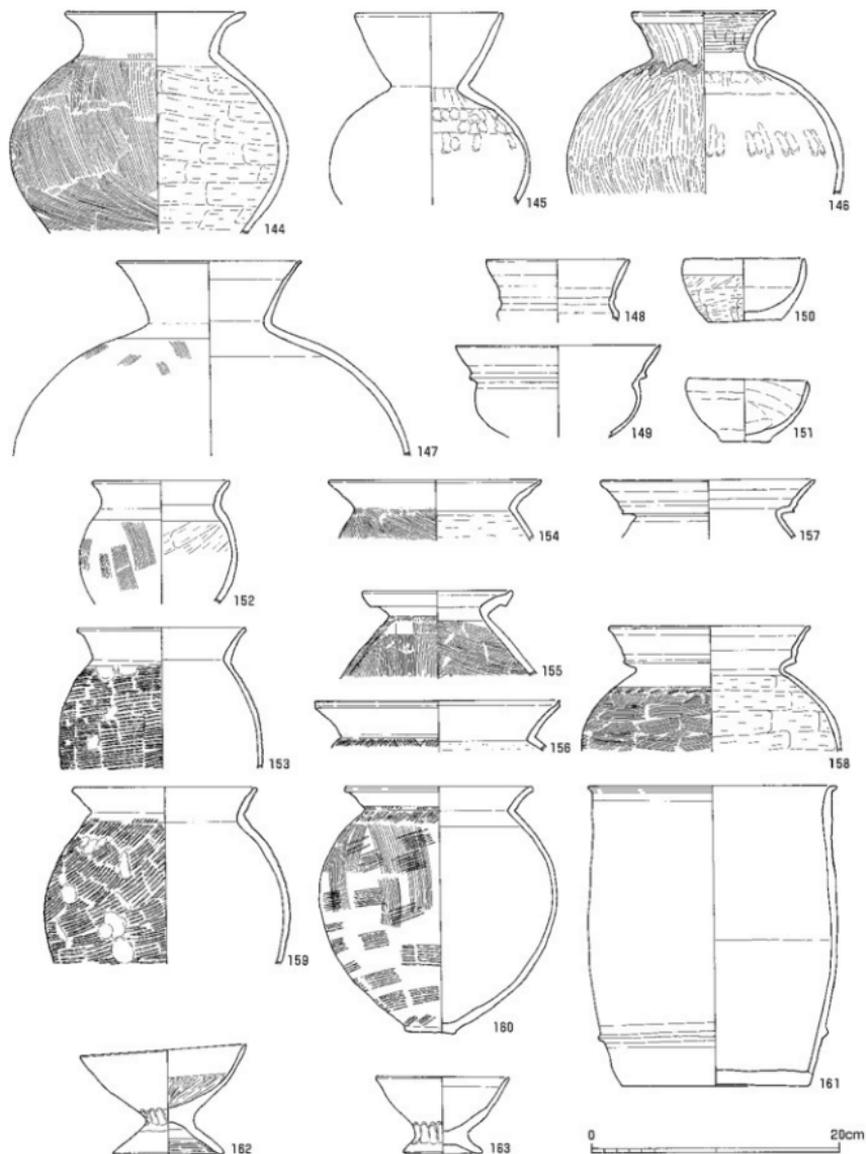
155は口縁部がやや厚く、肩部も直線的な器形を示す甕である。口縁部はヨコナデ、体部は内外面ともハケ調整である。胎土に石英・長石・クサリ礫・チャートを含み、淡赤褐色を呈す。胎土は在地の特徴を示すが、器形は他地域の影響を受けた土器と考えられる<sup>(2)</sup>。

156は口縁部内外面はナデ仕上げで、端部は面をもつ。体部外面は、細かいタタキ、内面はケズリである。胎土には石英・長石・カクセン石を含み、色調は茶褐色で牛胸西麓産の特徴を示すものである。

157・158の胎土は前述のとおりである。157の図化した部分については強弱を付けたヨコナデで仕上げる。158は体部外面は細かいハケ調整で、肩部をクシ描列点文で飾る。体部内面は横方向のケズリを施す。

161は、器種不明土器である。口縁部は外方へつまみ出す。体部内外面はヨコナデで仕上げる。底部外面下部に断面三角形の突帯が付く。底部器壁は体部に比べ厚く、内面は乱方向のナデ、外面は丁寧な一方方向のナデを施す。胎土には石英・長石・クサリ礫を含み、色調は乳褐色である。

162・163は低脚坏である。163は坏内面は使用のためか表面が荒れており調整は不明である。胎土には石英・長石・クサリ礫を含み、色調は乳褐色で在地性の特徴を示す。



第99回 第2調査区 土器溜まり 出土遺物実測図

他に土器溜まりの南端から剥離した砥石片が1点出土している。

### SX301

SX301の上面には現代の建物基礎があり、遺構の切り込み層位は不明である。土器はすり鉢状に凹んだ炭化物層の上面にほぼ全体に広がるような出土状況であった。

164・165はミニチュア土器である。164は壺に脚が付くような器形であろうか。体部下部に穿孔がある。165は壺である。頸部に1条の沈線をもち、体部には1条から2条に沈線を描き、2条になった箇所には梯子状に5mm前後の間隔で結ぶ。164・165は共に含まれる砂粒が少なく、精良な胎土で、色調は乳褐色である。166・167は坏である。共に内外面ともナデで仕上げる。166は外面が赤色化して二次的な熟を被ったようである。

168～170は鉢である。168は内外面ともナデで仕上げる。169は表面の残存状況が悪く調整は不明である。170は底部は内外面ともケズリ、体部から口縁部にかけてはナデで仕上げる。口縁部内面にはハケが残る。

171は小型器台で、ナデで仕上げる。脚部には円形4方透かしがある。坏部内面は二次的な熟を被ったようで赤色化している。166～171の色調は乳褐色で、在地的な胎土である。

172・173は小型壺と考えられるが口縁部を欠く。調整は概ねナデと観察されるが残存状況は悪い。173は二次的な熟を被ったようで赤色化している。174は二重口縁凹口である。口頸部はナデで仕上げる。色調はやや白っぽい乳褐色で、在地的な胎土である。

175は中型鉢である。内面体部下半は縦方向のナデ、口頸部は内外面ともナデで仕上げ、体部中央外面には横方向のミガキ、下半はナデで仕上げる。胎土には、石英・長石・クサリ礫の他に雲母を含み、色調は乳褐色である。

176～185は甕である。183のみ内面調整にハケを施す。他はケズリまたはケズリの後ナデを施す。外面は176のナデ調整を除き、ハケ調整である。182の外面調整は不明である。177は底部や口縁部にスガが付着し、179～180は二次的な熟を被ったようである。

186は底部に穿孔があり、甕と考えられる。内外面ともナデ調整である。

187は二重口縁壺である。在地的な胎土であるが、讃岐地域の影響を受けた器形と考えられる。188は187の胎土とは異なるが、187と同様の二重口縁壺の底部となるものである。胎土にカクセン石を含み讃岐地域からの搬入品と考えられる。

189は甕である。体部外面は細かいハケ、内面はケズリを施す。口頸部は内外面ともナデで仕上げる。色調は茶褐色で、胎土にカクセン石を含み、生駒西麓産の土器である。

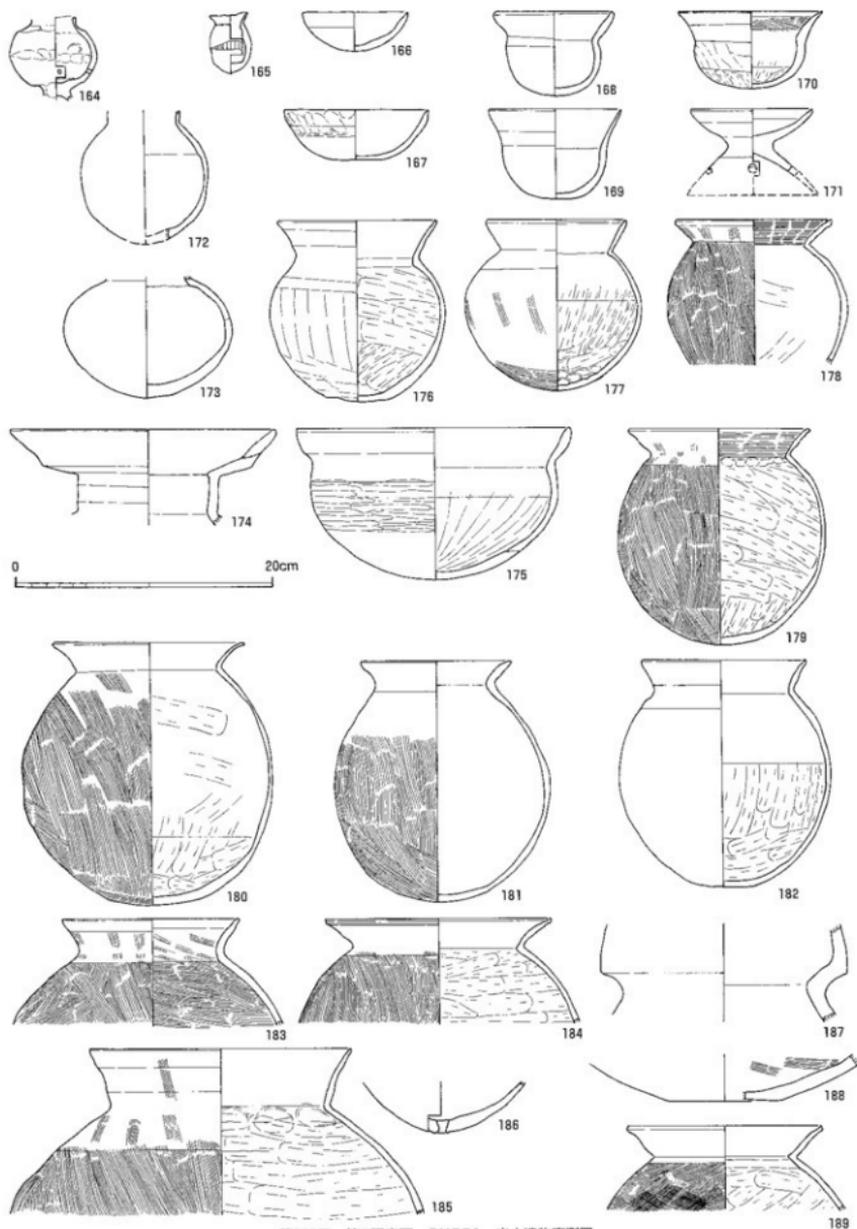
上述のように熟を被った土器が多く、土器は上に炭化物層上層で出土している。遺構の項でも述べたが火を使った何らかの行為が行われた遺構であると考えられる。

### 遺物の時期

以上SK301・土器溜まり・SX301と土器について述べてきたが、SK301の土器は弥生時代最終末の時期が考えられる。また胎土や器形から在地的な土器であると思われる。

概ね土器溜まりは庄内式併行期、SX301は布留式併行期と考えられる。ただし189は、他の土器に比べ古く、遺構内への混入と考えられる。

周辺調査での弥生時代後期の遺構としては、第8次調査で井戸が検出されている。その他の調査でも弥生土器が出土しているが、顕著な遺構はこれ以外にない。弥生時代後期の遺構は、非常に散在的な状況である。



第100図 第2調査区 SX301 出土遺物実測図

土器溜まりと同時期の遺構として、東約20mの地点（第9次調査）で庄内期の竪穴住居が検出されている。この住居からも生駒西麓産の甕が出土している。また当調査地の北約70mの周辺でも土器溜まりが検出されている。さらに第10次調査でも土器溜まりが検出され、この遺構からも生駒西麓産の甕が出土している。弥生時代後期に比べ遺構が多くなるようである。

土器溜まりとSX301とをあわせて、他地域からの搬入土器や他地域の影響を受けた土器が在地の土器とともに出土したことは注目される。この時期に他遺跡との交流が始まり当遺跡の活動が盛んとなるようである。

SX301は多量の土器とミニチュア土器と火を使用した痕跡などから、何らかのマツリが行われたと思われる。

## 注

- (1) 安田 滋編『西求女塚古墳第5次・第7次発掘調査概報』神戸市教育委員会1995
- (2) 『庄内式土器研究Ⅱ』庄内式土器研究会1994。『西才行遺跡発掘調査報告書』—安土町埋蔵文化財調査報告書第2集—安土町教育委員会1983。『昭和59年度野州町内遺跡群発掘調査概要』野州町文化財資料集1984-3野州町教育委員会1985 などに類似例を求めることができようだが、近江系土器といえる確証はない。
- (3) 松下 勝『拙稿のなかの四国系土器』『今里幾次先生古稀記念播磨考古学論叢』1990  
『玉津田中遺跡—第6分冊—』兵庫県教育委員会1996
- (4) 山田清朝・山上雅弘編『御蔵遺跡—第8・9・10次調査—』神戸市教育委員会2000
- (5) 『庄内式土器研究ⅡⅠ』庄内式土器研究会1999

## 4. 奈良時代～平安時代および中世の遺構

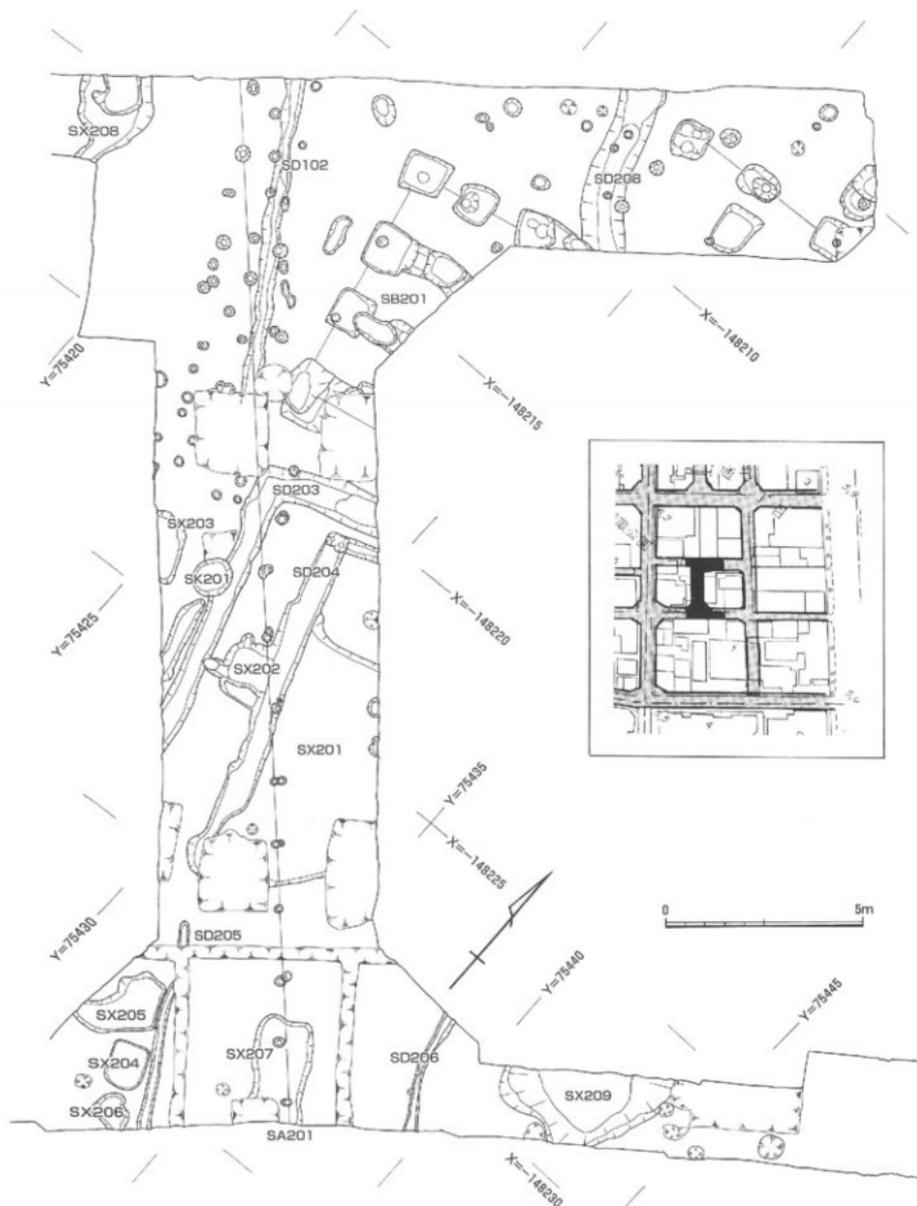
弥生時代後期末の遺構面の直上層は、同じ時期の遺物包含層であるが、この層の上にはより新しい時期の遺構面が残されていた。検出された遺構は、掘立柱建物1棟、ピット55基、落ち込み状遺構8基、柵列1列および溝7条である。

SB201

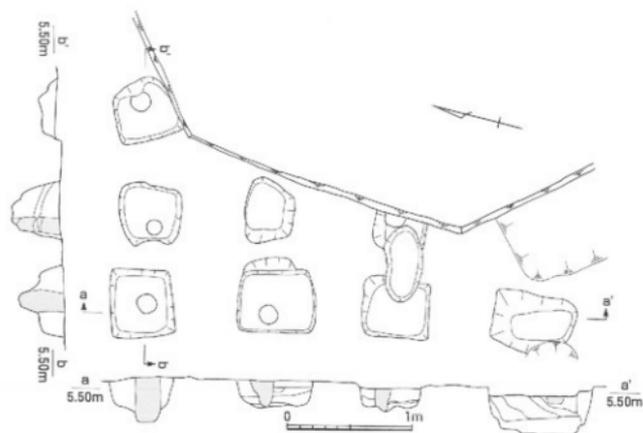
SB201は2間以上×3間の総柱建物である。柱痕が検出できたものとそうでないものがある。梁行方向の中央の東柱と西側柱をつなぐように溝状の遺構が検出された。中央部のみに布掘り状にしたものであろうか。

SA201

直径0.2～0.3m・深さ0.3mの規模の12基の一直線に並ぶピット列である。東西方向に対となるピットがないため柵列と考えられる。このうち柱列の中央部では造り替えがあったのか、切り合いがあるピットが検出された。またこのうち3基から柱痕が検出された。



第101図 第2調査区 奈良時代～平安時代 遺構平面図



第102図 第2調査区 SB201 平面図

## ピット

SB201と同規模の柱穴が調査区の北東端で6基検出された。直線上に並ぶものがあり、これが組み合せて北か南に伸びると考えられるが、その組み合わせは不明である。南東隅の柱痕底に平瓦片が1枚据えられていた。このすぐ北側の柱穴の柱痕には柱部材が残存していた。

これらの遺構以外に、ピットは全部で55基見つかっている。そのうち、やや規模が大きく、直径0.4～0.5m・深さ0.3m程のものがいくつかあった。それらは直線上に並ぶものもあるが、建物などにまとまるものはなかった。SD208の西側で検出されたピット底からは、鎌倉時代に属する須恵器焼片が出土した。これらのピットは概ね中世に属する時期のものが多と思われる。

そのほか小規模のピットが多数検出された。建物などにまとまるような状況ではない。

## 溝

溝状遺構は8条検出された。SD203、SD204は逆L字形に平行に走る溝状遺構である。幅0.4～0.8m・深さ0.1～0.2mである。平行に走り直角に曲がることからなんらかの性格をもつものと考えられるが、現状では不明である。

## SD208

SD208は幅1.1m・深さ0.3mの断面U字形の溝状遺構である。少量の土師器・須恵器・瓦が出土した。また遺構北東隅で馬歯が出土した。

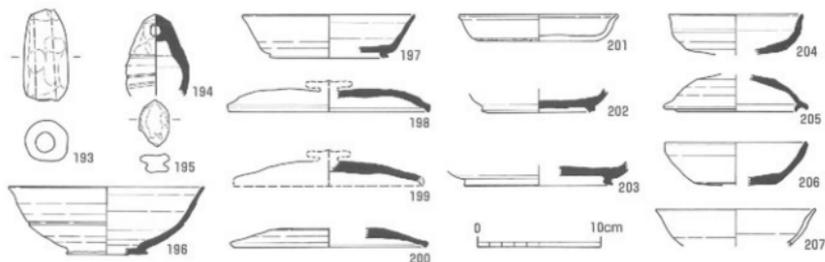
## 落ち込み

落ち込み状遺構は全部で8基見つかっているが、そのうち特に、調査区南端で溝状遺構SD205、SD206の西側に検出された3ヶ所の遺構からは、それぞれの少量の遺物が出土している。SD204の東側には深さ0.1m足らずの浅い落ち込み状遺構が検出された。

またSD203、SD204をつなぐように深さ0.1mほどのSX202が検出されている。それぞれ少量の土師器・須恵器が出土している。

## SK201

SK201は直径1.0m・深さ0.1mの皿状の遺構である。少量の土師器・須恵器が出土した。



第103図 第2調査区 奈良時代～平安時代 出土遺物実測図

## 5. 奈良時代～平安時代および中世の遺物

## 銭貨

190～192は、調査区南部の遺構面出土した銭貨である。3枚が錯着して出土した。銭文は3枚とも時計回りに「富壽神寶」と判読できる。190・192は完形である。191は「寶」の一部と外縁が欠損している。欠銭ではなく通用銭が欠損したものと考えられる。3点とも外縁は厚く残存しており、外縁の厚さは2mmである。190の直径は23mm・内郭内径6mm・重さ1.89gである。192の直径は23mm・内郭内径6mm・重さ1.44gである。神戸市内での富壽神寶の出土例は、滝の奥遺跡のみである。

## 須恵器

194は須恵器で体部外面に3条の沈線を描く。

196は須恵器碗で体部外面に1条の沈線があり、見込みは段状にへこむ。197はS X 201出土の須恵器杯である。196は11世紀末ころの遺物と考えられる。平安時代末ころから鎌倉時代にかけての遺構は御蔵遺跡の各所に検出されており、集落の存在が予想される。

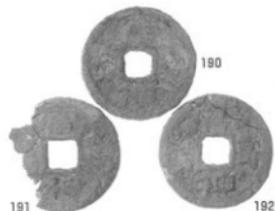
197～203の遺物の時期は、概ね8世紀後半頃と考えられるが、富壽神寶の鑄造期(818～834年)とは時期がずれる。建物の築造時期を8世紀後半とし、建物の存続期間を富壽神寶の鑄造期の下限と推定すれば、理解できるのではないだろうか。

神戸市内でのいわゆる「皇朝銭」の出土例は、御蔵遺跡を含めて6遺跡である。

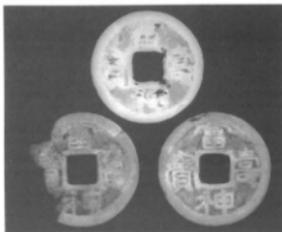
S D 208の時期は7世紀後半頃と考えられるが、207の土師器杯の示す時期は不分明である。御蔵遺跡では、この時期の遺構は少ないようである。

## 註

- (6) 口野博史「神戸市内出土の「皇朝銭」について」出土銭貨研究会報告資料2000、「畿内・七道からみた古代銭貨」出土銭貨研究会第7回研究大会資料集出土銭貨研究会2000



押印写真5 包合層出土銭貨



押印写真6 包合層出土銭貨X線写真

## 第5節 第3調査区

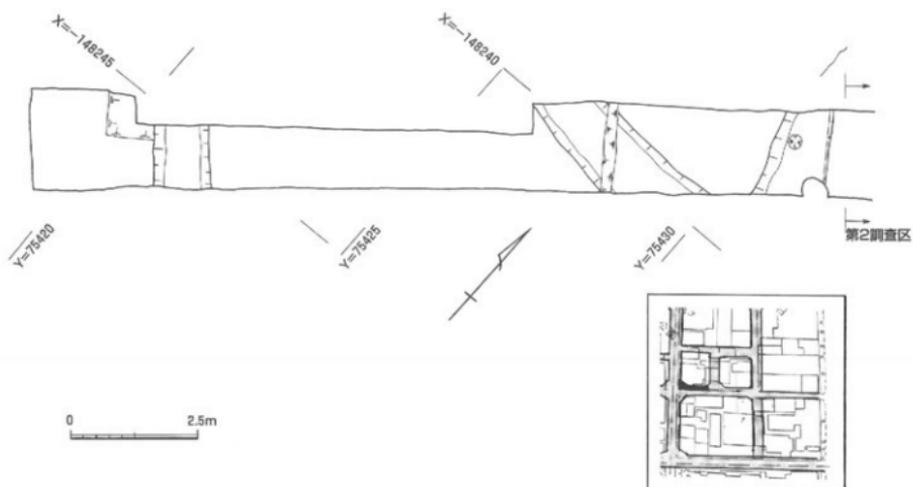
### 1. 概要

第3調査区は、第2調査区の南西に続く調査区である。この調査区では、標高5.50m付近まで掘り下げた地点で、第1、第2調査区と同様の、中世および奈良時代～平安時代の遺物を多く出土する灰色粘質シルト層を検出している。この層を取り除いた標高5.45m地点まで掘り下げると、褐色粘土層が現れるが、この層の上面が遺構面となる。この褐色粘土層は、第2調査区で確認されたのと同じ、庄内式期の遺物包含層でもある。さらにこの層を取り除いた標高5.40m地点で、第2調査区で確認した庄内式期の遺構面を形成する層が現れるが、本調査区では、第2調査区のような遺構は発見できなかった。層序的には第2調査区と同様であり、遺構面を形成している層は堆積しているが、その上に遺構はない状態である。したがって、この調査区内で確認された遺構は、褐色粘土層の上面で見つかった溝が3条のみである。

### 2. 奈良時代～平安時代の遺構

標高5.40m地点まで掘り下げた褐色粘土層上面が遺構面となる。この褐色粘土層は第2調査区で確認されたのと同じ、庄内式期の遺物包含層である。検出された遺構は、深さ10～30cmの溝3条である。これらの溝には、牛と人の足跡が多数残されていた。

遺構面を形成している褐色粘土層の中からは、特に調査地の東端で集中して庄内式期の遺物片が少量出土したが、それを取り除いた下層の暗灰色砂質土上面では、第2調査区のような遺構は存在しなかった。



第104図 第3調査区 遺構平面図

## 第6節 第4調査区

### 1. 概要

第4調査区でも、前述の調査区と同様、中世および奈良時代～平安時代の遺物を出土する第4層を、標高5.75mまで掘り下げた地点で確認している。この層を取り除くと、標高5.60mの地点で暗褐色砂質粘土層、第5-e層が現れ、その上面に遺構が残されているのが確認された。第4層の直下に遺構面を形成する層が堆積している点は第1から第3調査区と同様だが、他の調査区と異なり、その遺構面を形成する層からは庄内式期の遺物は出土せず、下層に庄内式期の遺構面も存在しなかった。本調査区で検出された遺構は、ピット22基、溝2条、落ち込み状遺構1基、井戸1基である。これらについて以下に各説する。

### 2. 奈良時代～平安時代の遺構

先述したとおり、同時期の遺構は数ヶ所検出されているが、ここでは主要な遺構として、井戸についてのみ概説しておく。

SE201

井戸は調査区の南寄りの位置で発見された。攪乱によって掘形の平面形状と規模は不明だが、底から4段分の井戸枠の木組が確認された。木組は4段目よりさらに上に続いていたものと推測されるが、後世の腐食や廃棄時の抜取りなどによって亡失したことが埋土の状況からうかがえる。

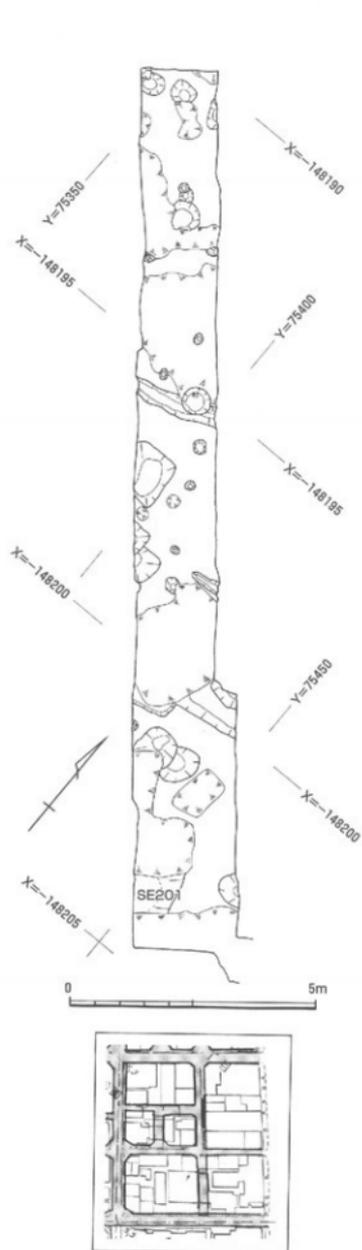
掘形の規模は、平面形が円形と仮定して径約2.5mと推定され、深さは検出面から約1.5mを測る。井戸枠の木組は平面形が正方形を呈し、板材の双方に切り込みを入れて組み合わせる井籠組が用いられており、1段目と2段目は北側と南側の2ヵ所で両方の板材の側面にほぞ穴をあげ、木組がズレないように小木板で止めている。さらに、井戸枠内側のコーナー部分と側面中間部分に、木組を固定するためのものと考えられる杭が打ち込まれている。使用されている板材は、120×25cm、厚さ2～3cmであるが、1段目の板材は断面形が正方形の約10cm角の角材状のものである。

### 3. 出土遺物

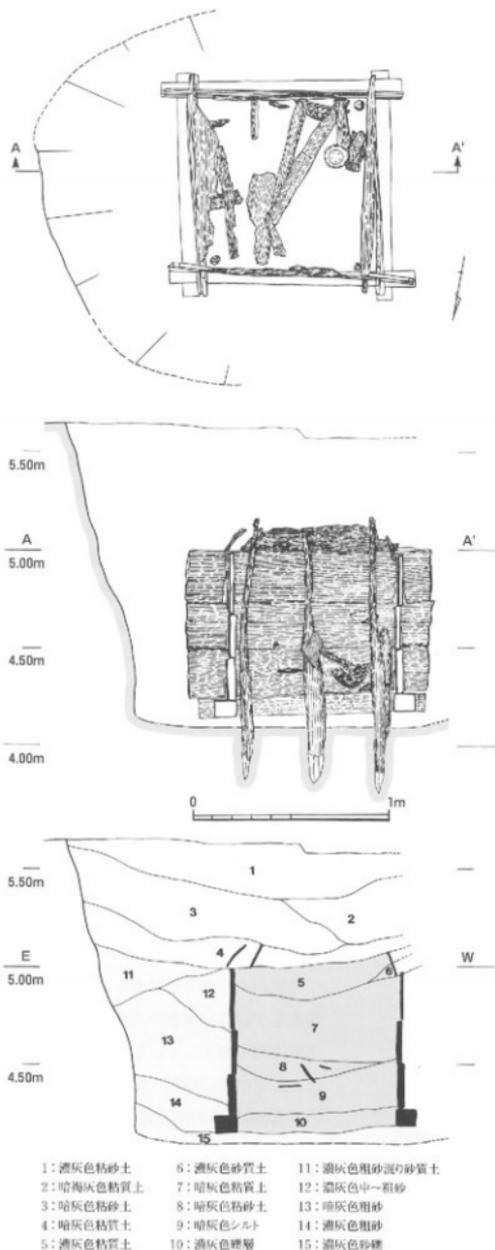
遺構内からの出土は少なく、主に遺物包含層から古墳時代初期～平安時代前期の遺物が出土している。遺物の大半は土器片であるが、SE201の井戸枠内より、櫛や曲物などの木質遺物も出土している。時期的には奈良時代後期～平安時代前期のものが多く、遺構もほとんどがこの時期に属すると考えられる。

SE201からの出土遺物のみを図示した。先述したように、土器類と木質遺物類が出土している。図示した遺物のうち、208～222が土師器、223～227が須恵器、228～230が緑釉陶器、231～236が黒色土器、237～255が木質遺物類となっている。

208～220は皿または坏にあたる器種である。口径は208が最も小さく11.0cm、220が最も大きく17.0cmを測る。いずれも基本的にはナデ、指ナデなどで器面を仕上げているが、213は底部外面の調整にケズリが用いられている。また、217、218、219、220の内面には

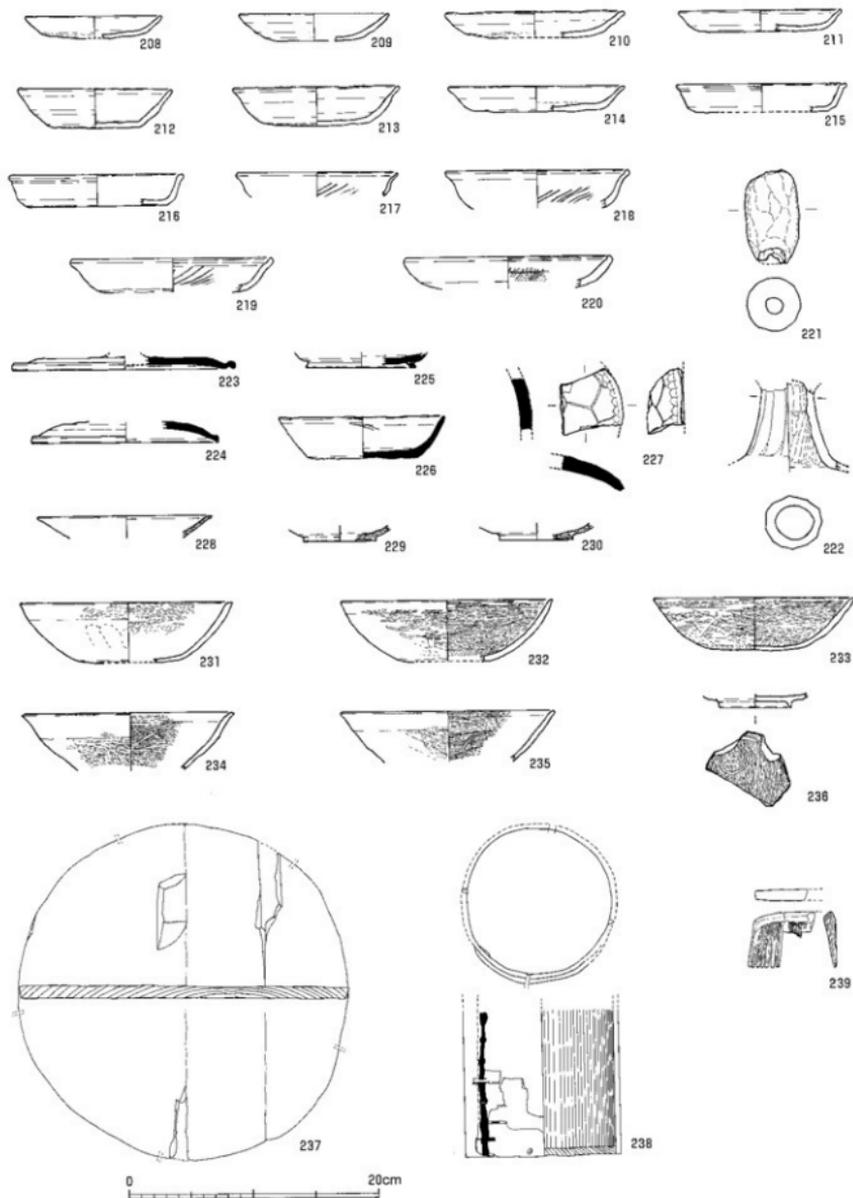


第105図 第4調査区 遺構平面図



- |            |           |               |
|------------|-----------|---------------|
| 1: 濃灰色粘砂土  | 6: 濃灰色粘質土 | 11: 濃灰色粗砂混砂質土 |
| 2: 暗海灰色粘質土 | 7: 暗灰色粘質土 | 12: 濃灰色中粗砂    |
| 3: 暗灰色粘砂土  | 8: 暗灰色粘砂土 | 13: 暗灰色粗砂     |
| 4: 暗灰色粘質土  | 9: 暗灰色シルト | 14: 濃灰色粗砂     |
| 5: 濃灰色粘質土  | 10: 濃灰色粘層 | 15: 濃灰色粘      |

第106図 第4調査区 SE201 平面・断面図



第107図 第4調査区 SE201 出土遺物実測図

暗文が施されている。

222は高坏の脚部で、12面の面取りが施されている。面取り部分が長さ5～6cm程度で、その部分から脚端部や坏部にむかってやや外反しながら延びるようで、低脚タイプの高坏と考えられる。

221は長さ7.7cm、最大径4.4cm、孔径1.4cm、遺存重量155gを測る管状土鍾で、ナデにより成形されている。

223、224は坏蓋で、いずれもツمامがつくタイプと考えられる。主として回転ナデによって調整されているが、224の天井部外面は回転ヘラケズリが施されている。223は比較的大ぶりのタイプで、口径18.0cmを測る。

225、226は坏で、225は高台のつくタイプである。226は平底のタイプで、器面の仕上げが粗く、体部にもやや歪みが見られる。226の内面には赤色の付着物が遺存しており、その底部に擦痕と考えられる平滑部分が見受けられる。

227は須恵質の土製品で、外面は丁寧なナデ、内面はケズリによって仕上げられており、端部はケズリによる面取りが施されている。外面には亀甲文状の線刻が施されており、亀甲文視蓋の一部である可能性が高い。

228～230はいずれも小細片である。228は口縁部の傾きから皿と推定されるが、229、230については、底部のみの残存であるため不明である。

231～236はいずれも内面のみが黒色の所謂黒色土器A類にあたる。231～235については、口径が17cm前後で器高が5cm前後の法量で、231、232、233は高台のつかないタイプで、236が高台のつくタイプである。内面はいずれも細かいミガキが施されており、光沢をもつぐらいに丁寧に仕上げられている。外面の体部は、231がナデ、232、233、234、235がケズリを施した後、ミガキで仕上げられている。

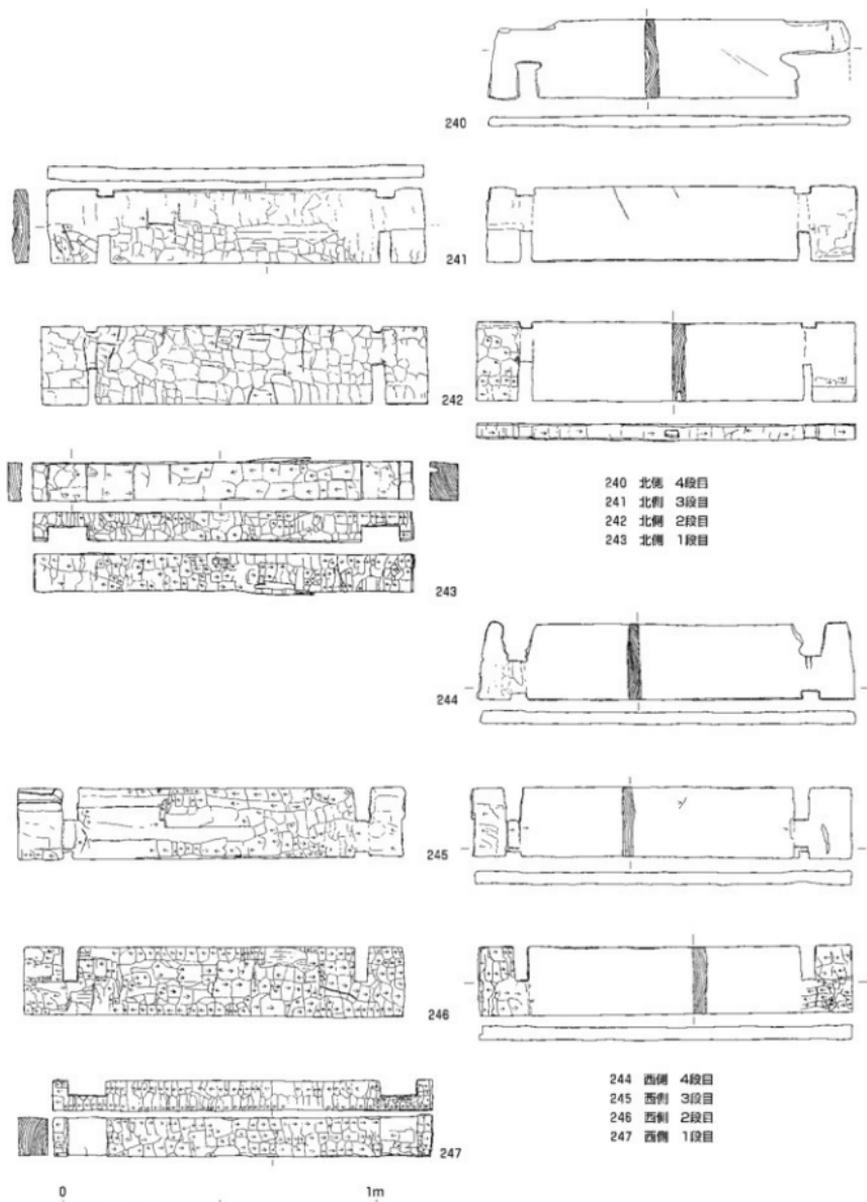
図示した土器類は、概ね8世紀末葉～9世紀中葉後半に属するものと考えられ、ほぼ一括の資料ではあるが、若干の時間差が伺える。ただし、その多くは9世紀中頃あたりに比定できるため、この井戸（SE201）の存在時期（使用時期）を示す資料とするのが可能であろう。

237は曲物の底板で、長さ27.5cm、厚さ1.0cmを測る。周縁に木釘が遺存しており、側板を木釘にて結合していたものと考えられる。素材はヒノキで、裏面は黒漆塗りを施す。

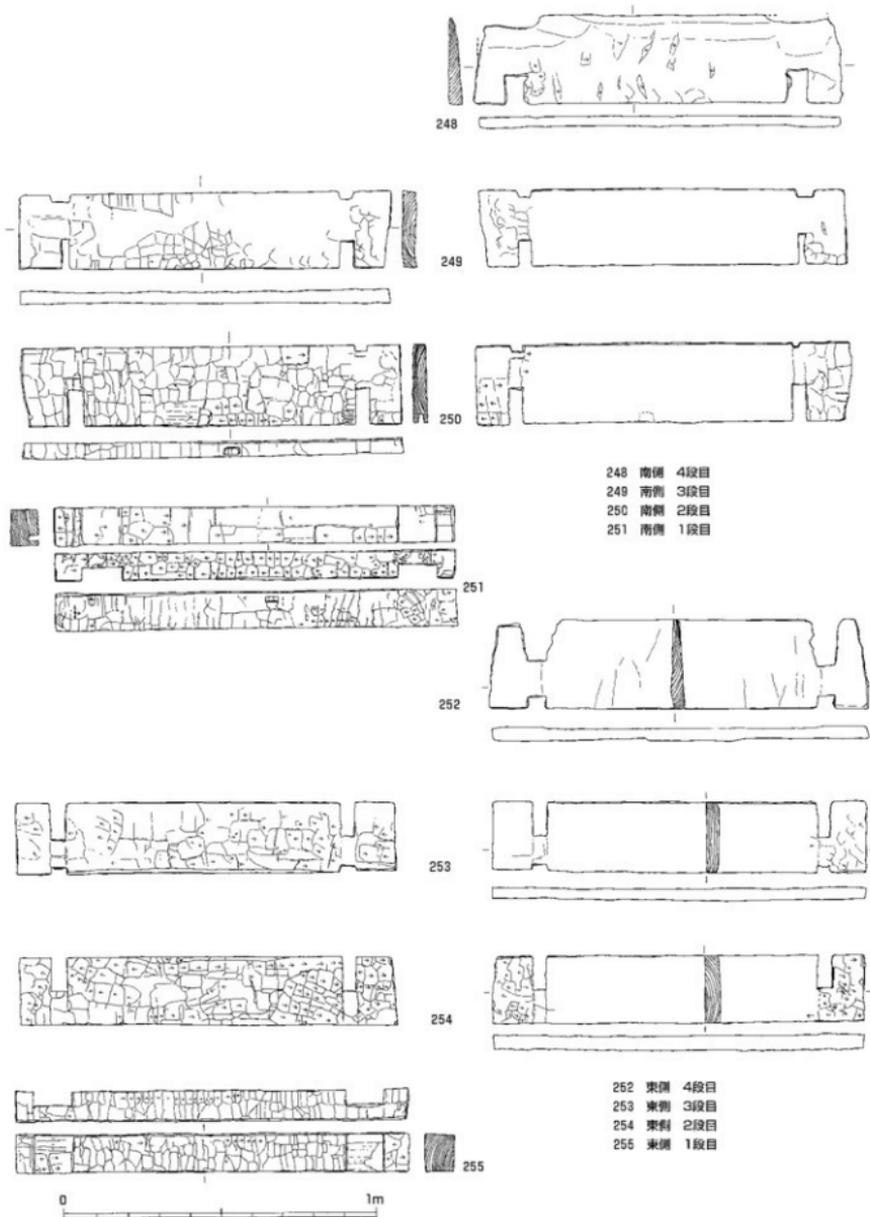
238は小型の曲物で、径12.8cm、高さ11.8cm、底板の厚さ0.7cm、側板の厚さ0.4cmを測る。側板と底板を木釘にて結合しており、側板の綴じ皮は遺存しているものの、側板の大半が欠損しているため、綴じ方は不明である。また、側板の内面に縦平行線状のケビキが入れている。側板の著しい欠損のため、断定はできないが、柄杓の可能性が高い。素材はヒノキである。

239は横節で、長さ4.6cm、残存幅5.4cm、厚さ0.9cmを測る。素材はイスノキで、板片の側縁から歯を挽きだしている。

240～255は井戸枠材で、素材はすべてコウヤマキである。手斧により丁寧に仕上げられているが、井戸内側面に比べて外側面の方が手斧痕の遺存が顕著である。特に、最下段（1段目）の手斧痕が明瞭である。



第108図 第4調査区 SE201 井戸枳実測図(1)



第109図 第4調査区 SE201 井戸枳実測図(2)

## 第7節 第5調査区

## 1. 概要

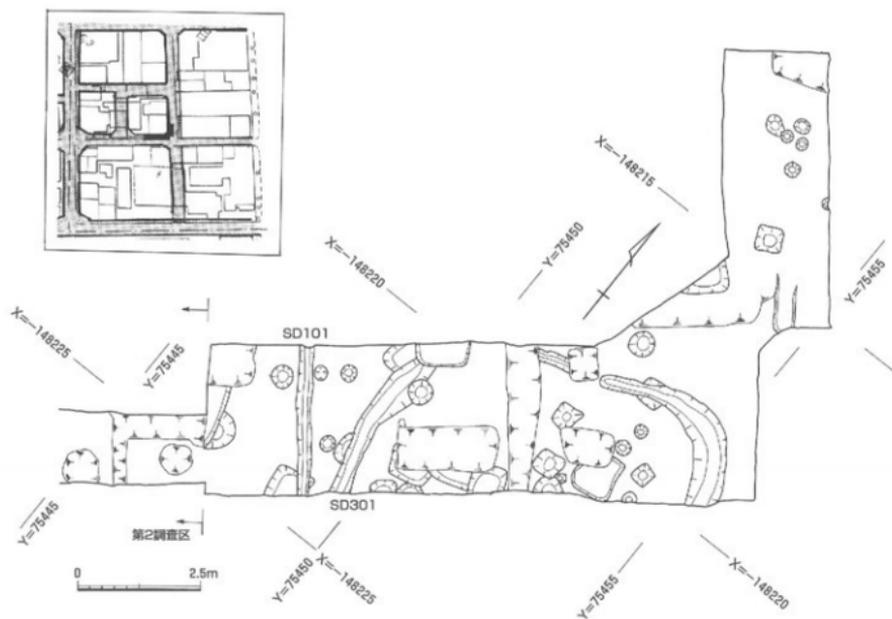
第5調査区は、第2調査区の南東に続く調査区である。この調査区では、標高5.65mまで掘り下げた地点で、中世および奈良時代～平安時代の遺物を出土する灰色粘質シルト層を確認している。この灰色粘質シルト層を取り除くと、標高5.55m地点で褐色粘土層が現れ、この層を取り除いた直下層の上面に遺構が残されていた。確認された遺構は、溝4条、ピット20基で、複数の時期の遺構が、同一層の上面で確認されたものと考えられる。

## 2. 弥生時代後期末～中世の遺構

SD101 調査区西端で確認された、幅40cm、深さ20cmの北西から南東方向に走る溝である。出土遺物が細片のため、正確な時期は不明だが、溝の方向が現在の地割に一致しており、中世以降のものである可能性もある。

SD301 調査区中央に位置する、幅60cm、深さ20cmの北北西から南南東方向に走る溝である。出土遺物から、弥生時代後期末の遺構と考えられる。

ピット 一辺90cm程度の、平面形が方形を呈するピットを数基確認しているが、調査区が狭く、掘立柱建物等の柱穴であるとの確認はできなかった。



第110図 第5調査区 遺構平面図

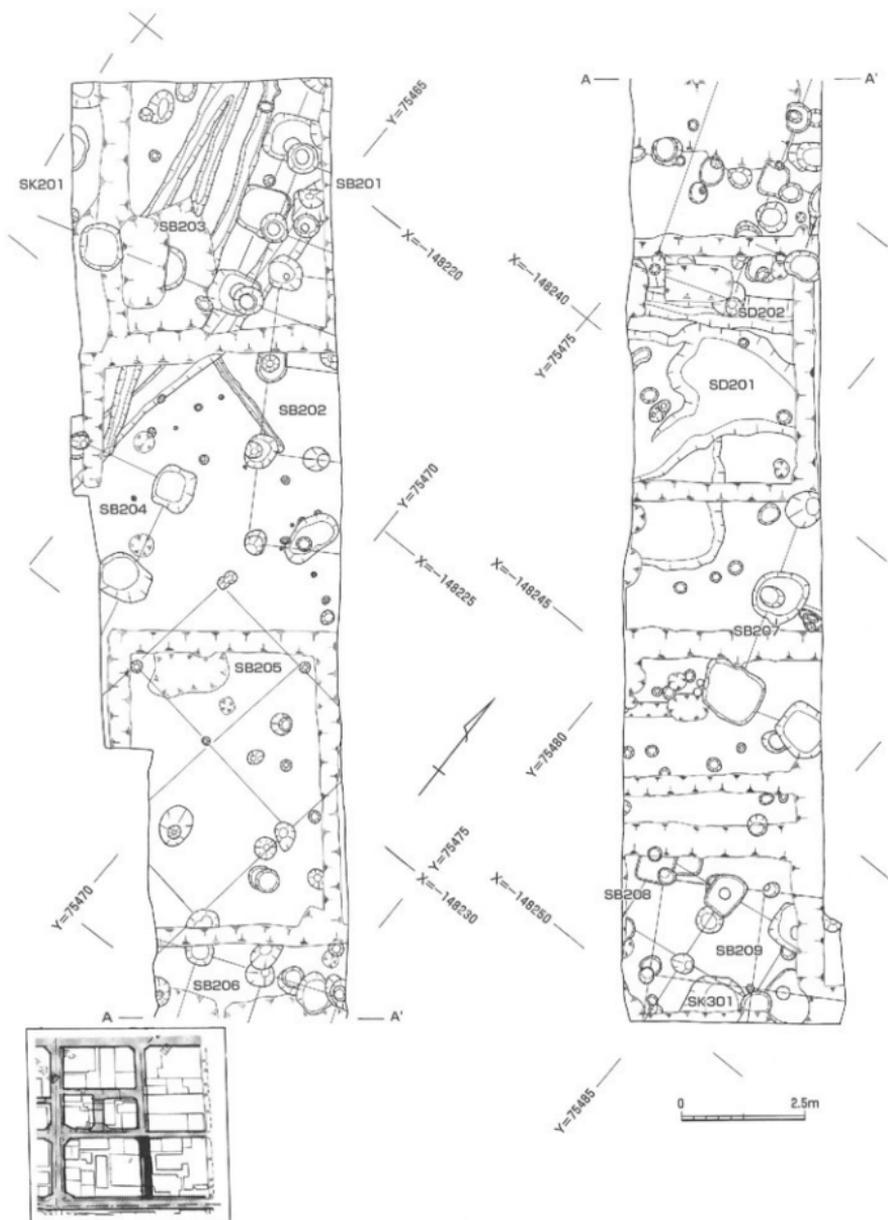
## 第8節 第6調査区

### 1. 概要

第6調査区は、5丁目南地区の中でもっとも南東寄りの地区である。この調査区でも、他の調査区と同様の、奈良時代～平安時代および中世の遺物を出土する第4層が、標高5.70mまで掘り下げた地点で確認されている。その層の直下で第5e層が現れるが、この層の上面で遺構を確認した。これは、第2・3調査区で確認した奈良時代～平安時代の遺構面に準ずる層と考えられるが、他と違いこの層からは庄内式期の遺物は出土せず、また直下層にこの時期の遺構面も存在しなかった。調査区内で確認した遺構は、掘立柱建物9棟、溝、土坑とピットである。

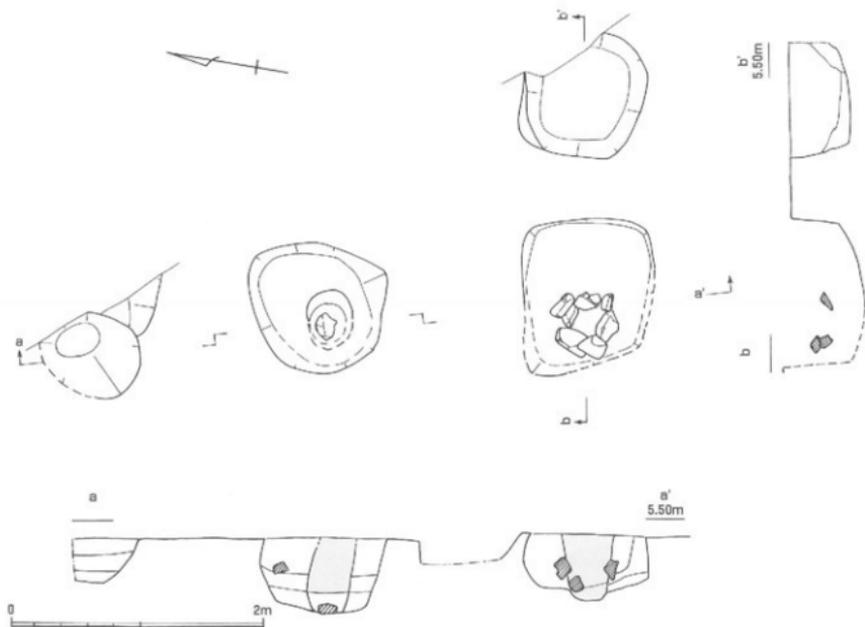
### 2. 遺構

- 掘立柱建物** 掘立柱建物は、計9棟が検出されたが、調査区が狭いため、いずれも部分的に確認されたものである。
- SB201** 調査区の北端で確認した。2間×1間以上の掘立柱建物である。柱掘形は、直径50cmほどの円形で深さは、20～30cmである。建物は、東へ延びると思われるが、調査区外のため確認できなかった。
- SB202** 3間×1間以上の掘立柱建物である。柱掘形は、直径60cm前後の円形に近い四角形である。東内側90cmほどで浅いピットが3基確認されたが、東柱になる可能性がある。
- SB203** 3間×3間以上の掘立柱建物である。柱掘形は、一辺90cmほどの隅丸方形で、深さは40～70cmを測る。柱穴埋土には、柱材痕を明瞭に残すものも認められる。調査区の北へさらに拡がると考えられる。
- SB204** 調査区の中央部の西辺で建物のコーナー部分1間分を検出した。柱掘形は、70～80cmの隅丸方形である。SB203とほぼ同じ方角に向けて建てられている。
- SB205** 2間×3間分を検出した。柱掘形は、直径20～30cmの円形で深さ15cmほどである。
- SB206** 調査区内で検出した規模は4間×3間であるが、調査区の東側に延びるため、正確な規模は不明である。
- SB207** 調査区内では2間×1間の規模で検出したが、調査区外に延びる可能性があり、正確な規模については不明である。柱穴から出土した土器から、飛鳥時代頃の遺構と考えられる。
- SB208** 調査区内では2間×1間の規模で検出したが、大半が調査区外に延びており、正確な規模については不明である。柱穴は楕形の平面形が隅丸方形あるいは楕円形に近いもので径1m強の大型のものである。柱痕は径35cm程度のものである。
- SB209** 調査区内では1間×1間の規模で検出したが、調査区外に延びる可能性があり、正確な規模については不明である。柱穴から出土した土器から、中世の建物と考えられるが、出土遺物が細片のため詳細な時期については不明である。
- SK301** 検出した規模は、東西1.4m×南北0.7mで、深さ28cmを測る。東側をピットに切られ、南部も攪乱によって失われているため、本来の規模については不明である。埋土は2層に分かれ、上層は暗灰色～褐色シルト質細砂で、下層は淡褐色細砂である。



第111図 第6調査区 遺構平面図

- SK201 東半分を検出した。直径60cm、深さ45cmですり鉢状に落ち込む。埋土には、粘土、シルトなどの堆積がみられ、水溜め遺構と考えられる。
- SD201 調査区中央部で検出した東から南西方向に流れる溝、あるいは流路と考えられる遺構である。最大幅2.4m、最深部の深さ42cmを測る。中央部で大きく膨らんだ後屈曲し、西部は中段をもち、幅を減じて南西方向へと流れる。中央部の北肩より若干離れたところで、獣骨が出土した。獣骨を検出した高さは、遺構検出面とほぼ同じである。その他埋土内からも部位不明の獣骨が出土している。これらの骨については、奈良国立文化財研究所松井章氏の鑑定の結果、どちらも牛の骨で、前出のものは特に、右肩肩甲骨であると判明した。
- SD202 SD201のすぐ北側で検出した東西方向に流れる溝で、幅70cm、深さ20cmを測る。須恵器、土師器の小片が出土しているが、詳細な時期の判定は不可能である。



第112図 第6調査区 SB207 平面・断面図

### 3. 遺構面以下層

上述の遺構を検出した層は、第2～第5調査区では庄内式期の包含層であり、直下層に同時期の遺構面が存在していた。しかし本調査区では、ほぼ同じ堆積層でありながら、下位には遺構面は存在しなかった。この堆積層自身からは弥生時代後期頃の土器が少量出土したが、他の地区のような庄内式期の良好な包含層ではなかった。周辺調査区では、庄内式期の遺構面が確認されているため、この層を取り除き、下層における遺構面の存在の有無について確認作業を行なったが、遺構は検出されず、遺物も極少量しか出土しなかった。

また、さらに下層の状況を確認するため、調査区内に3本のトレンチを設定して断ち割り調査を行った。その結果、遺構面よりも下層には、調査区の全域に砂礫層あるいは粗砂層が堆積しており、突帯文土器から弥生中期の土器が少量出土した。この砂礫層あるいは粗砂層は洪水砂と考えられる。

### 4. 出土遺物

本調査区でも、若干の遺物が出土しているが、小片が多く、時期の判定等が不可能なものが大半である。SK301からは、わずかながら図化作業が可能な土器片が出土している。

SK301

256は口径10.8cmを測り、底部を欠く。口縁部と体部の境の屈曲は目立たない。

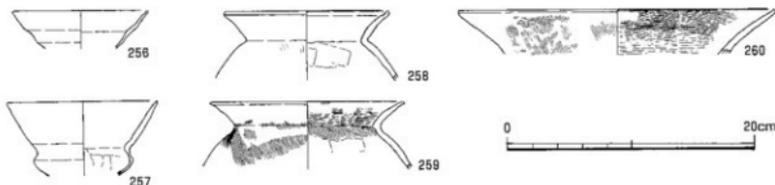
257は口径11.9cmを測る。底部を欠くが、器形のほぼ全容を知ることができる。

258・259は甕の口縁から体部にかけての破片である。

258は口縁端部にやや強くヨコナデを施し、つまみあげ気味に収めるもので、体部外面は、わずかにハケの痕跡が残る。体部内面は横方向の板ナデを施す。

259は、やや外反気味に開く口縁で、口径は15.4cmを測る。体部外面は縦、斜め方向のハケを、内面は口縁部が水平方向、体部上側は斜め方向のハケを、下側は板ナデを施す。

260は、二重口縁部壺の口縁部と思われる破片で、口径25.5cmを測る。外面は縦方向、内面は横方向のハケを施す。



第113図 第6調査区 SK301 出土遺物実測図

## 第9節 小結

以上が5丁目南地区の調査結果である。この地区では、調査区の東側、第2調査区、第4調査区を中心に、標高5.5m前後の地点で奈良時代～平安時代の遺構を多く確認した。

遺構は掘立柱建物を中心に、ピット、溝などである。これらの調査区ではまた、奈良時代～平安時代の遺構面からさらに下層へ掘り下げた標高5.3m地点付近で、弥生時代後期末（庄内併行期）の遺構面を確認している。

**低湿地と微高地** この2時期の遺構面は、5丁目南地区の中でも、北東側の位置に集中して存在していた。その他、最も北西に位置する第1調査区では、弥生時代後期末の地表面上で人為的に残された生活痕以外に、居住域となる微高地から、生産活動の領域である水田地帯と考えられる低湿地へと地形が変化していく様子が確認できた。当地区内では、湿地土壌上面で水田の証拠となる畦畔等は確認されていないが、他の地区では見つかっている調査区もあり、この低湿地が水田として利用されていたと断言して良いだろう。

5丁目南地区において、低湿地帯は標高5.2m付近で確認されており、微高地となる地帯に比べて約80cm程度低くなっている。低湿地地上には洪水性と考えられる砂層が堆積しており、堆積層内からは遺構と同じ庄内式期の土器が出土している。

このことからみて、弥生時代後期末、御蔵の集落では水田耕作による生産活動に従事する人々が生活していたが、ある時洪水がおこり、水田は人々の目前であったという間に、押し寄せた砂の下に埋もれてしまったと想像される。

**土地利用** 6丁目北地区の調査結果によると、現在御蔵遺跡の西限と考えられている6丁目北地区の西端部分で、現在は埋没してしまった旧河川が見つかっている。これは、今は新湊川と呼ばれている刈藁川のかつての姿と考えられる。今回の調査で見つかったのは中世に埋没した流れであるが、おそらく弥生時代にもこの土地の近くに川は流れていて、時々には堆積作用で流れを変え、それに応じて地形も変わっていったと考えられる。弥生時代のこの地には低地と微高地があり、それぞれの地形に応じて生活域と生産域として利用されていたと考えられるが、低地部分が洪水で埋没した後は、ゆるい勾配のほぼ水平地形に変化した。かつて低地だったところは、奈良時代から平安時代には、急な流水が運んだ粗い砂層で構成された土壌が地面であった。そのため軟弱地盤地帯として人々は家を建てることをためらったのか、砂層部分では遺構が発見されなかった。この時代の遺構は、弥生時代後期末に微高地だった地帯に集中して確認されている。奈良時代～平安時代の遺構としては、掘立柱建物が多く見つかっているが、建物の多くはやや西に振れた南北に軸を持つ、同じ方向のものが大半である。

**中世** そのほか、本地区では、一部中世と考えられる遺構が残っているのが確認された。これらの遺構については、層序的に古代の層との上下関係の中で把握されたものではなく、すべて奈良時代～平安時代の遺構面と同一面上に切り合う状態で見つかっている。これは、中世にも御蔵の集落には人が住んでいたが、後の時代に耕作地等に変化していく過程で、純粋な中世の層は失われてしまった可能性が高いと考えている。深く地面を穿ったものだけが古代の層に残り、今回の発掘調査で発見されたと思われる。

## 第5章 6丁目南地区の調査

### 第1節 調査区の設定

6丁目南地区については、区画道路築造予定範囲244mについての調査が行われた。これらの調査区については、道路築造工事の工程に従い調査を行ったため、連続する調査範囲でありながら、実際には3ヵ年、8回に分けて調査がおこなわれた。各回の調査については、着手された順に神戸市教育委員会の定める調査次数が割り振られているが、本報告書ではこの次数とは別に、調査の行われた範囲について改めて5つの地区に地区割り作業を行い、それぞれの調査区に呼称を付け、その区ごとに調査結果を掲載した。この地区割り作業にあたっては、同一時期の遺構面が連続する範囲を優先したため、時には調査着手年次が複数にまたがっているものを、一つの調査区に一括している場合もある。

下表は調査着手時に定められた次数と、本報告書内における調査区名の対応表である。この表をもって本書中に述べる調査区呼称が、現地調査時のどの地区に該当するかを把握するための資料とする。

地区名	旧次数	新次数
第1調査区	15次・20-16次・20-20次	6-7次・14-16次・14-20次
第2調査区	20-4次・20-6次	14-4次・14-6次
第3調査区	32-4次・20-20次	32-4次・14-20次
第4調査区	32-5次	32-5次
第5調査区	20-5次	14-5次



第114図 6丁目南地区 調査区配置図

## 第2節 基本層序

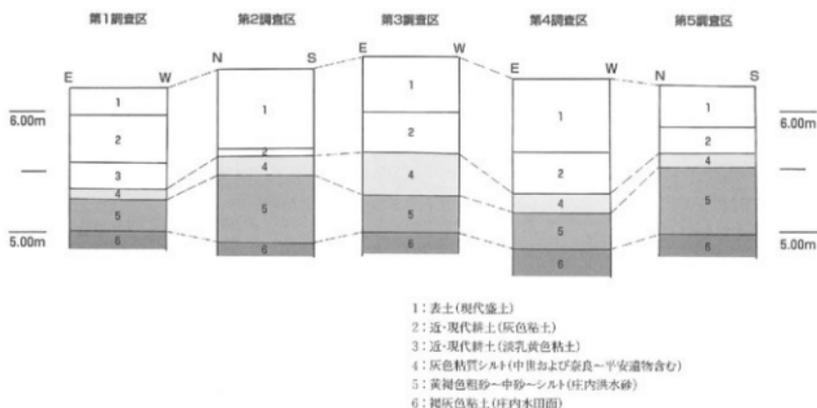
6丁目南地区内で観察された堆積層は、若干の高低差があるが、すべての調査区でほぼ同様の状況を示している。基本的には現在の地表面となる盛土層と、その直下の近・現代の耕作土を取り除いたところで、中世および奈良時代～平安時代の遺物を出土する灰色粘質シルト層が見れる。この層は、調査区によって若干の差異があるが、おおむね標高5.3m～5.7m付近に堆積している。この層は、5丁目南地区全域でも同様の標高で堆積を確認しており、御蔵遺跡の全域にわたって広範に観察することができる。

この灰色粘質シルト層の直下には、庄内式期の遺物を出土する洪水性の堆積層が見られる。これは5丁目南地区第1調査区で確認した洪水砂と同じものであると考えられる。

この洪水性堆積層は調査区によってかなり厚さが異なるが、標高5.5m～5.3m地点まで掘り下げると見れるものである。

洪水砂を取り除くと、灰褐色粘土が見れる。これも5丁目南地区第1調査区で確認した湿地性堆積層と考えられる。この層より上に堆積していた層には若干の高低差があるが、この湿地性堆積層に関しては、すべての調査区で標高4.9m～5.0mと、均一な高さで確認している。このことから、この堆積層が地表面として露呈していた当時は、ほぼ水平地形だったと考えられる。

個々の堆積層間の高低差に関しては、下に示した模式柱状図に示す通りである。



第115図 6丁目南地区 基本層序模式図

### 第3節 第1調査区

#### 1. 概要

第1調査区は、6丁目南地区の南東角に位置し、5丁目南地区第3調査区の西に近接する。この調査区では、標高5.35m付近まで掘り下げた地点で、中世および奈良時代～平安時代の遺物を多く出土する灰色粘質シルト層の堆積を確認している。この層の直下層、標高5.25m付近地点には、洪水性の堆積物と思われる砂層が堆積しているが、この砂層の上面で、最初の遺構を確認している。この砂層を取り除いたさらに下層、標高5.0m付近まで掘り下げると、湿地性の粘土層が現れる。この層の上面が第2の遺構面である。

#### 2. 弥生時代後期末の遺構

水田

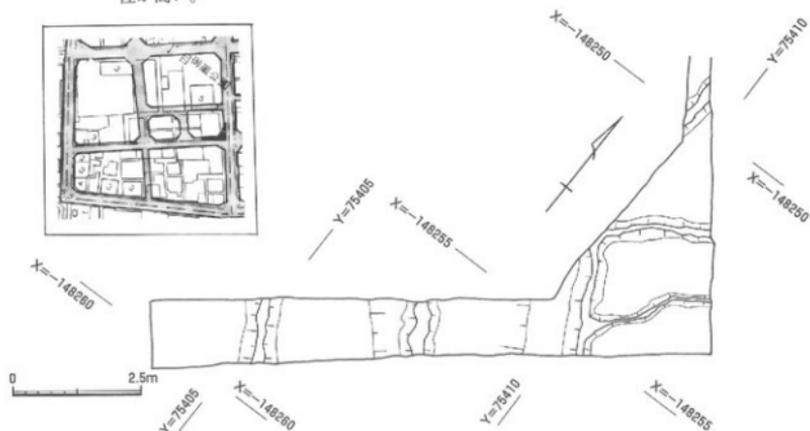
上述のように、標高5.25mまで掘り下げた地点で洪水性の堆積層が現れる。この砂層を取り除くと、標高5.0m付近で湿地性の粘土層が現れる。この上面が遺構面となる。確認した遺構は、水田の畦畔である。畦畔は、洪水により削られていたが、5畝の畦畔が検出された。また、西端の水田面直上にはわずかに耕土層が遺存していた。洪水砂からは庄内式期の土器が出土することから、この遺構面の時期は、弥生時代後期末と考えられる。

#### 3. 奈良時代～平安時代および中世の遺構

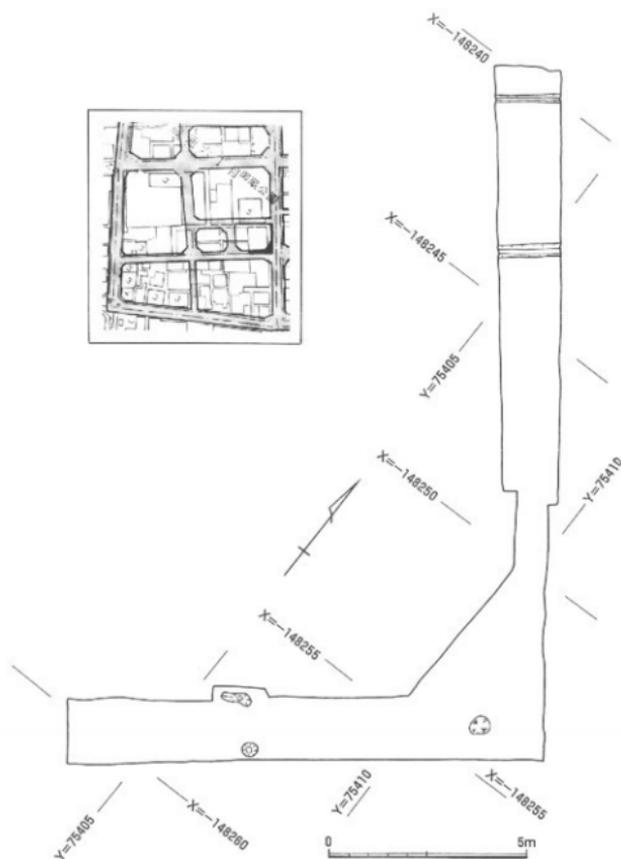
上記の水田層の上に堆積していた洪水砂層の上面に残されていた。確認された遺構は、溝2条と小規模な落ち込みが2基のみである。

溝

溝は、どちらも同様の規模で、幅20～40cm、深さは10cm前後、東西方向に走っている。これらの遺構は、埋土からの遺物の出土もないため、時期の特定は難しいが、周辺部における調査成果や遺物包含層、出土遺物から、奈良～平安時代および中世の遺構面の可能性が高い。



第116図 第1調査区 弥生時代後期末遺構平面図



第117図 第1調査区 奈良時代～平安時代・中世遺構平面図

## 第4節 第2調査区

第2調査区は、第1調査区の北側に続く地区である。この調査区でも、奈良時代～平安時代および中世の遺物を出土する灰色粘質シルト層の直下、標高5.5mまで掘り下げた地点で、第1調査区と同じ洪水砂層を確認している。

洪水砂層からは、庄内式期の土器が出土している。洪水砂の下層には、湿地性の褐色粘土層が堆積している。これは、第1調査区の、弥生時代後期末の水田層と同じ堆積層と考えられる。

この調査区は、ほぼ第1調査区と同じ層序の堆積状況と見て良いが、褐色粘土層上面で、第1調査区のような水田畦畔は確認されず、洪水砂層の上面でも遺構は確認できなかった。

## 第5節 第3調査区

### 1. 概要

第3調査区は、6丁目南地区の最も北西寄りに位置する。この調査区では、標高5.65mまで掘り下げた地点で、奈良時代～平安時代および中世の遺物を多く出土する灰色粘質シルト層を検出しており、この上面で遺構を確認した。その下層には、庄内式期の遺物を出土する洪水砂である黄褐色粗砂～シルト層、その下層には褐灰色粘土層が堆積している。

### 2. 洪水砂以下層

#### 水田層

奈良時代～平安時代の遺構面が造られている洪水砂層を取り除くと、褐灰色粘土層が堆積しているのが確認された。第1調査区で確認された弥生時代後期末の水田と同一層と考えられるが、本調査区内では畦畔等は確認できなかった。

### 3. 奈良時代～平安時代の遺構

#### SD201

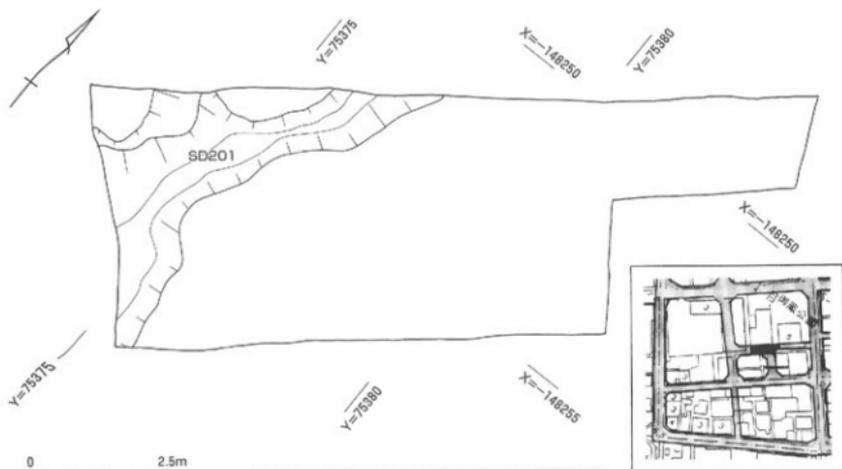
調査区の西側で南北方向に流れる溝1条（SD201）を検出した。この遺構面の造られている層は、庄内式期の遺物を出土する洪水砂である。

確認された溝は、最大幅2.5m、深さ20cmを測る。この溝の埋土から若干の遺物が出土したが、小片で、時期を特定できるものではなかった。

### 4. 中世の遺構

#### SD101

灰黄褐色砂質シルト層の上面で、調査区内を東西方向に流れる幅30～40cm、深さ15cmを測る溝1条（SD101）を検出した。この溝からの遺物の出土はないが、周辺地区の調査結果からみて、中世の遺構である可能性が高い。



第118図 第3調査区 奈良時代～平安時代遺構平面図

## 第6節 第4調査区

### 1. 概要

第4調査区は、6丁目南地区のうち最も南西に位置する。標高5.3mまで掘り下げた地点で灰色粘質シルトを確認している。この調査区も、基本層序は第1、第2調査区と同様である。遺構は灰色粘質シルトを取り除いた洪水砂の上面、標高5.1m地点で確認した。

### 2. 奈良時代～平安時代の遺構

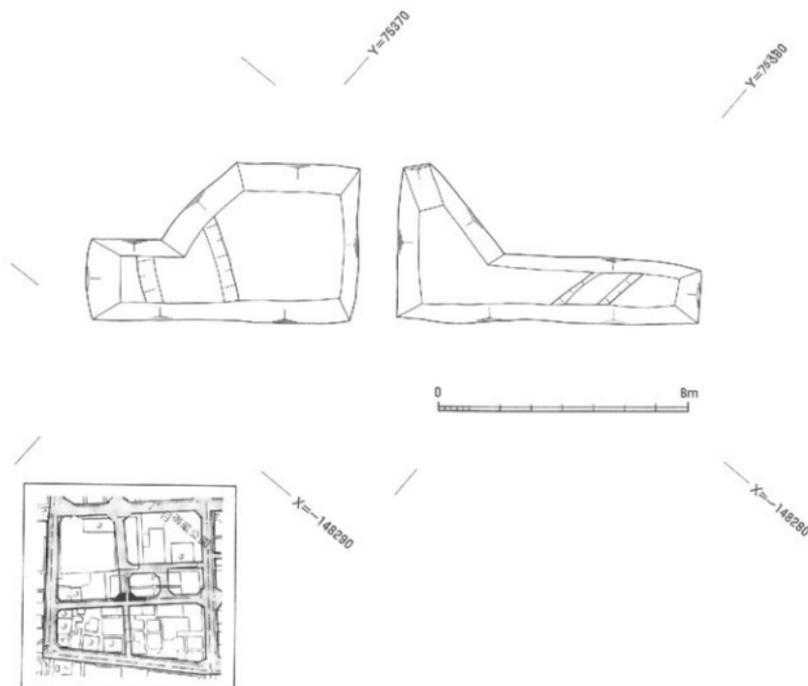
検出した遺構は溝1条、浅い落ち込み1基である。落ち込みは壁面精査中に確認したため、平面的には調査出来ていない。

溝

溝は東側調査区の東寄で検出した。長さ2.4mを検出したが、南北両側は調査区外に続くため全長は不明である。幅1.2m、深さ約20cmである。土師器片が少量出土した。

落ち込み

落ち込みは西側調査区の西寄で検出した。北西と南東の両側が調査区外に続き形状が不明であるためここでは落ち込みとしておく。検出長2.4m、幅3.0m、深さ約20cm、断面は浅い皿状であるが、底面には若干の凹凸がある。



第119図 第4調査区 奈良時代～平安時代遺構平面図

## 第7節 第5調査区

第5調査区は第4調査区の北東に続く場所に位置する。本調査区については、発掘調査着手前に街区工事が行なわれたため、調査区の大半が未調査である。当該地区については、街区工事後に、断面観察によって土層の堆積状況を確認し、調査を終了した。一部範囲については2m×2mのテストピットによる試掘調査を行い、堆積層の状況を確認した。

この地区の土層堆積状況は、基本的に第1～第4調査区と同じである。標高5.6mまで掘り下げた地点で灰色粘質シルトを、さらにそれを取り除いた標高5.5m地点で、庄内式期の遺物を出土する洪水砂層を、洪水砂層を取り除いた標高5.0m地点で褐色粘土層を確認している。テストピット内では、それぞれの堆積層の上面で遺構を確認することはできなかった。

## 第8節 小結

以上が6丁目南地区の調査結果である。この地区では、すべての調査区で灰色粘土層の下層に庄内式期の洪水砂を確認しており、さらにその下位で褐色粘土層を確認している。

### 低湿地

この地区で確認した堆積層の状況は、5丁目南地区第1調査区に準ずるものと思われる。5丁目南地区第1調査区では、庄内式期の地表面で以来の微高地から低湿地へ、地形が変化していく様子を捉えることができたが、6丁目南地区では全域がこの低湿地帯と考えられる。

### 水田

低湿地が当時水田として利用されていた可能性を前章で指摘したが、本地区の第1調査区では、水田畦畔そのものが確認されている。他の調査区では、堆積層の状況はほぼ同じながら、畦畔は確認されていないが、これは調査区が狭いことによると考えられる。今後の調査では、広範な地域での水田畦畔の確認、あるいは褐色粘土層のプラントオパール分析など、科学的証拠に拠る仮説の証明を行う必要がある。

また、この庄内式期に堆積したと思われる洪水砂層の上面で、一部遺構を確認している。確認された遺構はわずかで、規模も小さく機能も不明である。前章でも述べたが、洪水砂層上面が奈良時代～平安時代の時期に地表面を形成していたものの、当時の人々からは、軟弱地盤として居住地に不適当と考えられていたという仮説をあらためて述べておく。

### 中世

その他本地区では、洪水砂層の上位に堆積する、奈良時代～平安時代および中世の遺物が多く出土する灰色粘質シルト層の上面で、一部地区に中世のものである可能性が高い遺構を検出している。

発見された遺構はわずかで、遺構からの出土遺物もほとんどないが、遺構の造られている層が中世の堆積物であることから考えて、この遺構は中世あるいはそれ以降の時期のものと考えられる。

## 第6章 自然科学分析

### 御蔵遺跡から出土した木製品等の樹種

バリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

御蔵遺跡では、奈良時代～鎌倉時代の集落址が検出された。検出された遺構のうち、掘立柱建物跡の柱穴では、柱材の一部が残存しているものが認められた。また、井戸跡からは、木製品や、木製品加工時の削片などが出土している。

本報告では、これらの木製品等について樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。

#### 1. 試料

試料は、2次、3次、12次、13次、14-9次、14-10次、14-12次、14-18次、16次、18-2次、32-1次で出土した柱材や木製品など160点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表2に記した。

#### 2. 方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柂目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレバートを作製する。作製したプレバートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

#### 3. 結果

樹種同定結果を表2に示す。第32-1次調査R-080は、仮道管を主とすることから針葉樹であるが、保存状態が悪いため種類の同定には至らなかった。その他の試料は、針葉樹8種類(マツ属複雑管束亜属・モミ属・ツガ属・スギ・コウヤマキ・ヒノキ・サワラ・カヤ)、広葉樹11種類(コナラ属アカガシ亜属・ツブラジイ・スタジイ・クスノキ・クスノキ科・ヤブツバキ・サカキ・ヒサカキ・イスノキ・アジサイ属・カエデ属)に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・マツ属複雑管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～20細胞高。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・ツガ属 (*Tsuga*) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は広いものと狭いものがある。放射組織は仮道管と柔細胞で構成され、柔細胞壁は滑らかで、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞がほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。

・コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc.) コウヤマキ科コウヤマキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔は窓状となる。放射組織は単列、1~5細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型~トウヒ型で、1分野に1~3個。放射組織は単列、1~15細胞高。

・サワラ (*Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はスギ型~ヒノキ型で、1分野に1~3個。放射組織は単列、1~15細胞高。

・カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

試料は保存状態が悪い。軸方向組織は仮道管のみで構成される。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はトウヒ型~ヒノキ型で、1分野に1~4個。放射組織は単列、1~10細胞高。仮道管内壁には対をなしたらせん肥厚が認められる。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中層~厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・ツブラジイ (*Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky) ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、孔部は疎な3~4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと集合~複合放射組織とがある。

・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、孔部は疎な3~4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高。

・クスノキ (*Cinnamomum camphora* (L.) Presl) クスノキ科クスノキ属

散孔材で、管壁は薄く、横断面では楕円形、単独または2~3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性III型、1~3細胞幅、1~20細胞高。柔組織は周圍状~翼状。柔細胞には油細胞が認められる。

・クスノキ科 (Lauraceae)

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2~3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性III型、1~2細胞幅、1~20細胞高。柔細胞には油細胞が認められる。

・ヤブツバキ (*Camellia japonica* L.) ツバキ科ツバキ属

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性II～I型、1～2細胞幅、1～20細胞高で、時に上下に連結する。柔細胞は時に結晶を含む。

・サカキ (*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.) ツバキ科サカキ属

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2～3個が複合して散在し、道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、単(～2)列、1～20細胞高。

・ヒサカキ (*Eurya japonica* Thunberg) ツバキ科ヒサカキ属

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2～3個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性III～II型、1～4細胞幅、1～40細胞高。

・イスノキ (*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.) マンサク科イスノキ属

散孔材で、道管はほとんど単独で散在する。道管は階段穿孔を有し、段数は5前後。放射組織は異性II型、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は独立帯状または短接線状でほぼ等間隔に配列する。

・アジサイ属 (*Hydrangea*) ユキノシタ科

散孔材で、小型の道管が単独、まれに2個が複合してほぼ均一に散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状に配列する。放射組織は異性。型、1～3細胞幅、1～30細胞高で、時に上下に連結する。

・カエデ属 (*Acer*) カエデ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2～3個が複合して散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～4細胞幅、1～30細胞高。細胞壁の厚さが異なる2種類の木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

#### 4. 考察

木製品などには、合計19種類が認められた。時期別・用途別の種類構成を表3に示す。試料は、160点中133点までが針葉樹材であり、とくにモミ属、コウヤマキ、ヒノキが多い。同様の傾向は、上沢遺跡でも見られることから、本地域では奈良時代～中世にかけて、針葉樹中心の用材選択が行われていたことが推定される。

奈良時代～平安時代(9世紀前半)までは、柱材、礎板、井戸枠などにコウヤマキが多数利用されている。比較的大型の部材や杭材にも認められることから、遺跡周辺の扇状地上などに生育していたものを利用していただのかもしれない。ヒノキは、コウヤマキと同様の用途に利用されているが、曲物については全点がヒノキであり、コウヤマキは利用されていない。同様の結果は、上沢遺跡でも確認されている。いずれも耐水・耐湿性に優れていることから、このような材質を考慮した用材選択が行われたことが推定される。曲物にコウヤマキが利用されなかった背景には、ヒノキに比較して木材の香りが強いことなどが考えられる。なお、上沢遺跡では、奈良時代の井戸枠にコウヤマキと共にスギやヒノキも多数利用されている。本遺跡で9世紀前半の井戸材にスギやヒノキが少ない背景には、奈良時代～8世紀の間に、スギやヒノキの木材を大量に利用した結果、その木材資源が減少したなどが考えられる。

一方、広葉樹材の用途を見ると、その多くは杭材である。比較の種類数が多いことから、周辺に生育して

いた木材、加工時の余材、廃材の転用など入手できる様々な木材を利用していたことが推定される。広葉樹の中で、楠に認められたイスノキは、これまで各地で行われた調査でも楠に多く確認されている種類である（島地・伊東, 1988; 伊東, 1990; 山田, 1993）。この中には、新潟県岩船遺跡や長野県屋代遺跡群など、現在イスノキが自生していない地域での報告例もある（川村, 1983; 高橋・辻本, 1999）。これらの結果から、イスノキが楠の素材として選択的に利用され、製品が各地に運ばれていたことが推定される。今回の本遺跡のイスノキの楠についても、他地域で製作された楠が運ばれていた可能性がある。

10世紀の試料では、それまで多く利用されていたコウヤマキが全く認められない。9世紀前半にコウヤマキが多く利用されていた井戸材などにも常緑広葉樹のクスノキが利用されており、この間に用材選択が変化したことが推定される。クスノキは、比較的大径木になる種類で、木材は樟脳を多く含むために耐水性が高い。コウヤマキの木材資源が減少したため、同じく耐水性の高い木材としてクスノキが選択されたと考えられる。

12世紀では、板や井戸材にモミ属が多く認められる。モミ属は、現在の植生（近藤, 1992）等を考慮すれば、モミの可能性が高い。10世紀の井戸材に利用されていたクスノキが全く認められないことから、コウヤマキに続いてクスノキの木材資源も減少したことが推定される。モミ属は、コウヤマキやクスノキほど耐水性や保存性が良くないが、比較的大径木になる種類で、木理は通直、加工も容易である。このことから、耐水・耐湿性が高く、井戸材として適したヒノキ、スギ、コウヤマキ、クスノキの木材資源が減少した後、その代用として多少材質は劣るものの、大材が得られ、加工も容易であるモミ属が利用された可能性がある。なお、上沢遺跡では、12世紀の井戸材にモミ属と共にいわゆる中間温帯林（モミーツガ林）を構成するツガ属が多数確認されており、今回の結果とも植生の背景が調和的である。また、玉津田中遺跡では、鎌倉時代とされる井戸材にモミ属が多く認められ（島地, 1996）、同様の傾向が12世紀以降も続いたことがうかがえる。

鎌倉時代では、一時的に利用が見られなくなっていたコウヤマキが柱材として利用されている。白水遺跡の11世紀の柱材にもコウヤマキが認められていること（植田, 1999）を考慮すると、9世紀～10世紀頃にコウヤマキの資源が減少したために利用する用途が限定されるようになった等、コウヤマキの利用方法が変化したことが推定される。

中世（13世紀末～14世紀初め）の試料は、薄板などが主である。樹種をみると、ツガ属やヒノキなどの針葉樹材が多数認められ、針葉樹を主とした用材選択が継続して行われていたことが推定される。このうち、ヒノキについては、刀子削片にも認められることから、遺跡内で加工が行われていたことが推定される。一方、手斧削片に認められたアカガシ亜属は、製品には全く認められず、製作後に遺跡内から搬出された可能性がある。そのため、遺跡内でアカガシ亜属の加工が行われていたことは明らかであるが、どのような製品を製作していたのかは不明である。

今後、さらに調査をすすめて、本遺跡で見られたような時代による用材の変化が他遺跡でも認められるのか確認したい。また、他の植物化石なども検討していく必要がある。

引用文献

- 伊東隆夫（1990）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途II. 木材研究・資料, 26, p.91-189, 京都大学木材研究所.
- 川村忠洋（1983）曾根遺跡出土木材の識別. 新大演報, 16, p.75-82.
- 近藤浩文・武田義明・松下まり子・小西美恵子（1992）六甲山の植物. 183p., 神戸新聞総合出版センター.
- 島地 謙（1996）玉津田中遺跡出土木製品の樹種. 兵庫県文化財調査報告第135-6冊「神戸市西区 玉津田中遺跡 一第6分冊（総括編）一」一田中特定土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書, p.15-49, 兵庫県教育委員会.
- 島地 謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧. 296p., 雄山閣.
- 高橋 敦・辻本崇夫（1999）木製品・自然木、炭化材の樹種. 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 42「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26 一更埴市内その5 一 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 一古代1編一 本文」, p.333-337, 日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター.
- 植田弥生（1999）白水遺跡第4次調査から出土した木製品の樹種. 「白水遺跡 第4次 一神戸国際港都建設事業神戸市白水特定土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一」, p.66-72, 神戸市教育委員会.
- 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成 一用材から見た人間・植物関係史. 植生史研究, 特別第1号, 242p.

表2 御蔵遺跡の樹種同定結果

調査回数	調査地区	遺物番号	取り上げ番号	遺物名	出土遺構	時期	樹種		
第2次	5丁目北		R 01	柱根	SB02	奈良時代	コウヤマキ		
			R 2-5	杭	SE01	奈良時代	ヒサカキ		
			R 2-8	板	SE01	奈良時代	ヒノキ		
			R 2-16	板	SE01	奈良時代	スギ		
			R 2-18	杭	SE01	奈良時代	ツブラジイ		
			R 2-28	杭	SE01	奈良時代	ヒサカキ		
			R 2-29	杭	SE01	奈良時代	ヒサカキ		
			R 03	山物井ノ枠	SE01	奈良時代	ヒノキ		
			R 6-9	桶状井ノ枠	SE02	近世以降	コウヤマキ		
第3次	5丁目南		R 326	柱痕	SP214	古墳時代後期	コウヤマキ		
			R 346-1	柱痕	SP327-2	古墳時代後期	コウヤマキ		
第12次	5丁目北		R 52	木片(炭化)	SB101-P6	平安時代	コウヤマキ		
			R 65	板材	SB101-P5	平安時代	コウヤマキ		
第13次	6丁目北		R 66	板材	SB101-P5	平安時代	コウヤマキ		
			R 27-1	薄板	SE01	鎌倉時代	ヒノキ		
			R 27-2	薄板	SE01	鎌倉時代	サワラ		
			R 29	薄板	SE01	鎌倉時代	コウヤマキ		
			R 30	薄板	SE01	鎌倉時代	モミ属		
			R 31	薄板	SE01	鎌倉時代	ヒノキ		
			R 32	曲物	SE01	鎌倉時代	ヒノキ		
			R 33	薄板	SE01	鎌倉時代	ヒノキ		
			R 34	刀子削片	SE01	鎌倉時代	ヒノキ		
			R 35	薄板	SE01	鎌倉時代	ヒノキ		
			R 37	柄	SE01	鎌倉時代	マツ属・椎属・常葉松属		
			R 43	薄板	SE01	鎌倉時代	ツガ属		
			R 45-1	薄板	SE01	鎌倉時代	ツガ属		
			R 45-2	薄板	SE01	鎌倉時代	スダジイ		
			R 51	板材	SE01	鎌倉時代	ツガ属		
			R 52	板材	SE01	鎌倉時代	ツガ属		
			R 56	板材	SE01	鎌倉時代	ツガ属		
			R 58	板材	SE01	鎌倉時代	ツガ属		
			R 59	板材	SE01	鎌倉時代	ツガ属		
			R 60	板材	SE01	鎌倉時代	ツガ属		
			R 63-1	板材	SE01	鎌倉時代	ヒノキ		
			R 63-2	刀子削片	SE01	鎌倉時代	ヒノキ		
			R 63-3	手斧削片	SE01	鎌倉時代	コナラ属・アカガシ属		
			R 63-4	手斧削片	SE01	鎌倉時代	コナラ属・アカガシ属		
		第14次-9	5丁目南第4	240	R 41	井戸枠N-1	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ
				241	R 42	井戸枠N-2	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ
				242	R 43	井ノ枠N-3	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ
243	R 44			井戸枠N-4	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ		
248	R 45			井戸枠S-1	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ		
249	R 46			井ノ枠S-2	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ		
250	R 47			井戸枠S-3	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ		
251	R 48			井戸枠S-4	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ		
252	R 49			井戸枠E-1	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ		
253	R 50			井ノ枠E-2	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ		
254	R 51			井ノ枠E-3	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ		
255	R 52			井戸枠E-4	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ		
244	R 53			井戸枠W-1	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ		
245	R 54			井戸枠W-2	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ		
246	R 55			井ノ枠W-3	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ		
247	R 56			井戸枠W-4	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ		
	R 57			杭K-1	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ		

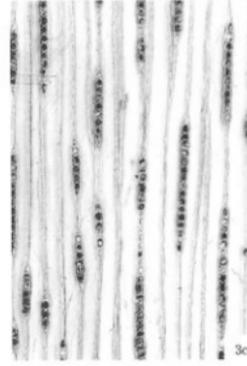
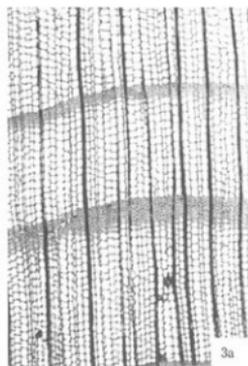
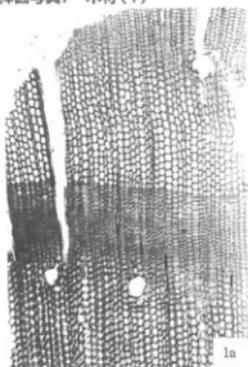
調査回数	調査地区	遺物番号	取り上げ番付	遺物名	出土遺構	時期	樹種
第14次-9	5丁目南第4		R 58	杭 K-2	SE201	平安時代前葉	コナラ属アカガシ亜属
			R 59	杭 K-3	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ
			R 60	杭 K-4	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ
			R 61	杭 K-5	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ
			R 62	杭 K-6	SE201	平安時代前葉	カヌエ属
			R 63	杭 K-7	SE201	平安時代前葉	ツガ属
			R 64	杭 K-8	SE201	平安時代前葉	コナラ属アカガシ亜属
			R 65	杭 K-9	SE201	平安時代前葉	クスノキ科
			R 66	井戸枠材1	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ
			R 67	井戸枠材2	SE201	平安時代前葉	ヒノキ
			R 68	井戸枠材3	SE201	平安時代前葉	ヒノキ
			R 69	井戸枠材4	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ
			R 70	井戸枠材5	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ
			R 71	井戸枠材6	SE201	平安時代前葉	コウヤマキ
			R 72	井戸枠材7	SE201	平安時代前葉	ヒノキ
			R 73	井戸枠材8	SE201	平安時代前葉	ヒノキ科
			R 74	井戸枠材9	SE201	平安時代前葉	モミ属
			R 75	板材10	SE201	平安時代前葉	サカキ
			R 76	井戸枠材11	SE201	平安時代前葉	モミ属
			R 77	板材12	SE201	平安時代前葉	ヒノキ
		237	R 78	曲物底板13	SE201	平安時代前葉	ヒノキ
		237	R 79	曲物底板14	SE201	平安時代前葉	ヒノキ
			R 80	板材	SE201	平安時代前葉	ヒノキ
			R 81	板材	SE201	平安時代前葉	ヒノキ
			R 82	丸木材	SE201	平安時代前葉	サカキ
			R 83	丸木材	SE201	平安時代前葉	スズイ
			R 84	板材	SE201	平安時代前葉	ヒノキ
			R 85	板材	SE201	平安時代前葉	ヒノキ
		239	R 86	櫛	SE201	平安時代前葉	イスノキ
238	R 87	曲物	SE201	平安時代前葉	ヒノキ		
	R 89	曲物底板	SE201	平安時代前葉	ヒノキ		
第14次-10	6丁目北第1	133	W 1	扇子骨	SE201	平安時代中葉	ヒノキ
			W 2	板材	SE201	平安時代中葉	ツガ属
			W 3	板材	SE201	平安時代中葉	モミ属
			W 4	板材	SE201	平安時代中葉	クスノキ
			W 5	丸杭	SE201	平安時代中葉	コナラ属アカガシ亜属
			W 6	板材	SE201	平安時代中葉	クスノキ
			W 7	板材	SE201	平安時代中葉	クスノキ
			W 8	板材	SE201	平安時代中葉	クスノキ
			W 9	板材	SE201	平安時代中葉	アジサイ属
			W 10	曲物	SE201	奈良時代-平安時代	ヒノキ
			W 11	井戸枠	SE201	平安時代中葉	クスノキ
			W 12	柱根	SF303	奈良時代-平安時代	ヒノキ
			W 13	井戸枠	SE201	平安時代中葉	クスノキ
			W 14	割材	SE201	平安時代中葉	カヤ
			W 15	くり抜き材	SE201	平安時代中葉	ヒノキ
			W 16	井戸枠	SE201	平安時代中葉	クスノキ
		第14次-12	5丁目北第1	R 39	柱痕	SB201-P14	
R 40	柱痕			SB201-P15		奈良時代-平安時代	コウヤマキ
第14次-18	6丁目北第1	W 001	角材2	SE101上層		平安時代末	モミ属
		W 002	角材3	SE101上層		平安時代末	モミ属
		W 003	角材4	SE101上層		平安時代末	モミ属
		W 004	角材5	SE101上層		平安時代末	モミ属
		W 005	板6	SE101上層		平安時代末	モミ属
		W 006	板7	SE101上層		平安時代末	ツガ属

調査次数	調査地区	遺物番号	取り上げ番号	遺物名	出土遺標	時期	樹種		
第14次-18	6丁目北第1		W 007	板8	SE101上層	平安時代末	モミ属		
			W 008	板9	SE101上層	平安時代末	モミ属		
			W 009	部材10	SE101	平安時代末	マツ属(雑草葉)		
			W 010	板11	SE101上層	平安時代末	モミ属		
			W 011	板12	SE101上層	平安時代末	ツガ属		
			W 012	板13	SE101	平安時代末	モミ属		
			W 013	板14	SE101	平安時代末	ツガ属		
			W 014	板15	SE101	平安時代末	モミ属		
			W 015	板16	SE101	平安時代末	モミ属		
			W 016	板17	SE101	平安時代末	モミ属		
			W 017	板18	SE101	平安時代末	モミ属		
			W 019	板19	SE101	平安時代末	モミ属		
			W 020	板20	SE101	平安時代末	モミ属		
			W 021	板	SE101	平安時代末	モミ属		
			134	W 022	井欄材(南)丸	SE101	平安時代末	モミ属	
			135	W 023	井欄材(北)丸	SE101	平安時代末	モミ属	
			136	W 024	井欄材(東)板	SE101	平安時代末	モミ属	
			137	W 025	井欄材(西)板	SE101	平安時代末	ヒノキ	
			131	W 026	曲物	SE101	平安時代末	ヤブツバキ	
				W 027	端部加工丸棒	SE101	平安時代末	ヤブツバキ	
				W 028	端部加工丸棒	SE101	平安時代末	マツ属(雑草葉)	
				W 029	角材	SE101	平安時代末	モミ属	
				W 030	角材	SE101	平安時代末	モミ属	
				W 031	板	SE101	平安時代末	モミ属	
				W 032	板材	SE101	平安時代末	モミ属	
				W 033	板材	SE101	平安時代末	モミ属	
				W 034	板材	SE101	平安時代末	モミ属	
				W 035	板材	SE101	平安時代末	モミ属	
				W 036	板材	SE101	平安時代末	モミ属	
				W 037	板材	SE101	平安時代末	モミ属	
				W 038	板材	SE101	平安時代末	モミ属	
				W 039	板材	SE101	平安時代末	モミ属	
				W 040	板材	SE101	平安時代末	モミ属	
				W 041	角材	SE101	平安時代末	モミ属	
				W 042	板材	SE101	平安時代末	モミ属	
				W 043	角材	SE101	平安時代末	マツ属(雑草葉)	
				W 044	角材	SE101	平安時代末	マツ属(雑草葉)	
				W 045	角材	SE101	平安時代末	モミ属	
				W 046	角材	SE101	平安時代末	ツガ属	
				132	W 047	曲物(板)	SE101	平安時代末	サワラ
				132	W 048	曲物(板)	SE101	平安時代末	サワラ
第16次	6丁目北		R 77	柱板	SP166	奈良時代-平安時代	コウヤマキ		
第18次-2	6丁目北		W 001	礎板	SP319	奈良時代	コウヤマキ		
			W 002	礎板	SP329	奈良時代	モミ属		
第32次-1	5丁目南第2		R 033	柱材	P112	鎌倉時代	コウヤマキ		
			R 079	柱根	P138	鎌倉時代	コウヤマキ		
			R 080	柱根	P133	鎌倉時代	針葉樹		
			R 081	柱根	P134	鎌倉時代	コウヤマキ		
			R 112	木片	SK201	古墳時代初期	クスノキ		
			R 146	礎板?北側 礎板?南側	P160 P160	奈良-平安時代 奈良-平安時代	ヒノキ コウヤマキ		

表3 時期別・用途別種類構成

時期・用途	樹種	複雑管束虫属	ツガ属	スギ	コウヤマキ	ヒノキ	サワラ	ヒノキ科	カヤ	針葉樹	アカガシ亜属	ツブラジイ	スタジイ	クスノキ	クスノキ科	ヤブツバキ	サカキ	ヒサカキ	イスノキ	アジサイ属	カエデ属	合計
		モミ属																				
古墳時代初期	木片													1								1
古墳時代後期 (6世紀)	柱束				2																	2
奈良時代	柱根				3																	3
	礎板	1			1																	2
	板			1	1																	2
	杭											1						3				4
	曲物井戸枠					1																1
奈良時代~平安時代	柱根				1	1																2
	礎板				1	1																2
	曲物					1																1
平安時代前葉 (9世紀前半)	板材				5												1					6
	井戸枠	2		20	3		1															26
	杭		1	4						2				1							1	9
	礎																		1			1
	曲物					1																1
	曲物底板					3																3
	丸木材											1				1						2
平安時代中葉 (10世紀)	板材	1	1											4					1			7
	井戸枠												3							1		3
	くり抜き材					1																1
	扇子骨					1																1
	丸杭										1											1
平安時代末 (12世紀)	割材								1													1
	角材	2	8	1																		11
	板	1	23	3																		27
	井筒材	3			1																	4
	曲物															1						1
	曲物側板						1															1
	曲物底板						1															1
端部加工丸枠	1														1						2	
平安時代	木片(炭化)				1																	1
	板材				2																	2
鎌倉時代	柱材				3				1													4
鎌倉時代中頃 (13世紀末~14世紀初)	板材			6		1																7
	礎板	1	2		1	4	1						1									10
	柵	1																				1
	刀子削片					2																2
	手斧削片										2											2
	曲物					1																1
近世以降	桶状井戸枠				1																	1
合計		5	39	14	1	40	28	3	1	1	1	5	1	2	8	1	2	2	3	1	1	160

挿図写真7 木材(1)



1.マツ属複維管束亜属 (14次-10 W009)

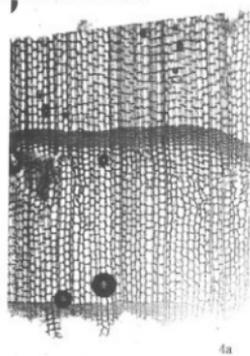
2.モミ属 (14次-9 R74)

3.ツガ属 (13次 R13)

a: 木目, b: 柎目, c: 板目

200 $\mu$ m: a  
200 $\mu$ m: b, c

挿図写真8 木材(2)



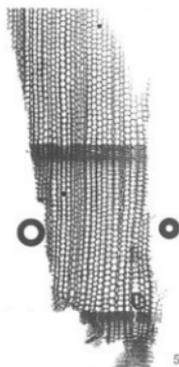
4a



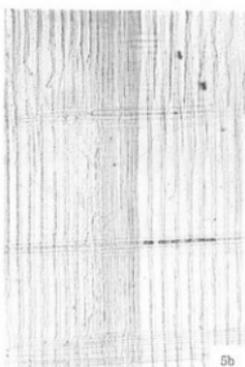
4b



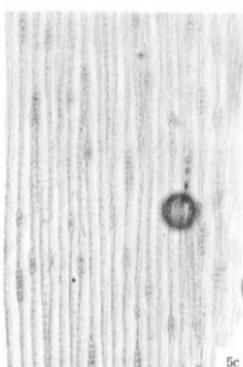
4c



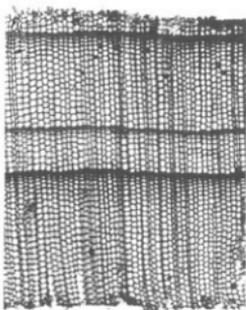
5a



5b



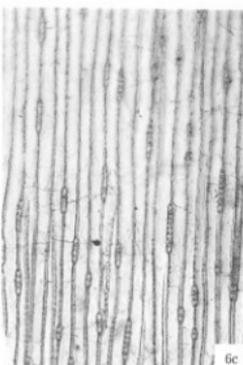
5c



6a



6b



6c

4.コウヤマキ (14次-9 R15)

5.ヒノキ (13次 R27-1)

6.サワラ (14次-18 W047)

a: 木目, b: 柎目, c: 板目

200 $\mu$ m: a  
200 $\mu$ m: b, c